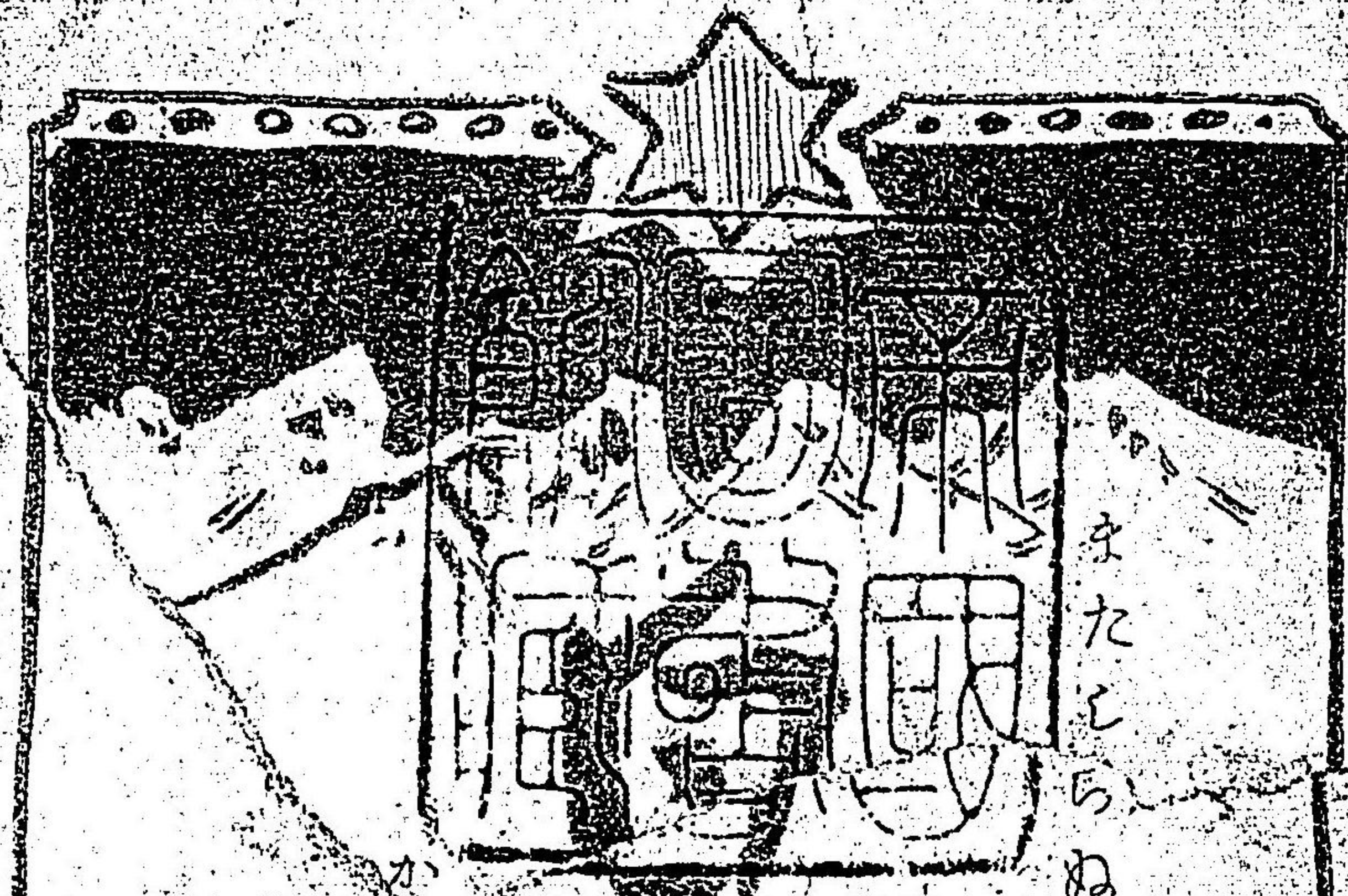


2  
61

水黑



またしらぬ野山のすゑに

# 山黒水

あぐかれて

かほるくま木にあさをみるかな

瓊玉和歌集



緒言

一昨夏暑中休暇を好機として東部西比利亞行を企つ七月廿八日東部を去つてより再び都門に相見ゆるに至る迄日數五十四日行程海路千百七十二哩陸路約六百里朝鮮國釜山元山より東部西比利亞に於ける沿海州アムール州及び滿州黑龍江省の三領土に跨る固より短時日の行旅其真相を得る能はずと雖も時に應じ緒に隨ひ筆を下せる者輯まつて篇を成す依て是を白山黒水と題す隋書唐書に見えたる古名に據る者也

一篇中收むる所の「西比利亞遠征紀行」は我が同行の學友見玉法學士の筆に成り「西比利亞の關」は秋田文學士の艶麗なる筆を煩はして昨秋帝國文學紙上に掲載せられ「その他は著者意見の一斑を表示するのみ添ゆる所の「西比利亞鐵道の過去現在及未來」は主としてウラヂミール氏の近著「太平洋上に於ける露國及び西比利亞鐵道」に據り更らに見聞する所に隨て其工事の現況既成線の狀態を詳にせんことを努めたる者也

(1)

一亞細亞の東方白山の陰黒水の濱肅慎千年の墟落一變して眞に露化せんとす清人僅に滿州白山破殘の地を維持して而かも蒙昧今や滿州の地は戰亂の衝と化し我が足を停めたるブラゴウエシチェンヌク、ハヴロフヌク、ニコリスク及び浦港の地は砲煙の裡に葬られんとす滿人の勁猛一時能く露兵を破る者あるも最後の結果は宗廟の地を失ふに終らん乎歲月を開する纒かに一歳黒龍興安の天地其形勢を一變せんとす何ぞ感慨に堪へんや此一小冊子西比利亞古今の天地を紹介するに足るあらば著者の幸榮と爲す所也。

明治卅三年八月上旬

函嶺堂ヶ島客舎に於て

著 者 識

西比利亞漫遊 白山黒水目次

卷 首

露國の眞相發揮の急務	一
西比利亞に對する世人の感想	六
軍港としての浦鹽斯德	一三
西比利亞に於ける殺人事件	一五
西伯利亞遠征紀行	
一、西比利亞問題解釋の急務	三三
二、西比利亞觀察の特質	三四
三、西比利亞に至る航路	三五
四、西比利亞の氣候	二八
五、朝鮮東海岸	二九
釜山の航海權	二九
釜山の將來	二九
開成學校	二九
元山津	二九
伊致	二九
貝氏	二九
咸津の近狀	二九
朝鮮東海岸に對する概論	二九
六、西比利亞の過去	五一
露國の一成一敗	五一
露國黒龍江の占領	五一

七、東部西比利亞の現在……………旅行日誌……………浦港に着す……………浦港の状態……………既成西比利亞鐵道……………ハムロフスク府……………警部長の親切……………ハムロフスクの將來……………黒龍江……………黒龍江水誌……………經濟上に於ける黒龍江……………黒龍江に關する國際法問題……………黒龍江を溯る一週間……………我師我友に會す……………アラゴウエシチエンスク府……………知事の優待……………愛琿行……………歸途に就く……………ニコリスク行……………再び浦港に歸來す……………浦港を發す……………五九

八、東部西比利亞に對する社會的觀察……………露國人の状態……………朝鮮人並に支那人の状態……………在留日本人の状態……………日本正業者の振はざる原因……………在留賤業者の状態……………露人の日本人に對する感情……………九九

九、東部西比利亞の經濟的觀察……………西比利亞往復の航海業……………燃料問題……………農工業上の状態……………一一八

十、結論……………一二六

**白山黒水紀行**

一、釜山及び元山附近の史跡……………一三八

二、浦港博物館に於ける史的遺物……………一四四

三、ナルに發見せられたる永寧寺碑……………一四九

附アムール協會……………變子……………

四、ハムロフスク、警部長、博物館、圖書館、幼年校……………一七〇

五、黒龍江史論……………一七四

六、黒龍江の兩岸……………一八七

七、アラゴウエシチエンスク府……………一八九

八、愛琿城趾……………一九一

九、ア府見聞断片……………一九六

十、ニコリスクの史的觀察……………二〇三

**黒龍江畔に見たる住民**

一、朝鮮人……………二二〇

二、蠻子人……………二二一

三、滿州人……………二二四

四、チロチェン及びバマネクル人……………二二九

五、ゴリド人……………二三七

**人類學者の西比利亞及滿州踏査を望む**……………二四七

行餘錄

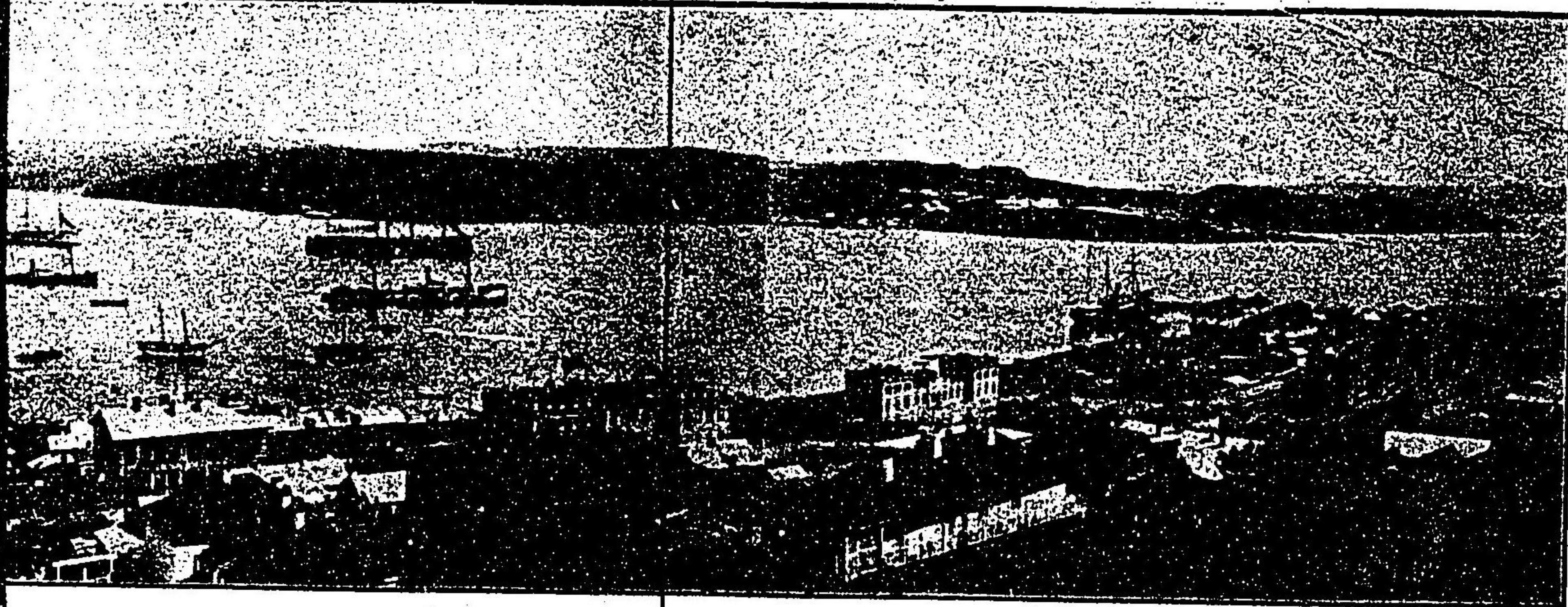
白衣の朝鮮人……………長白山……………朝鮮の外名「コレア」の起原……………西比利亞の關……………黑龍江上の一夕……………可憐の少女……………ア府在留諸氏を憶ふ……………二五六

附錄

西比利亞鐵道の過去現在及未來

西比利亞鐵道の沿革……………一  
東清鐵道の現況……………三三  
後貝加爾鐵道の開通……………三七  
既成烏蘇里鐵道……………三八  
西比利亞鐵道の將來……………四一

西比利亞漫遊 白山黑水目次終



浦 鹽 斯

行餘錄

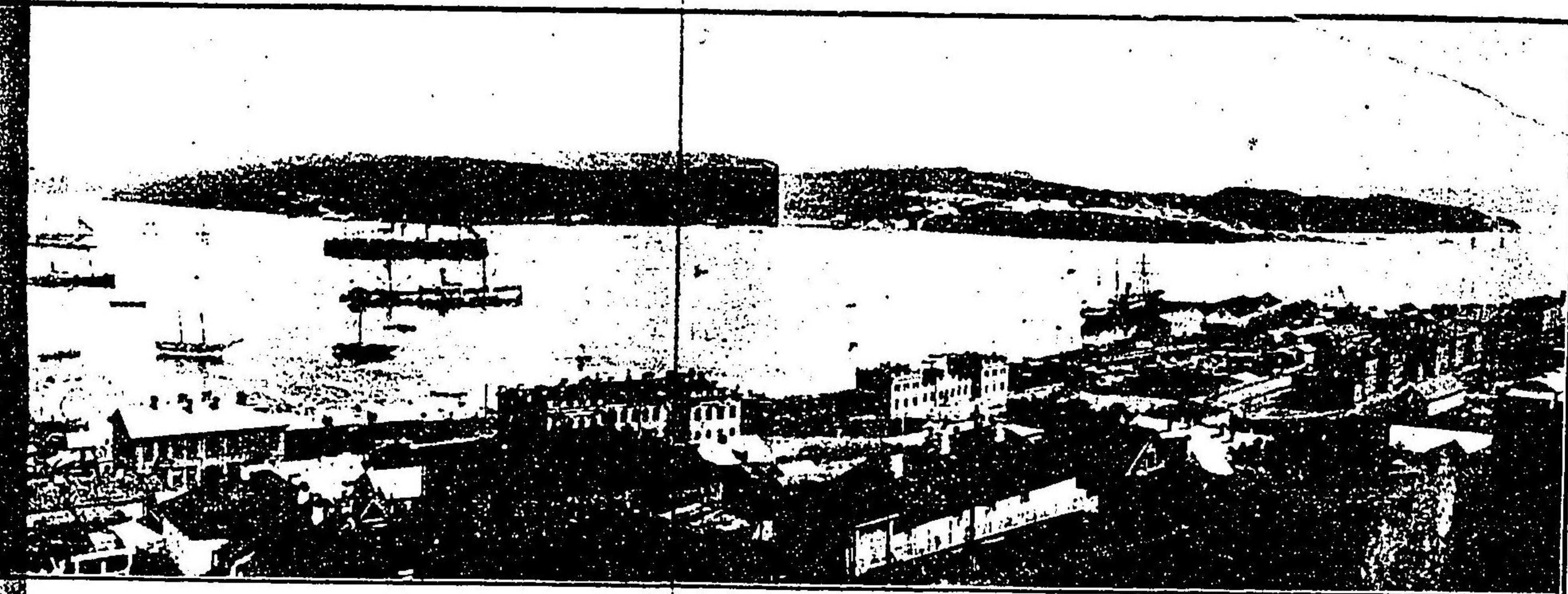
白衣の朝鮮人……………長白山……………朝鮮の外名「コレア」の起原……………西比利亞の闇……………黑龍江上の一夕……………可憐の少女……………ア府在留諸氏を憶ふ……………二五六

附録

西比利亞鐵道の過去現在及未來

西比利亞鐵道の沿革……………一  
 東清鐵道の現況……………三二  
 後貝加爾鐵道の開通……………三七  
 既成烏蘇里鐵道……………三八  
 西比利亞鐵道の將來……………四一

西比利亞漫遊 白山黑水目次終



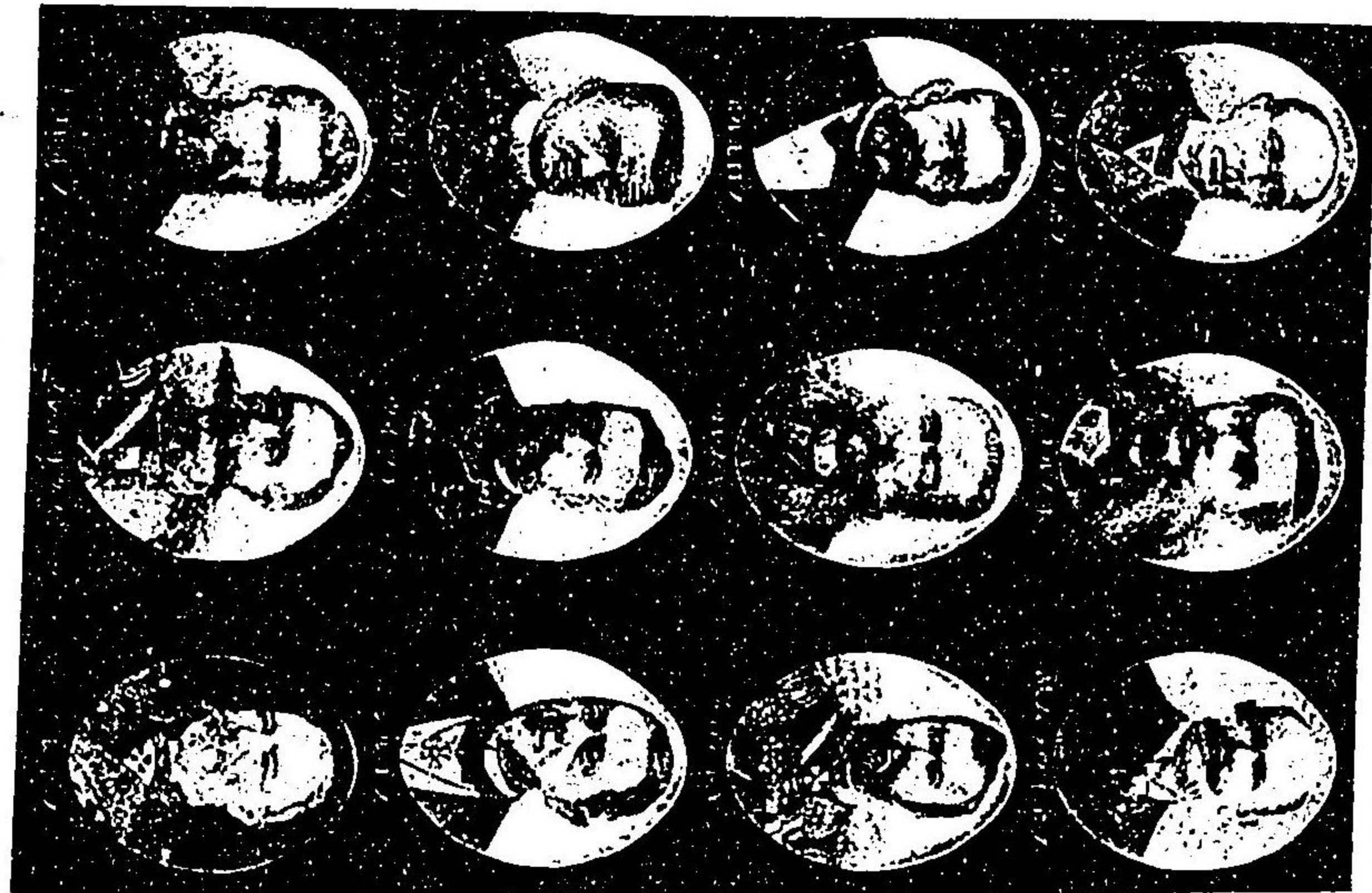
浦鹽斯



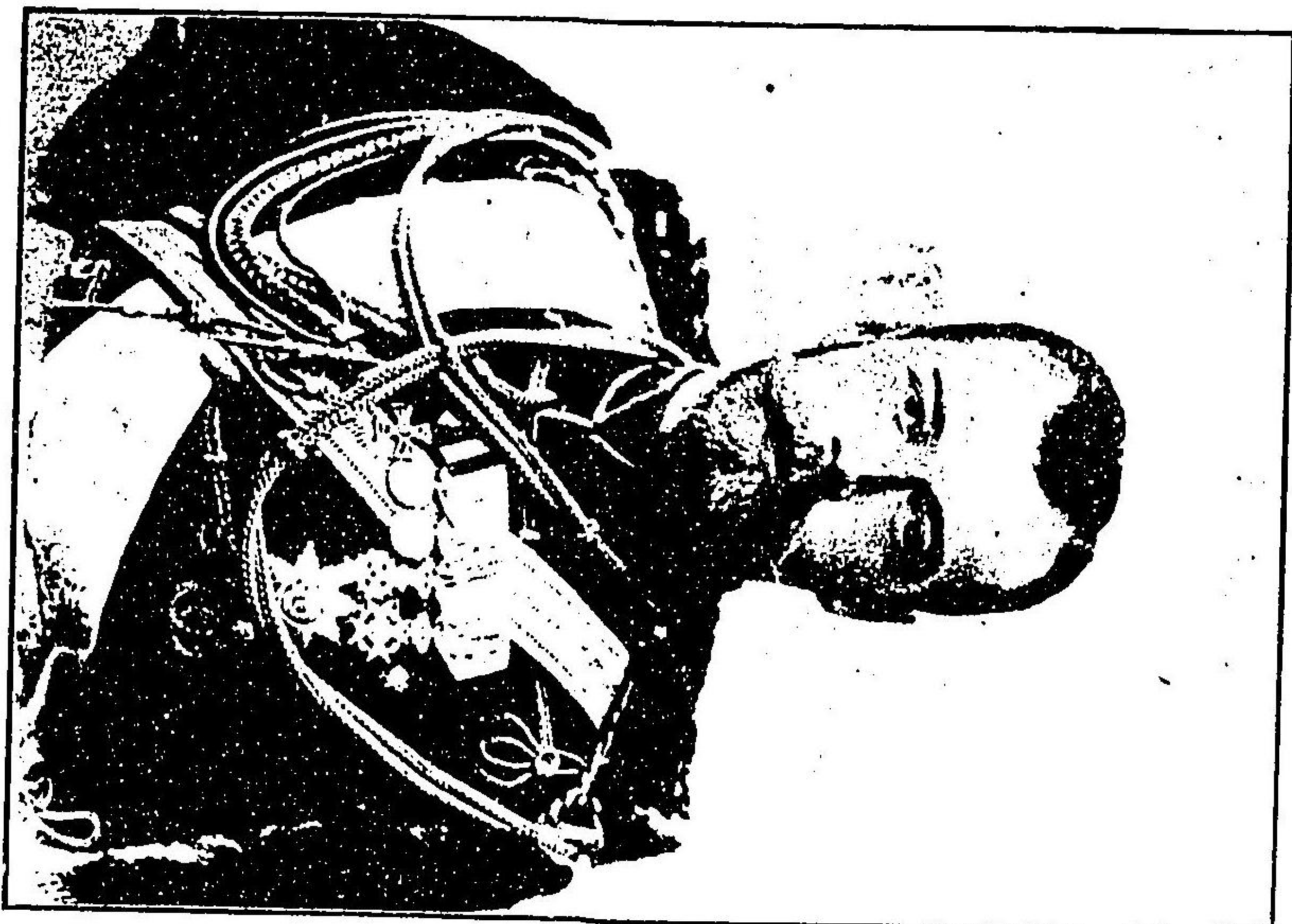
田中邦太郎製版

浦 鹽 斯 德 港 全 景

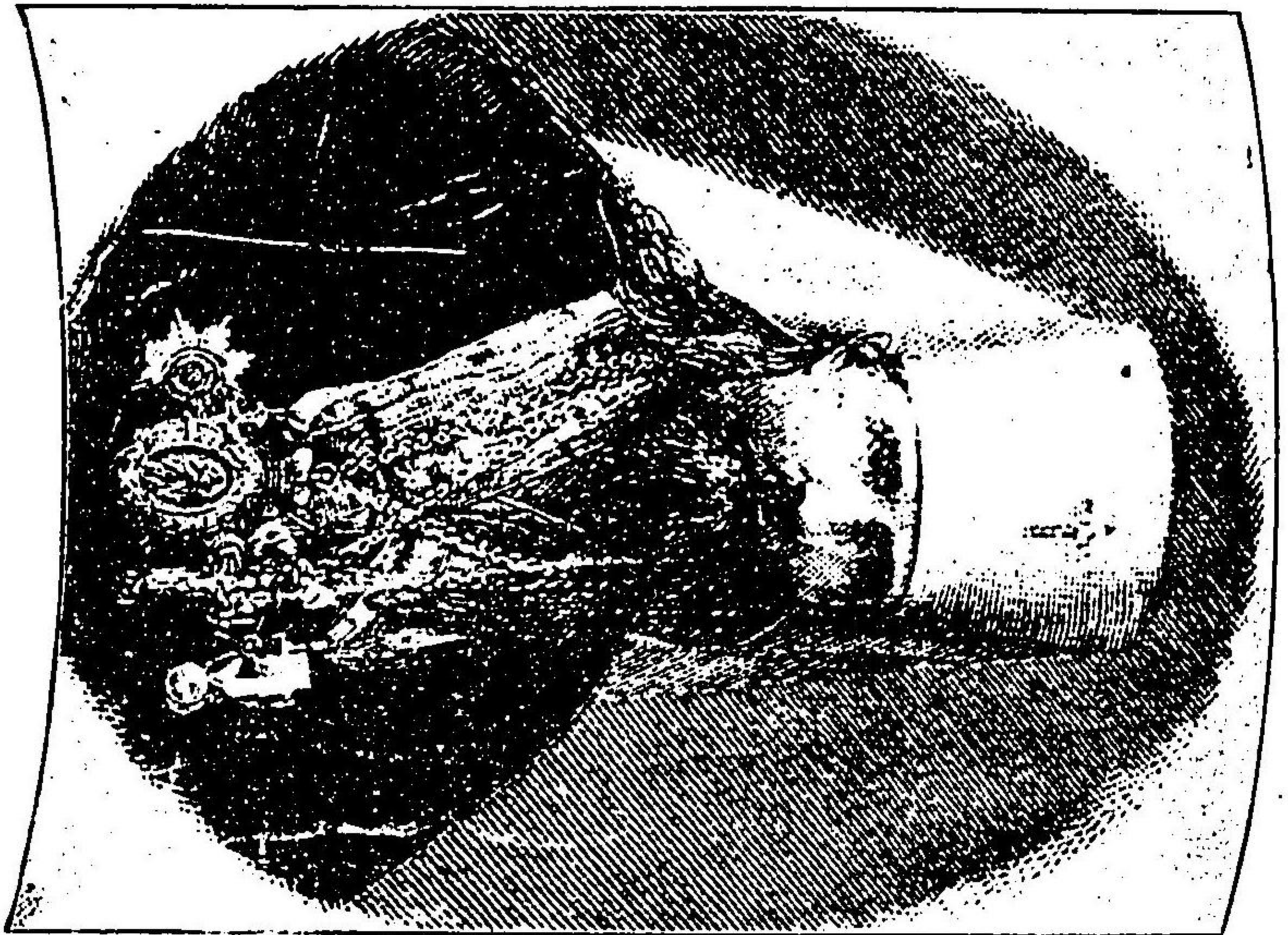




相 幸 二 十 國 露



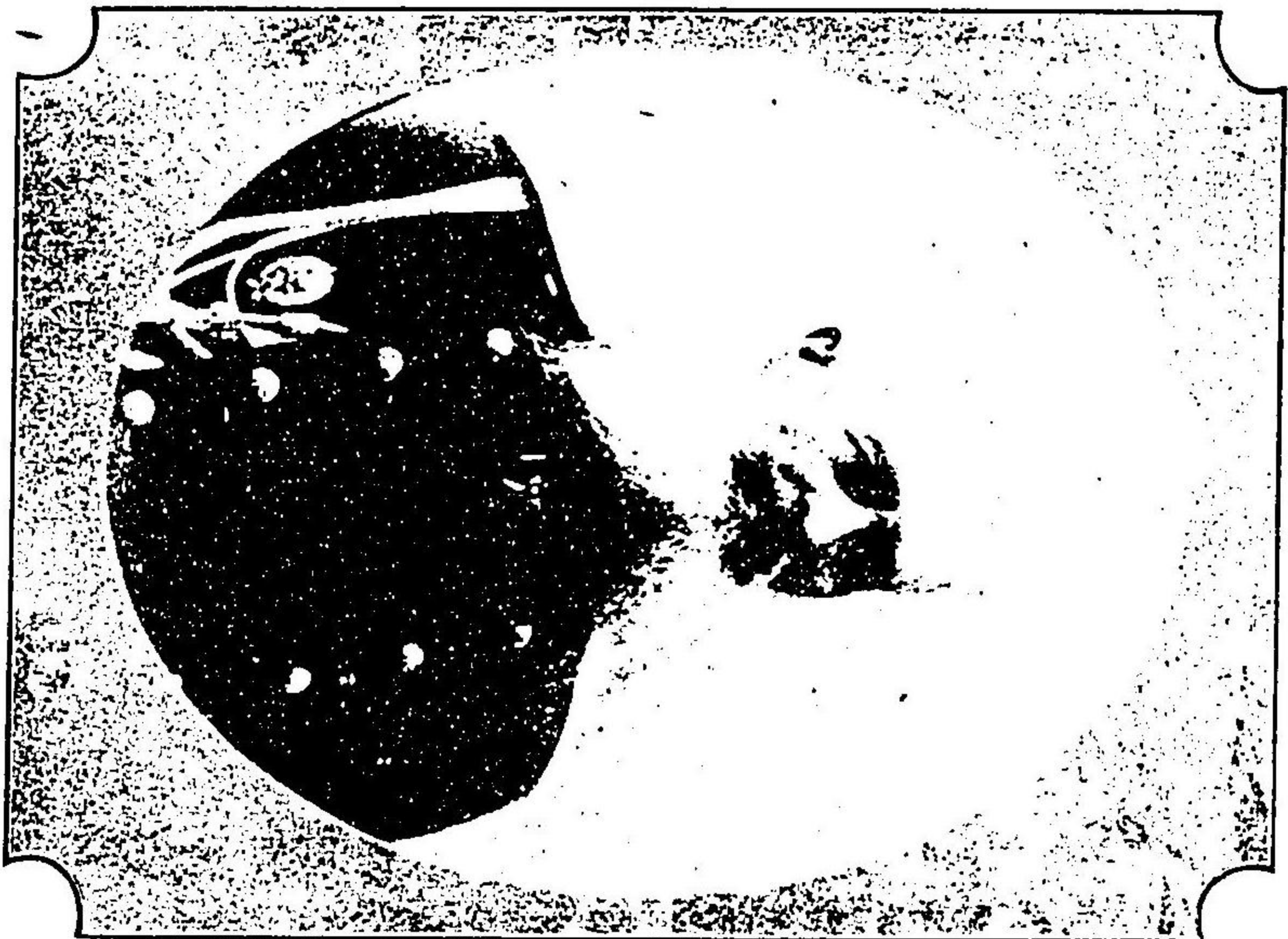
下 隆 世 二 第 ス ラ ヲ ニ 帝 皇 國 露



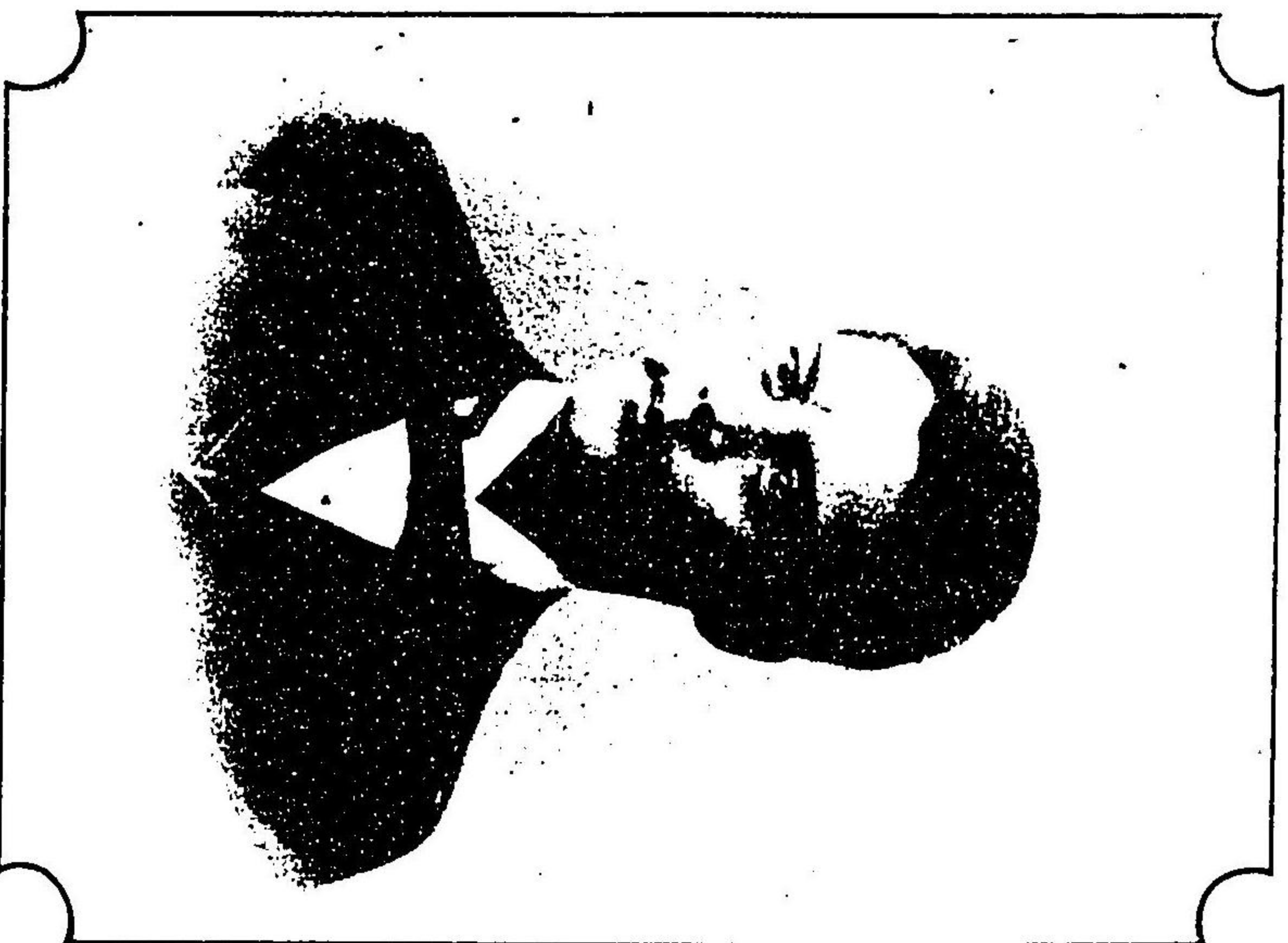
ルーミガラヤ正備大



督總亞利比西部東前  
アルコソロマ



著名の厚遇に於けるルーマニアの少将  
カリーヌスキ少将



西比利亞在留醫科  
金比山右衛門氏



ンリ - イタ



ズ - カスカ

女中學生徒服裝



某陸軍士官一族

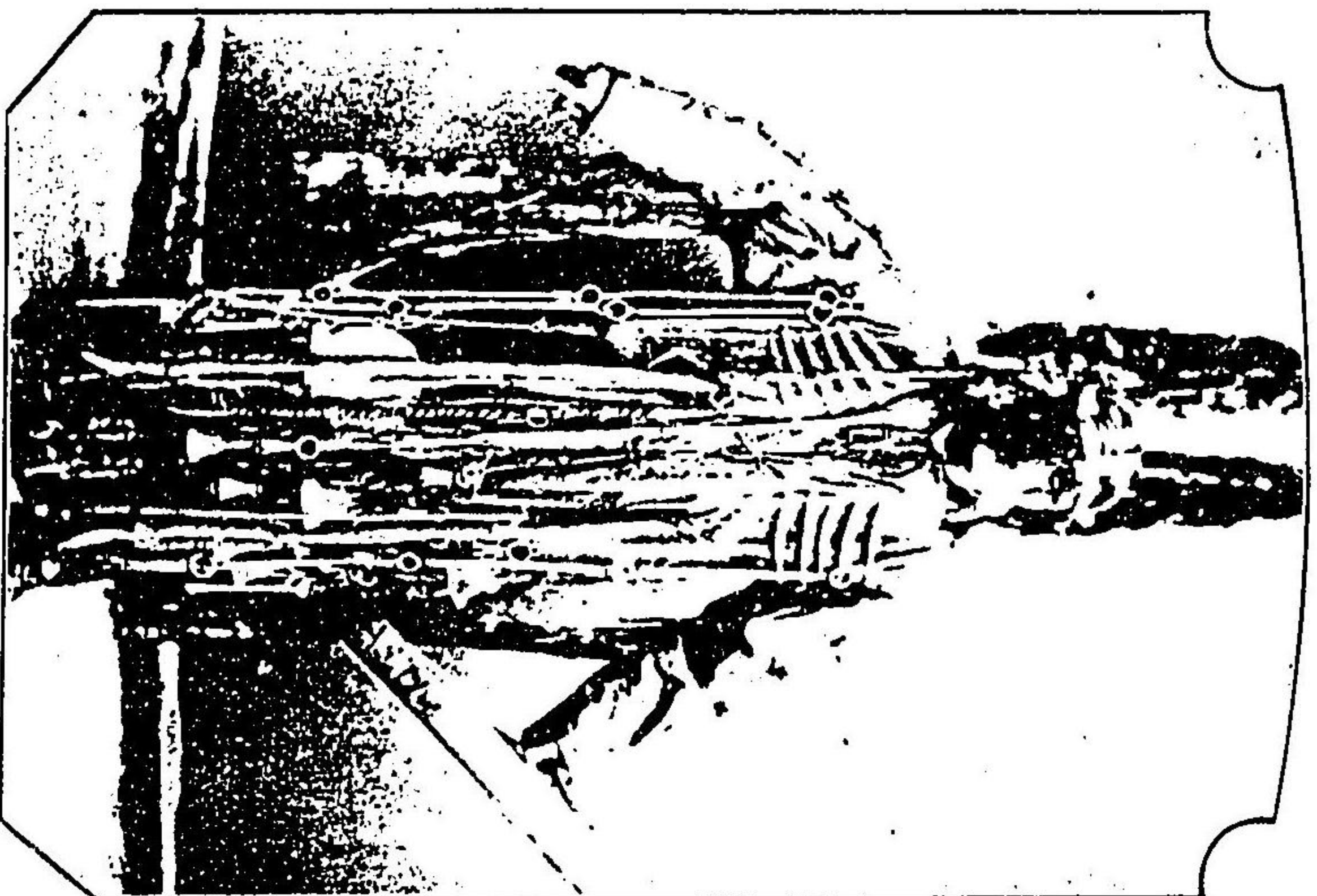


族種スーグンツ

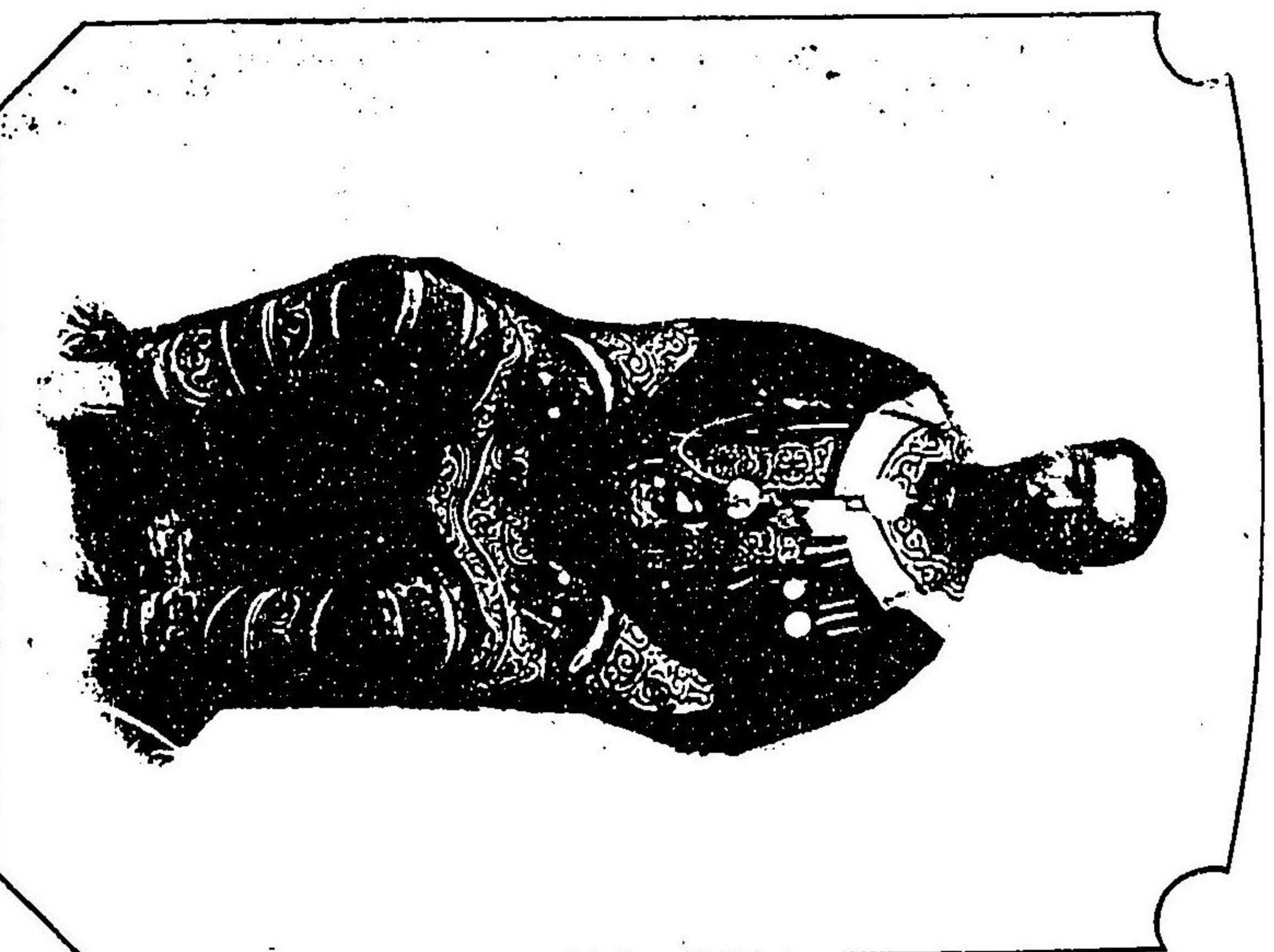


人土カツヤチムカ

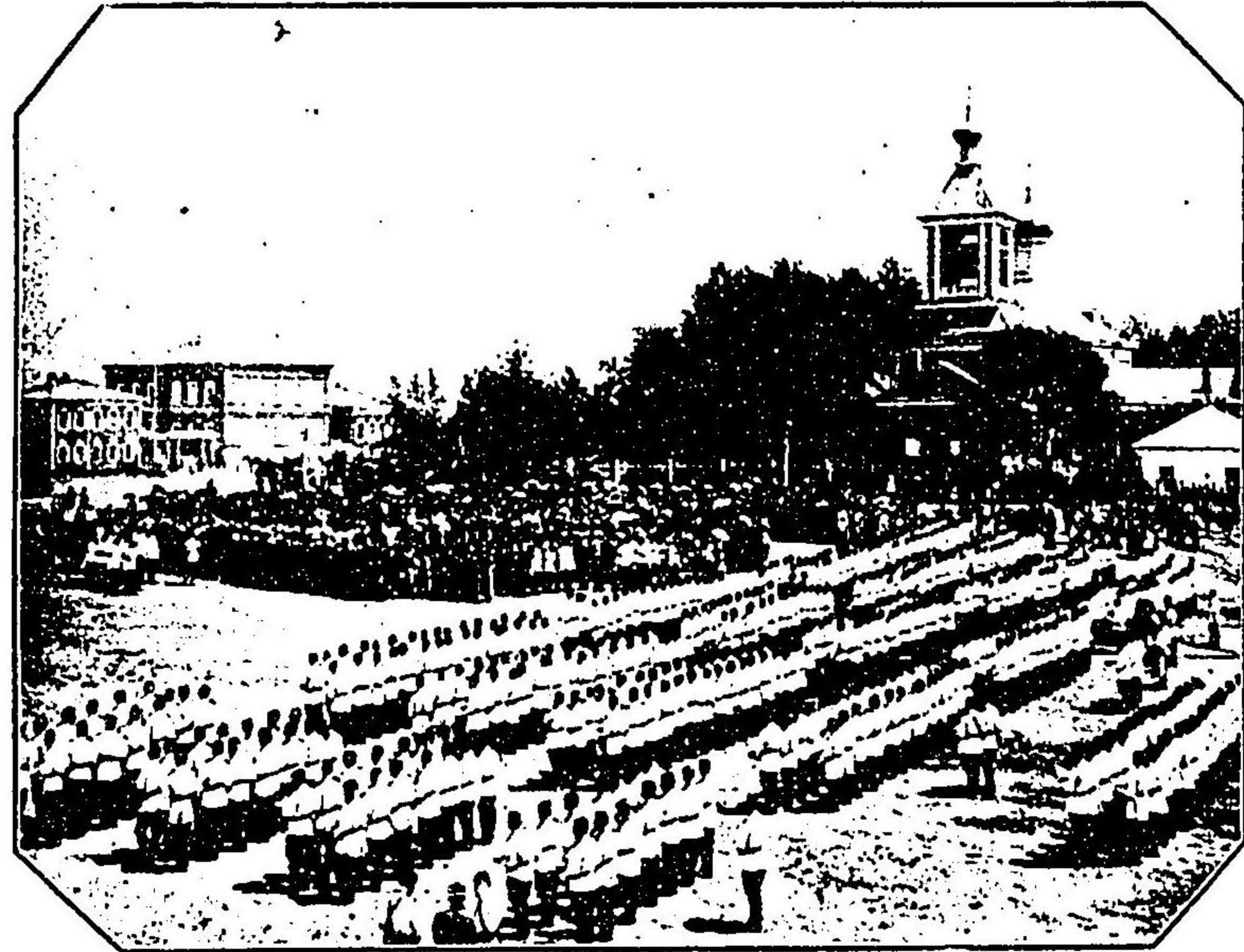
原田伊藤所印行



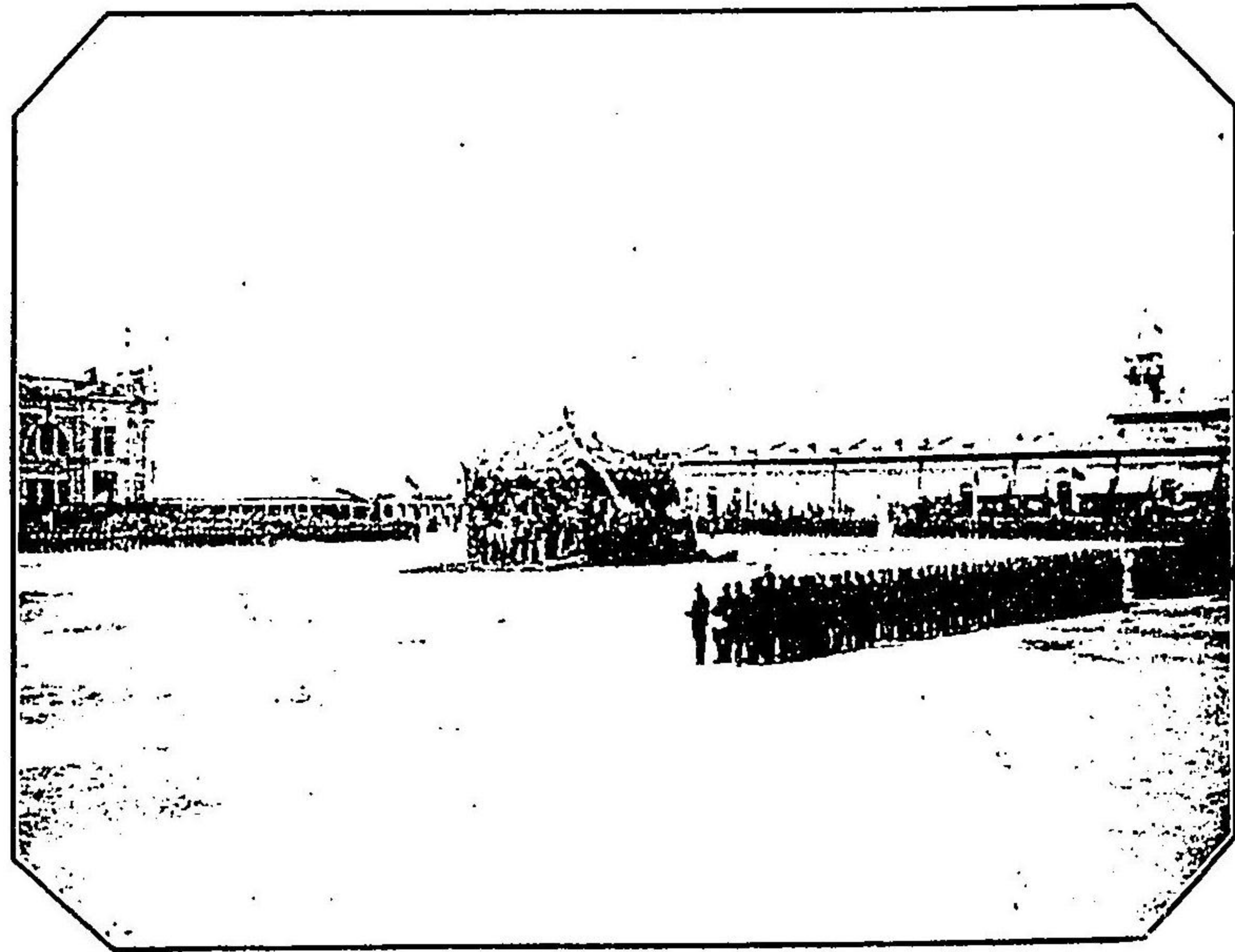
装異族種クツナリギ



長筒族種ドツリゴ

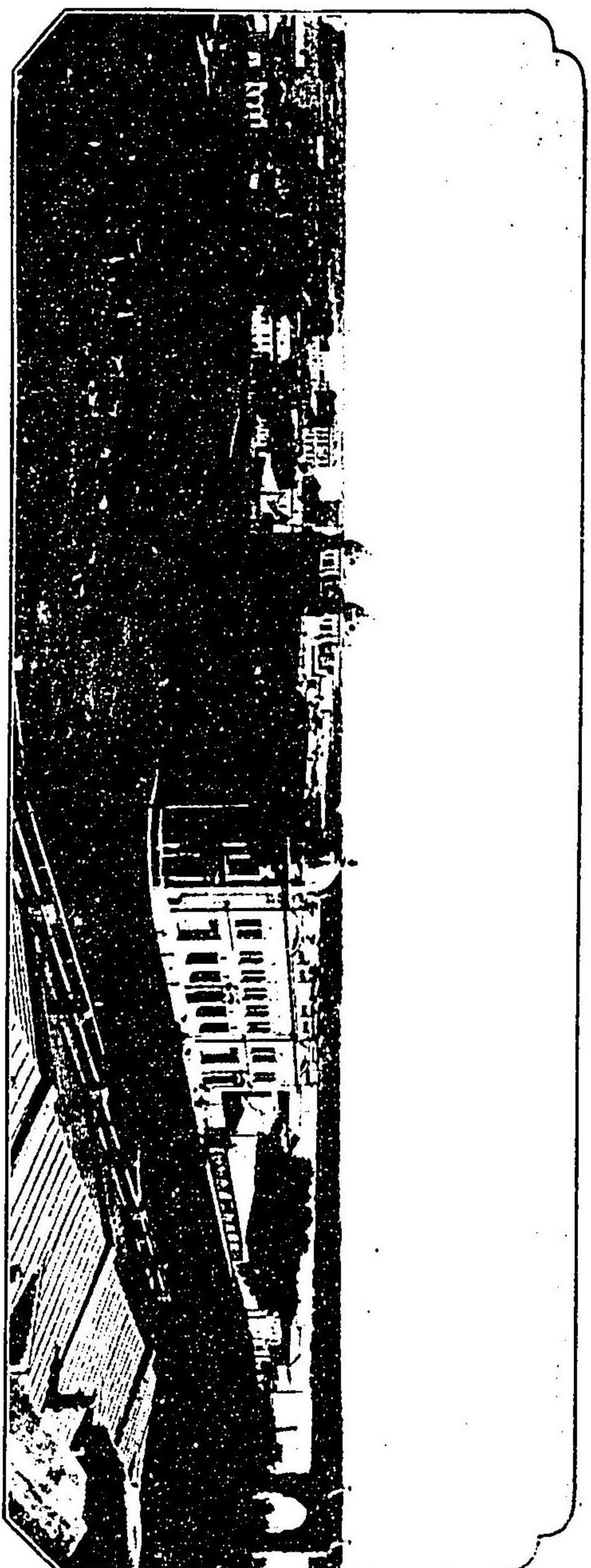


(て於に府ア)祭年百ンキユシブ豪文區露

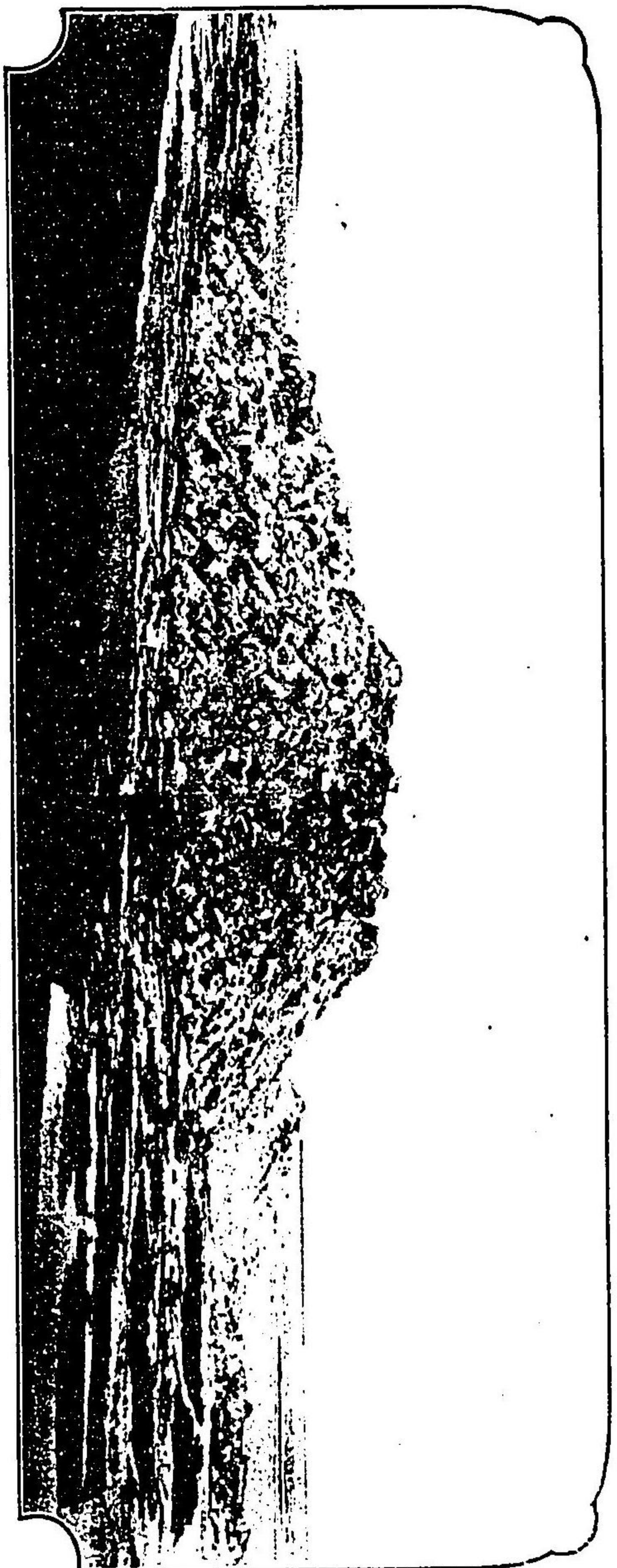


場 式 全





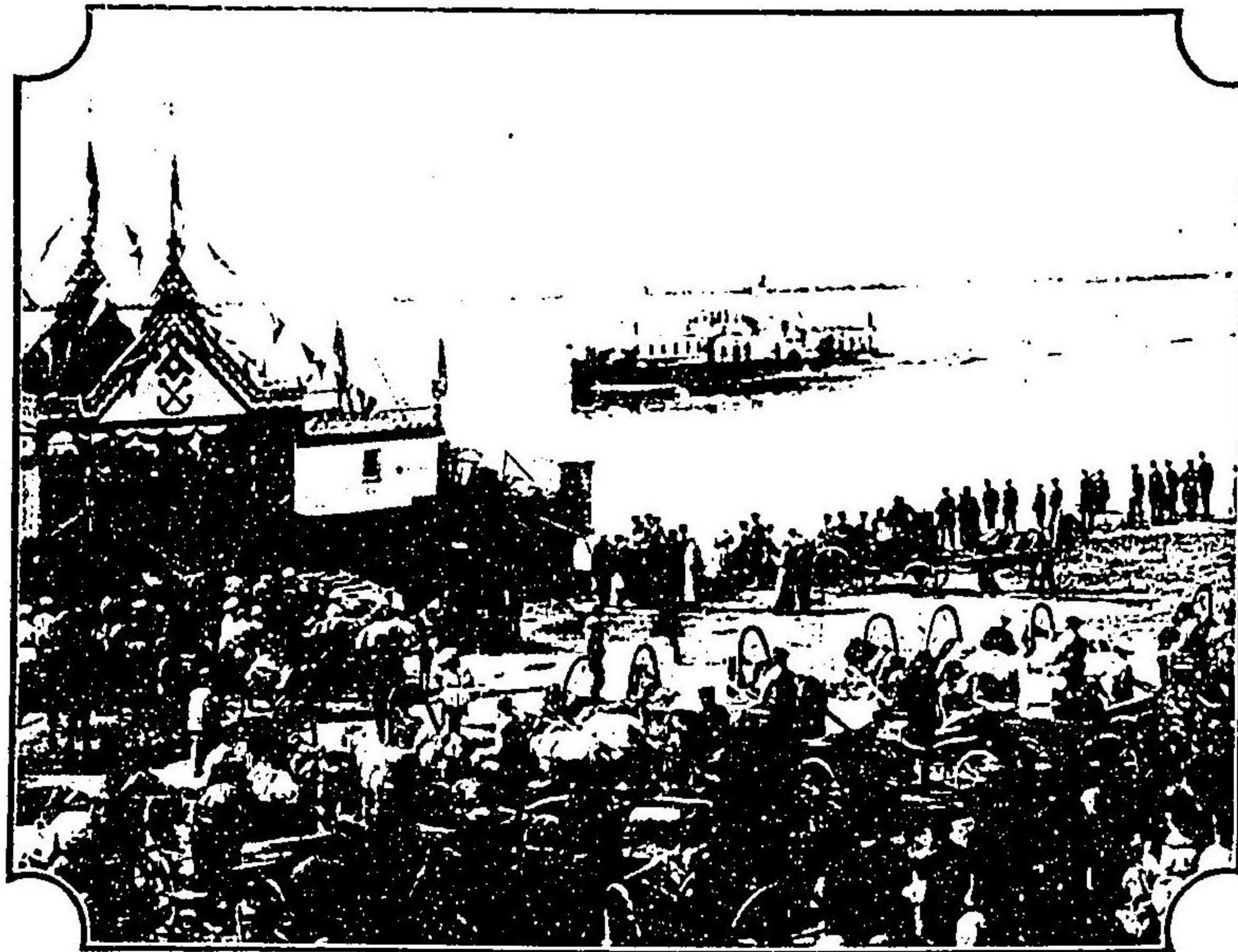
（む望を屯河黒州滿岸對）府クヌシエチエウラゴラフ



黒龍里江合點於於水山



望遠府クスフロム

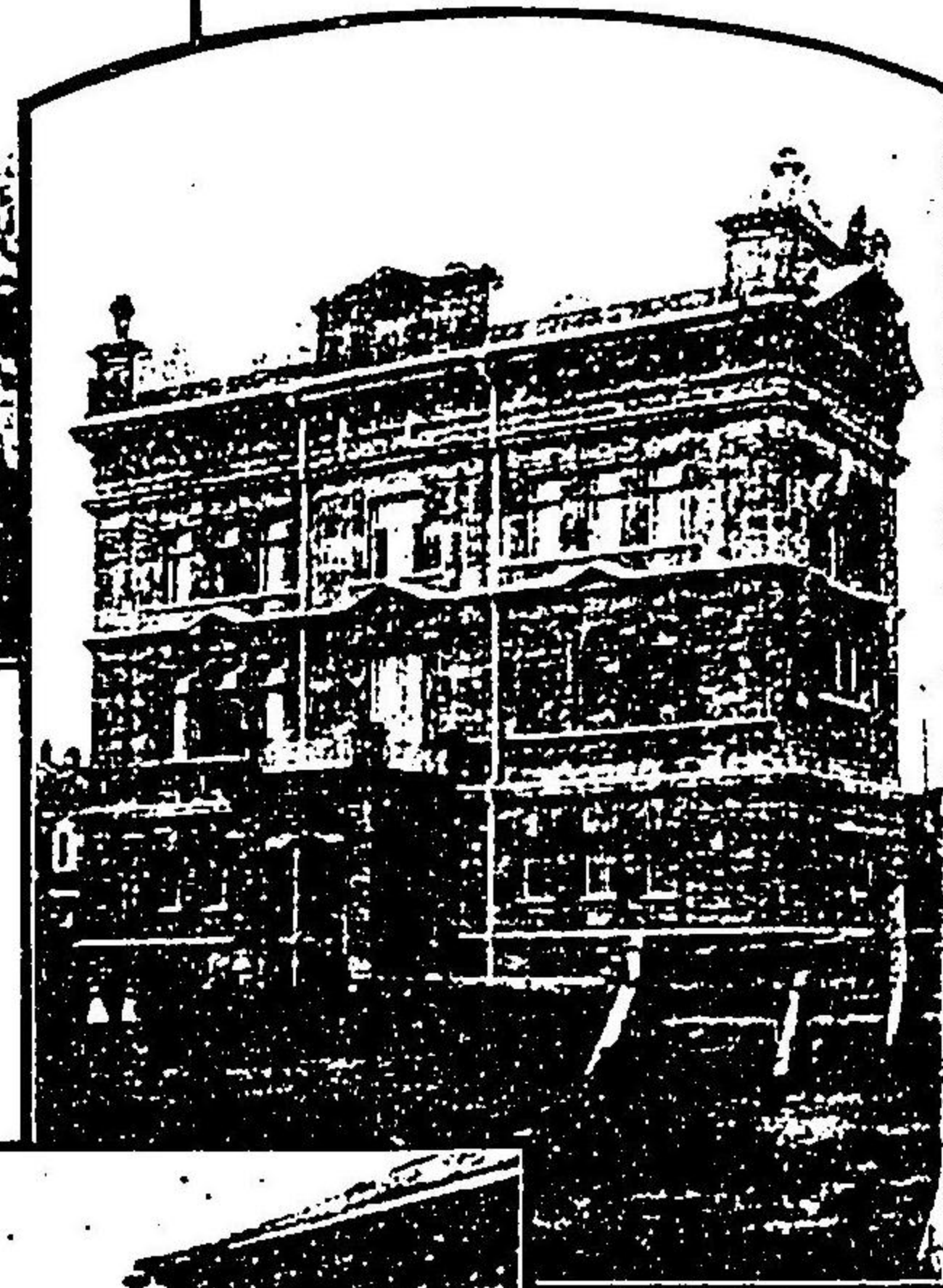


所着發船江龍黒全

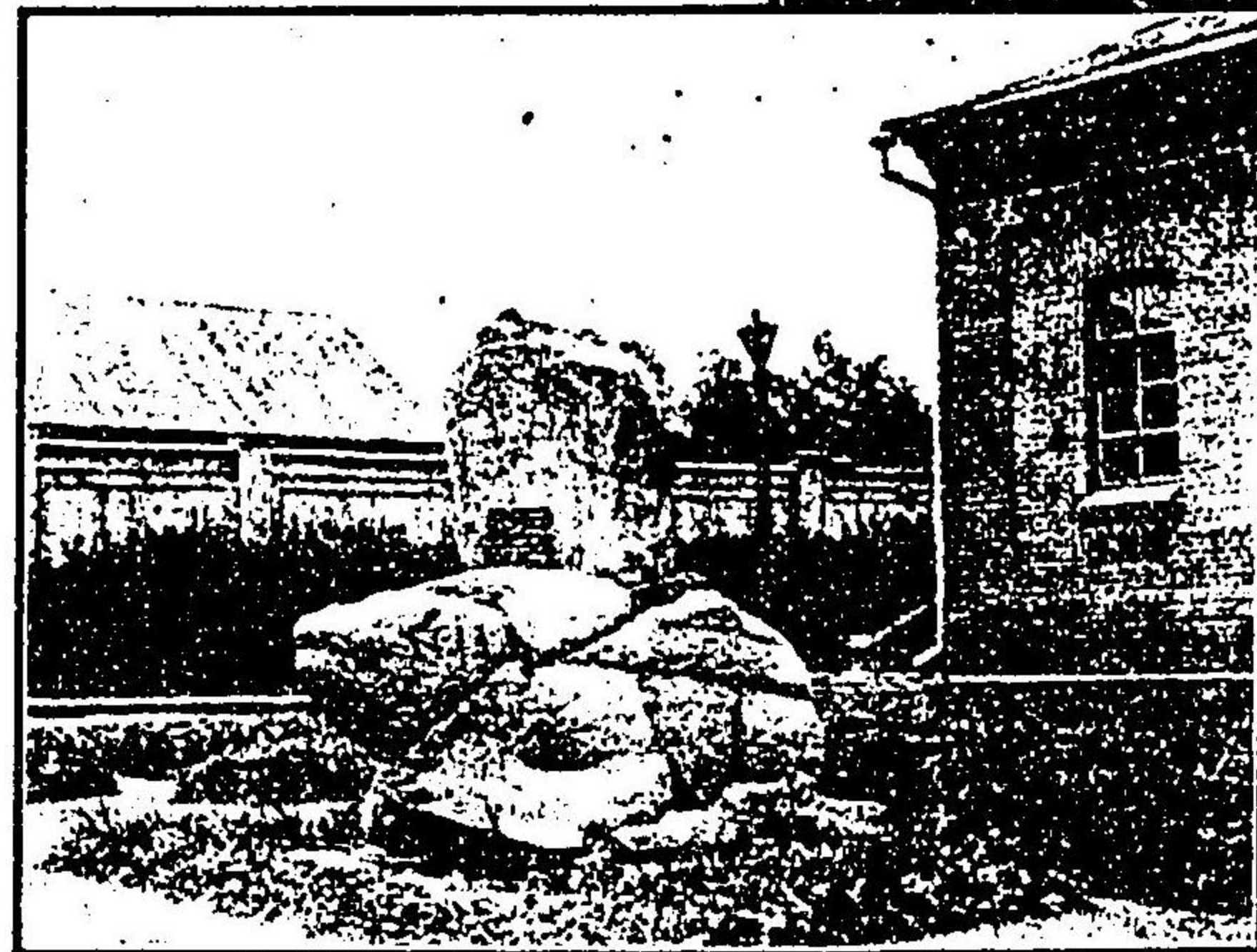
ハバロフスク公園の三偉観



ムラビエフ伯銅像



博物館



里俗義經の墓石



人 婦 州 滿



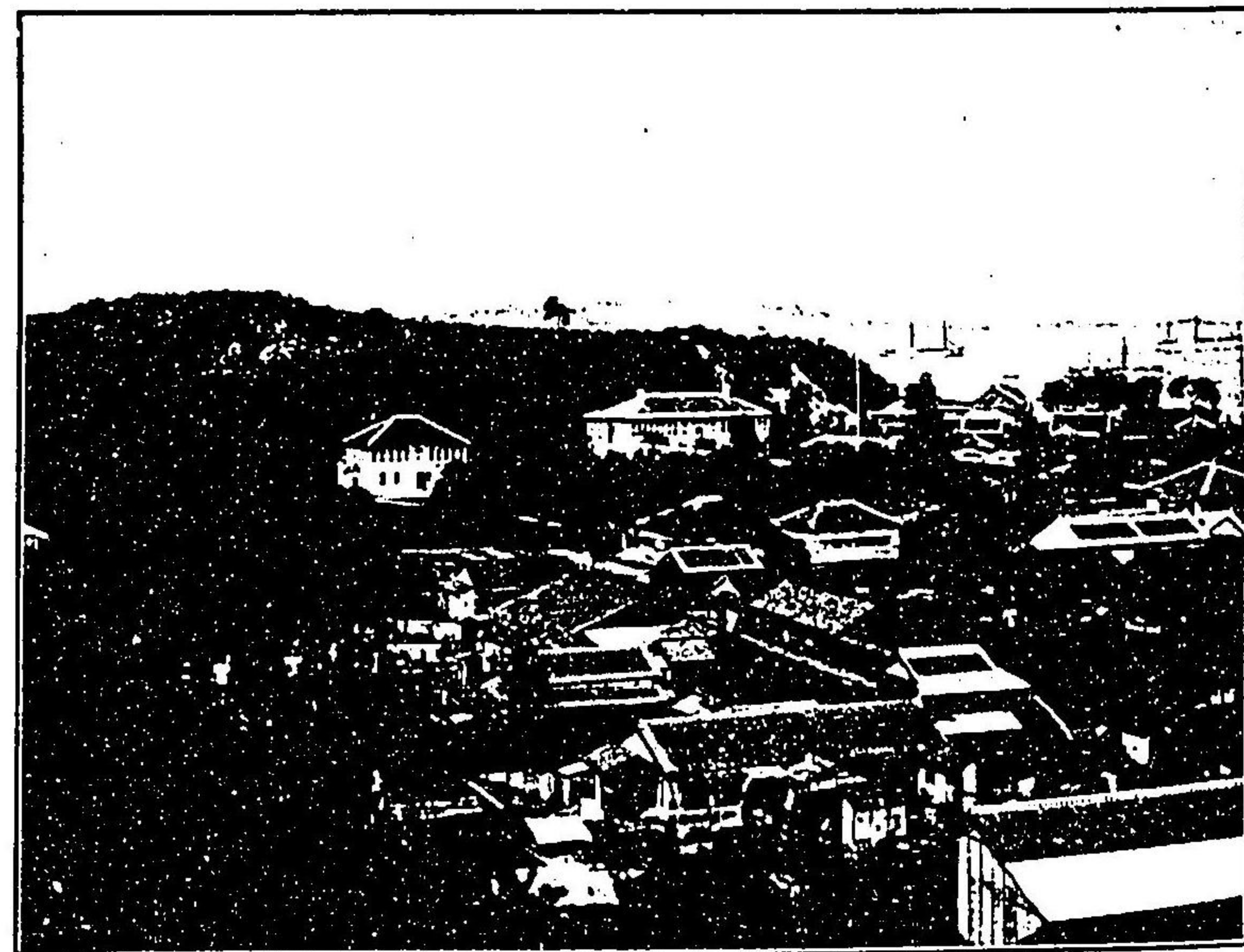
人 婦 國 露



人 婦 鮮 朝



地留居本日山釜國鮮朝

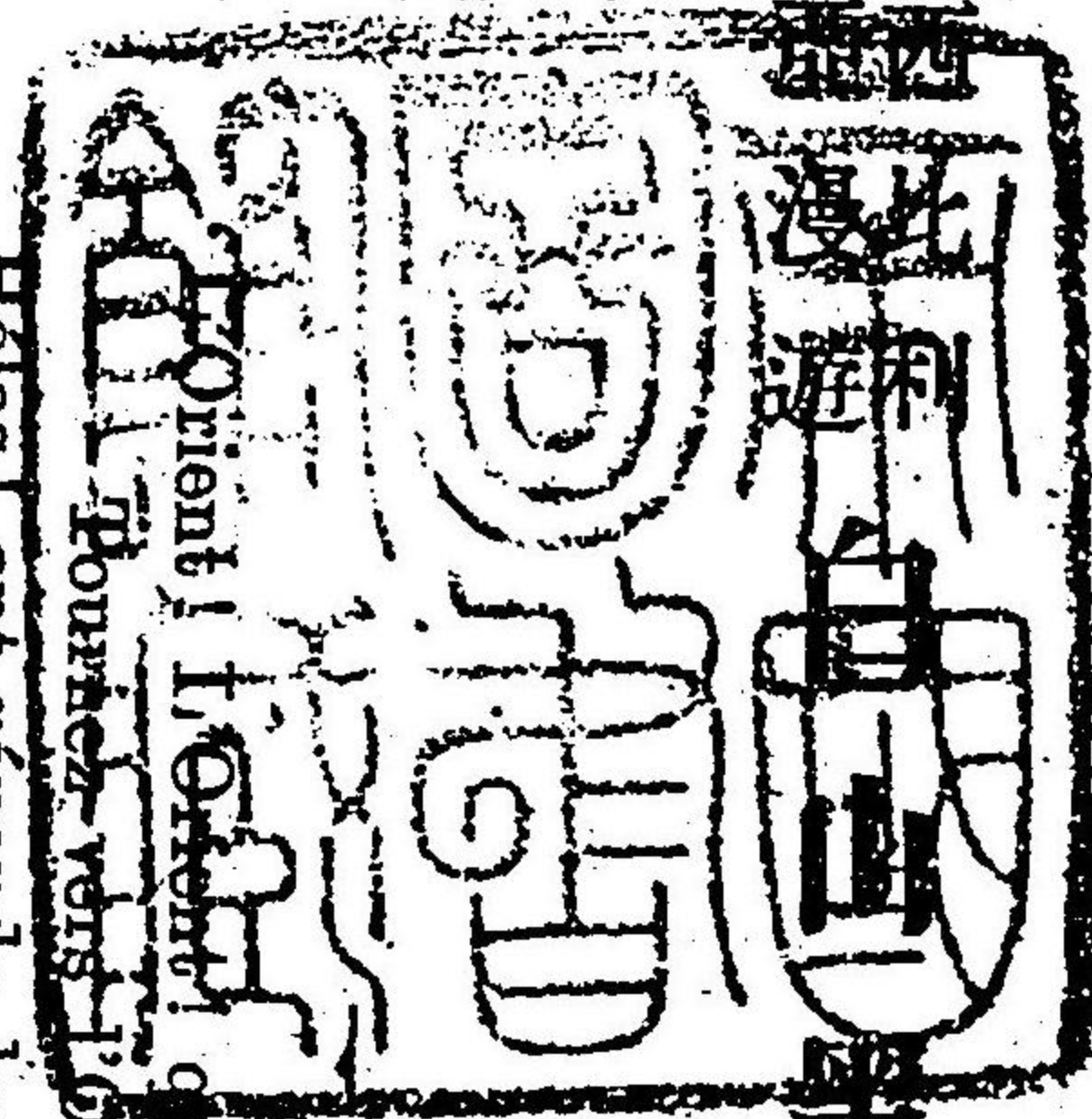


地留居本日津山元全

(1)

露國の眞相發揮の急務

國を地軸の北隅に建て、威を歐亞の二大陸に振ひ、列祖遠大の廟謨歴世  
臣民の霸氣終始一貫、萬古變ぜず、着々として其目的を遂行しつゝある  
者は夫れ露西亞帝國にあらざるか、其一舉一動は西歐にはた極東に波



石澤發身著

文學士石澤發身著

Orient! l'Orient! qu'y voyez-vous poètes?

Helas! ont répondu leurs voix longtemps muettes,  
Pour ce vers l'Orient vos esprits et vos yeux!

Nous voyons bien là-bas un jour mystérieux.

Victor Hugo: Chants de Crépuscule.

露國の眞相發揮の急務

動を及ぼし、世界の平和は其掌上に翻弄せらる、露國の真相發揮は方に目下の急務なり。

翻つて憶ふ、我國民にして露國の事情に通曉するもの果して幾何かあるよし通曉せざるまでも露國は如何なる方針を以て東方經營に全力を集中しつゝあるか、現今其經營は如何なる程度にまで進行しつゝあるかに至ても、或る特志なる學者政治家を除きては其數や寥々數ふべきのみ、然れども又憶ふ、露國の事情に通曉せざるは獨り我國民の罪のみにもあらざるを、固より我國民は其領土の近接と交渉の頻繁なるに依りて、他國人よりも一層彼の國情に精通すべき必要を有すと雖も、そは近々數十年間に起りたる事實にして、未だ我國が世界に於ける外交術に經驗少きと、世界の舞臺に現はれたるは近年のことにあるとの故を以て、彼の國情に疎なる者ありしは止を得ざる所なりと謂ふ可し、之に反して、ペーターテル以來常に其影響を感受しつゝある西歐人士が、比

較的露國に關する智識の缺乏せるに至ては、不思議の極と稱せざる可らざるなり、彼等は能く東方土耳其の國情を知悉せり、又能く西方亞米利加の状態に通ぜり、而かも等しく歐洲に位し、其距離も甚だ遠からざる此一大帝國に至ては、前二者に對する智識よりも、樹き者あるは何ぞや、是れ露國の風習制度言語人種との相違が西方歐羅巴との間に一大障壁を築きたるを以てなり、特に其政治宗教の差違は一層之を高からしめたる者あるなり、是の如くして吾人は屢々西歐人士が下の如き疑問を發せるを聞けり、曰く自然が露西亞をして此の如き大帝國たるの地位を得せしめたるか、或は其歴史が其人民をして此の如き大國民を形成するに至らしめたるかと、又曰く其人民は果して歐羅巴に屬する者なるか、はた亞細亞に屬すべき者なるか、彼等は生れながらにして我文物を嗜好するに足るべき同種屬なるか否、血族に於ても教育に於ても歐羅巴系統以外の者にあらざるか、恐らく彼等は生れながらにして



亞細亞人種なり、唯歐洲より借來れる衣服を以て之を蔽ふに過ぎざる者にあらざるか、此等の疑問は明に露人を以て西方ターターなる異名を附せしめしと同一徹に出づる者なり、然れども吾人は信ず露國は亞細亞的にも非ず歐羅巴的にもあらずと、若し此亞細亞的なる語を以て西歐人士が信ずるが如く野蠻なることを意味し、歐羅巴的と言へる語は即ち文明的なりとの意と同一なりとせんか、露國は全然野蠻的にもあらず、又絶対に文明的にもあらずなり、一方に於て頗る文明的なるが如くにして他方に於て甚しき野蠻の行動を爲す、彼の露國皇帝が世界の平和を畫きて萬國平和會議を召集し、殺伐なる武斷世界の中にありて弭兵の高尙なる理想を實行せんとしたるが如きは頗る文明的にあらずや、自由の新空氣が歐洲全土を風靡する時に當つて、斷乎として君主專制を保持し、其配下なるノイーンランドの憲法を蹂躪して人民の自由權利を剝奪せんとするは寧ろ非文明的と稱すべき者にあらず

や、一方に於ては外交の重んずべきを聲言し、東洋平和支那保全を絶叫しながら、一旦他國の間隙之に乗ずべきの機あるを見るや、唯た其目的を達するを以て至善と爲し、背信違約も正當方便の一なりと爲すに至ては外交の信義を蔑視する者にあらずして何ぞや、此の如くして露國の行動は文明、非文明兩々相半ばする者なり、而して其領土氣候に於ても其自然的狀態に於ても純粹の歐羅巴より異なるが如く、又歴史的亞細亞とも同一ならざるなり、是れ亞細亞の文明が其領土内に於て破壊せられつゝあるを以ても明瞭なるべし、然らば露國は果して如何なる國なるか、其領土が歐亞二大陸に跨るが如く、亞細亞の舊文明と歐羅巴の新潮流とは茲に撞着して、一種特別なる國体一種不可思議なる性情を生じ、遂にウラルの東西に跨る亞細亞にもあらず、歐羅巴にもあざざる單獨なる一國を形成するに至りしなり、故に此國は亞細亞的眼光のみを以ても觀察する能はざるなり、歐羅巴の新思想のみを以ても評論

する能はざるなり、余等神戸港を去て浦鹽斯德に到着するや、船に一人あり、一夕甲板上に椅子を列ねて共に語る、其言ふ所は即ち彼が露國の陋習を發き、道路の不潔、市制の不整頓より、遂にスラヴ種族の容貌骨格の卑野なるに及ぶ、此の如きの觀察は果して露國の真相を得たる者なるか、其言ふ所悉く短所のみを擧げ來りて遂に其長所に一も及ぶ所なし、アングロサクソン人種の露國評多くは此種に出づ、吾人は露國に關する英米人の著書は常に一種の注意を以て閱讀せざる可らざるを悲むなり、遂に世界的公平なる眼光を以て其真相を發揮すること能はざるか、はた又露人が常に口にするが如く、露人のみ獨り露國に就て記述するに適せりとの言は、遂に永久其眞を爲す者なる耶非耶。

西比利亞に對する世人の感想

余等西比利亞行を決してより以來頻りに西比利亞の情を探り旅行の參考に供せんとし、曾て同地方に經驗ある人々を訪問して其説を叩く、然るに皆其危険を説て曰く、該地に赴かんと欲せば須らく地圖望遠鏡及び一切の武器を携ふ勿れ、是等を携帶するは反て露人の嫌疑を深からしむるの具たるに過ぎず、然れども亦自衛の手段として武器の必要最も大なりと、余輩此言を聞て豈に惑はざらんと欲するも得可けんや、地圖は旅行の最大要具、特に未知の大陸に踏入らんとするものはなくして東西を辨ずると能はず、望遠鏡に於ても亦然り、武器に至ては一方に其必要を説き他方に携帶の反て危険なるを謂ふ、何れに従ひ何れを採らんか行者をして殆んど絶望の域に達せしむ、而して此等は實に彼地方經歷者の言なり、况んや未だ彼地を踏まざるものに至ては、其畫く所の土地、其想像する所の危険恰も唯是れ西比利亞を以て廣大無邊なる可憐の徒刑場となし、或は空林枯木の地、猛虎豺狼の棲所たるが如く

に信ずる者あり、西比利亞に對する世人の想像は實に此の如く、余輩は全く彼地の状態に關しては蒙昧の裡に葬られつゝ、遂に之を斷行するに決したりき、蓋し思へらく、こは西比利亞と交通に於ても商業に於ても全く無關係なる關東人士の言なり、比較的密接なる關係を有する九州地方に至れば、此妄想は遂に一洗せらるゝに至らんと、長崎に到るに及んで果して其感想の幾分は當れるを曉りしと雖も、亦意外に彼地に關する状態の疎遠なるに驚けり、長崎は浦鹽斯德に對する最近の輸出港商業上に於ける關係の密接なるのみか、夏期間に至れば、本邦商人の渡航する者頗る多し、而も彼地の未だ全く知られざるは何ぞや、是れ渡航者の多くは無學の商賈、其觀察卑猥陋劣、唯砲臺の嚴たるを仰ぎ、兵舎の壯大なるに驚き、軍人の横行殺人の悲惨を見、歸來得々として之を家族近郷に語り、以て自己が壯圖の反證たらしめんとする者比々皆然らざるはなし、適ま是等の輩にして相應の觀察を下せる者あるも、不幸

にして之を世に發表するの學識と筆力とに乏しきを以て、空しく家庭の談柄と爲すに過ぎず、此の如くして西比利亞なる一大天地は、邦人を以て恐ろしき所、危險なる所、常人の通過し能はざる所なりとの感想を彌漫せしむるに至れり、豈に今後の形勢に鑑みて、悲まざるを得んや、而して世人をして西比利亞を恐るゝに至らしめたる最大原因は、其地の露領たるにあるが如し、露國とし言へば、世人は之を以て仇敵視し、直ちに以て吞噬者と爲し、憎惡の念は遂に其反面恐怖心を惹起せしめ、所謂恐露病者なる一種の患者を現出せしむるに至れり、彼等をして是の如くに至らしめたる所以のもの、或は左の數點に歸するを得んか、

- (一) 寛政以來、日露政治的關係、特に樺太事件より近くは明治廿八年三國關涉に至る露國の態度。

- (二) 日本の文明は多く英人より得たるものなれば、從て英書を讀み英人と親きより、英國年來の敵たる露國の恐るべきことを知ら

ずく英人より吹込まれたる事。  
 (三) 露國の南進政略を以て、直に恐るべき呑噬主義の國是と誤認せる事。

以上は廣く露國を以て恐るべしとなしたる原因にして、又以て西比利亞をして誤解せしむるに至れる遠因を爲せるが如し、加之西比利亞をして一層危険の地たりとの感想を抱かしめたる特種の原因は、又之を次の四點に歸するを得んか。

- (一) 西比利亞に關する研究書類の乏しき事。
- (二) 軍事的秘密の下に、眞實なる報告通信の公刊せらるゝ少なき事。
- (三) 福島中佐單騎遠征に對する歓迎は、世人をして其旅行の困難を誤認せしめし事。
- (四) 交通貿易の未だ開けざること。

以上第一第二に至ては實際西比利亞の旅行者が語りし所著はせしむ

のなきに非ずと雖も、多くは其旅行の危険を説きて以て其壯圖を街はんとするの傾を有し、さらぬだに西比利亞に關する地理的智識の缺乏せる世人をして其危険を想像せしめたり、第三に至ては余輩素より福島中佐の壯圖を非認する者にあらずと雖も、其非常なる歓迎は世人をして此歓迎に價するだけの困難を連想せしめ、中佐旅行當時と形勢を一變せる西比利亞をして、猶舊時の状態を記憶せしむるに至らしめたり、第四に至ては從來朝鮮及西比利亞地方に渡航する者及び貿易に従事するものは悉く關西殊に九州の人なり、試に在留居民を視れば、十中の八九は皆な九州殊に長崎附近の人なり、貿易に於ては大阪を中心とし、長崎又は馬關を経て輸出せられ、關東に於ては輓近新潟より浦鹽須徳まで、毎月一回愛國丸の往復するあるのみ、故に關東地方の人は、西比利亞の事情に暗き又故なきに非ず、但し昨秋能登七尾より浦港以上の諸原因は綜合して西比利亞に對する誤解となり、徒らに其危険を喋々す

るに至らしめたる者にあらざるか、今余輩は世人が如何に斯の如き感想を抱けるかに就て一の適例を讀者に報道せんとす、余等が神戸より乗込める郵船會社船に一員あり、食卓を共にする毎に語て曰く、浦鹽斯徳の地たる白晝盜賊横行殺人頻々而して政府に法律もなければ警察亦頼むに足らず、故に余彼港に航する何回たるを知らずと雖も未だ曾て上陸したることなしと、而して余等が斯の如き危険の地に向て好んで航するを疑ふ者の如し、讀者は此實例に對して如何の感かある、また船中唯一の快樂たる食卓に於て絶えず此語を耳にしたる余輩當時の感想如何なりしか、あゝ、這は神戸浦鹽間定期航海船として月に二回の航海を爲しつゝ、ある者の言なりとは、一般世人の感想を知るも亦難からざるなり、余輩も初め此の如き注意と危険の聲の下に、所謂浦港に上陸するに及んで世人が頗る此地を誤解せしにあらざるやを疑へり、請ふ余が見たる浦鹽斯徳に就て、該地通信者が屢報道する所の本邦人の

抱ける惡感情と並に彼地に屢起る殺人事件とに就きて余の見解を下さんとす。

軍港としての浦鹽斯徳

浦鹽斯徳着港劈頭渡航者の注目する所の者は何ぞや、壯麗なる寺院にもあらず、宏壯なる商店にもあらず、巍然として山頂に築れたる砲臺、今にも撃出さんとするが如くに港口に向けられたる砲門、至る所に聳ゆる赤煉瓦の兵營、孰れか皆軍事的にあらざるはなし、而して彼のガルドピン岬より連れるセドロワヤ山、シノート半島に於ける丘陵市街、後背の高地、到處地苟も勝を占めば要塞を築き砲臺を設け、見渡す限り鎮守府、海兵團、火藥庫、船渠、貯炭所、大砲倉庫等のみ、満目の光景、殺氣紛々來者をして先づ一種不快の念を抱かしめ、遂に武装せる商港、或は來者を皆敵とせる港灣と絶叫せしむるに至る、加之余等の一行浦港に入らん

とするや、時將に夜砲臺より頻に探海燈を照して我船体を照し、船員等の目眩じて航路を認むる能はず、遂に空しく海上に一泊するの止を得ざりき、又余等が浦港を發せんとするや、海中に於ける標的の傍を過ぐ時に砲臺上より三發の砲丸飛來りて數丁の所に落ちたり、余が船の進行に際して毫も之を顧みざるもの、如し此の如き舉あるを見れば誰か又不快の念と危険とを感ぜざらんや、然れども余輩は之を以て直に露人の狂暴なるを思惟し、浦港の危険を絶叫する能はずと信ずる者なり、何となれば浦港は本來軍港にして商港に非ざればなり、近來商業上の必要より其一部を以て商港に充つと雖も、是即軍港なり、軍港にして武装せる固より怪むに足らず、其彈丸發射探海燈の使用、彼等が練習として將に然るべき處、偶然我等の船其期會に遭遇したりと觀せば、深く疑念を抱くの要を見ざるなり、然るに所謂恐露熱に襲はれつゝあるの人は直に是を以て露の故意に出たりとなし、益々危惧の念を増長せしむ

るに至る殊に神戸長崎の如き世界的平和的なる商港を經由せる邦人は、浦港に至て偉大なる兵士巍然たる砲臺轟然たる砲聲を聞きて、是を自國の商港に連想して露國は來者を以て皆敵とせりと速断し、自ら惡感情を抱くものは、全く軍港を以て商港と混合せるが爲めなり、余輩は寧ろ浦港を指して商態せる軍港と稱するの至當なるを覺ゆ、彼の軍備に致々としてあらゆる設備の軍事的に出たる浦港をして、其一部を裂いて外國船の自由出入を許可したるを見ては、寧ろ其寛大に驚かざるを得んや、看者此心を以て浦港を觀察し來れば、浦鹽斯德港頭何等の不快何等の危惧を醸すこともなかるべし、世の漫遊者漫りに恐怖の意を叙して世人を誤る、是れ浦港の真相を得たる者にあらざるなり。

西比利亞に於ける殺人事件

世人稍もすれば西比利亞の危険を説くに、該地に屢行はるゝ所の殺人

事件と其警察の無能とを以てす、余輩固より西比利亞の無政府無警察なるを非認する者に非らず、又殺人事件の屢實行されつゝあるを打消す者にあらざるなり、然りと雖も之を以て直に吾人日本人の恐怖すべしと爲すの原因には足らずと爲す者なり、何となれば其殺人の方法たるや、文明の利器、即ち銃砲若くは電氣化學的藥品等を用ゐるに非ずして、其手段の最も野蠻なる最も拙劣なる殺戮なればなり、此の如きの方法は比較的被害者をして免れ得可きの期會を興ふると昨年露遼九月九日、浦港十字街上行はれたる殺人事件の被害者が殺戮の方法不充分なりしが爲め暫時にして蘇生せしを以ても明なり、余輩之を歐米に於ける殺人方法の危険なるに比して比較的恐るゝに足らずと信ずる者なり、特に其殺人なる者が多く支那人に對して起る者たるを思はし蓋し此間の消息を窺ふに難からざるべし、實に支那人は何れの地にも於けるが如く此地方に於ても、殆んど禽獸視せらるゝの地位に陥り、

無能力者弱者としてあらゆる敗徳を代表せり、而して被害者が常に此の如くに公認せられたる支那人にして、本邦人の殺傷せられたる者殆ど無きを聞ば、加害者が常に弱者に向て暴行を逞うするの傾向を有し、之を以て邦人の危険を喋々するの誤解なるを覺ゆ、由來加害者の捕縛せらるゝと少きを以て、其加害者なる者が露人なるか、はた支那人なるか、断定すると難しと雖も、前後の事情に依て推測を下げば、寧ろ支那人に多きに非ざるやを疑ふ者なり、何に依て然るか、是を殺戮なる殺人手段に徴せば、自ら明なるを得ん、古來殺戮なる者は支那人獨得の殺人方法として、支那歴史上屢々散見する所、余輩未だ露西亞本國に於て此種の方法が、しかく流行するを聞ざるなり、然に露國本土の移住民たる西比利亞人が、獨り此地方に於てのみ此手段に由ると爲すは、少しく疑なき能はず、加之其殺人事件が支那人街に行はれ、多くは賭博の歸途にあるを思はし、寧ろ其期會は賭博に於ける敗者が勝者に對する怨恨に歸

すること多くして、全く無關係なる露人には比較的鮮少なりと稱せざる可らず、此の如くして被害者が獨り支那人なるのみならず、加害者も亦支那人なりとなすのフロベリティーその大部分を占むるが如し、是れまた加害者の捕縛せられると稀なる所以ならんか、既に前述せるが如く、該地警察は頗る不完全にして、露人間の治安だも充分保護する能はざるが如き有様なるを以て、彼等と殆んど同数の人口を有し、其狡猾なる所業の遙に超越する支那人に對しては、悉く初めより輕蔑視し去りて、個々の犯罪の如きは問ふに違なきものゝ如し、是れ則ち犯罪者の捕縛せらるゝと稀なる原因にして、亦以て支那人相互間に於ける殺戮と爲すの反證と爲すに足るべし、然らば人或は問ふ、支那人にして此の如きの勇氣と大膽とを有するや否やと、余輩は之に答へて言はん、西比利亞地方に於ける支那人は素より山東省方面の商賈ありと雖も、其無賴の徒なる者は多く、悍惡殺伐を以て、鳴る滿州人なりと、彼等か生命

なる者に對する感念の頗る粗薄なるは、屢々殘虐と殺伐を爲すの誘因となればなり、此の如く觀し來れば、所謂西比利亞に於ける殺人なるものは、居留支那人相互間に起るものなるか、若しくは加害者の西比利亞囚徒に出たりとするも、被害者の多數は弱者の地位に立てる支那人なり、世人が漫然該地通信者の言を輕信して、邦人の危険を喋々するが如きは、余の斷して誤解と爲す所なり。

今や西比利亞鐵道はイルクトク以西、ハバロフスク以東既に成り、黒龍江は百餘艘の兩汽船會社日夜往來して、ストレチエンスク以西所謂後貝加爾鐵道は、本年十一月を以て竣功せんとす、世界の大道たる西比利亞は、獨り滿洲線の竣工を待て然るにあらず、現今に於て既に一步だも歩行するの勞を取らずして、歐洲に達するを得可し、獨り交通上に於て然るのみにあらず、西比利亞の開発は、駿々として數年ならず、東洋に一大歐洲市街を形成せんとす、余輩は軍事上と謂はず、商業上と謂はず、



あらゆる種類の人士は西比利亞の一大天地に於て利用すべき餘地を有せりと信ず、若夫れ風光に至ては黒龍の大江、興安の大嶺、絶大雄壯優に島國的根性を打破して餘あり。

(明治卅二年十月稿)

'No pleasure is Comparable to the standing upon the vantage-ground of Truth.'

Bacon. Essay I. of Truth.

一は西比利亞遠征紀行と名づけ、一は白山黒水紀行と稱す、前者は昨秋太陽紙上に掲載せられ、主として政治的方面及經濟眼を以て觀察せる者、後者は昨秋以來史學雜誌紙上に投稿せる者にして、専ら史的事實の解釋を試む、両々比較閱讀せば、黒水白山の昔より二千有餘載、國勢世運の變轉、種國部族の盛衰、西比利亞の現状を併せ考ふるに足らんか、其道程時日及び記事の全く相同トキ者あるは、同行の結果として止むを得ざる所、唯探る所は若眼點の相違にあるのみ。

# 西比利亞遠征紀行

地は固是成吉斯主宰の處 (ムラビヨフ將軍表徳文の一節)

## 其一 西比利問題解釋の急務

西比利問題とは何ぞや、魯國東邦政策の効果之れなり、則ち國力を傾け生死を賭し、熱沖しつゝある黒龍地方に對する經營之れなり、十九世紀の平和は武装せられたる平和なり、國力の平均は漸くにして、輓近の平和を維持す、故に一平均を破るべき原動力あらば争亂の起る豈に旦夕を俟たんや、印度寶庫は英國の先占に屬して、露國の南下を許さず、乍去ペーテルの遺訓は、明に南下を教ふ、古來東亞に對する貿易權を握るもの必ず天下に覇たるに足る之れ、現今英國の優飛する所以にして、露國が支那問題に熱沖する所以なり、露國が清國の主權を掌握せんと欲せば、勢ひ北方に其勢力の根本を養はざるべからず、之れ露國が東邦問題

に國力を賭する所以にして、更に廿世紀に於ける禍亂の泉源は、専ら黒龍江畔に存するものと云ふべし、露國にして果して能く此政策を解釋したらんには、天下の覇權は將に其掌中に屬せん、若し夫れ失敗せんか之れ露國國體轉覆の秋にして、歐洲に於ける擾亂は日を俟たずして噴起せん、故に曰く、露國が東邦政策の結果は成敗其何れを問はず、世界國力平均を破るの基なり、國力平均を失はば、今日の太平豈に永久なるを得んや、故に廿世紀の問題を解釋せんと欲せば、東邦問題に對する正常なる解釋を求めざるべからず、殊に日東は西比利に對し、僅に一章水を隔つるのみ、利害の關係は瞬時にして我國に影響す、西比利問題豈に輕々に觀過するを得んや。

更に一方より見れば、西比利問題は根本的に經濟問題なり、百萬の貔貅千萬の艦艦ありと雖ども、財源枯渴せば如何で最終の勝利を得んや、於是乎此後の觀察は決して之れを軍人のみに委するべからざるなり、世

の經世家なるもの、深く意を茲に用ゐずんば、終に又立つ能はざるに至らん、輒近世人口を極めて支那の保全を論じ、朝鮮の獨立を説き、しかも其禍亂の根本たる西比利問題を無視せんとす、之れ恰も河水の泉源を極めずして、銳意堤防を築くの類のみ、何ぞ夫れ誤れるの甚しきや。

### 其二 西比利亞觀察の特質

老大國は尙ほ大伽藍の千數百年雨露に浴して軒は傾き屋は破れ、今にして一度疾風雲を捲き猛雨軸を流すあらば忽にして覆滅破壊せんとするが如し、唯に八方よりするの救助と本尊の鎮座せる故とを以て僅に奮態を保ちつゝあるなり、故に之が保全を論ずるは尙ほ信徒が寄附金を募つて修繕維持の方法を講ずるが如し、其計畫の如何蓋し知るべきのみ、之に反し露國か本邦に對する經營は恰も巨萬の富豪が一世の財力を傾け以て全備せる城廓庭園を築かんとするが如し、固より富豪

は其目的を達し得るや否や、時に天災變地、桑田變じて海となるの憂なしや否や計る可らずと雖も、其規模の偉大なる、其計畫の盛なる、修繕と同一の論にあらざるなり、之が効果を研究する利益愉快の大なる又前者の及ぶべくもあらず、之れ西比利觀察に對する一大特質と言はざるを得ず、西比利亞は元と之れ四十一年前露國の清國より奪領したるの地なり、從て住民の多くは支那人にして、又南方潤滿江を以て境を朝鮮に接するが故に朝鮮人の來住するもの亦少なからず、故に西比利亞に於ては三國民の狀態を直接に比較觀察するの便を得、况や黒龍江畔は史家の所謂東部亞細亞人種の根源地にして、人種南下の經過並に古代消極的人種の殘留は到底他に求む可からざる好史料たるに於てをや。

### 其三 西比利亞に至る航路

順序は凡て大切なり、三社廻り大和廻りと雖も皆一定の順路あるが如

し、西比利亞に至るにも、又自ら一定の順路あり。

(一)神戸を發し、門司、長崎、釜山、元山、津を経て浦港に至る航路、之れ郵船會社の定期船にして、期日は一週間。

(二)長崎より浦港への直行線、郵船會社の上海メール、露國義勇艦隊、露國ゼベリニエーフ會社、其他外國船にして、期日三日。

(三)新潟より浦港へ直行、新潟汽船會社の所屬愛國丸が政府の保護の下に、毎月一回航海す、期日二日間。

(四)北海道函館又は小樽より黒龍江口ニコライフスクに至るの航路、但し此は定期船にあらず、漁業の目的を以て隨時出發する私人の持船に便乗するなり、期間は凡て五日間位。

去れど夏期休業等一定の時期を限り、亞細亞内地を觀察せんと欲せば左の一を撰ぶを以て適當なりとす。

(一)新潟より出發して内地旅行の歸途、朝鮮の東海岸を経て長崎、神戸に

至る。

(二)國館又は小樽より漁業目的の汽船に便乗し、韃靼海峽並に樺太を経て黒龍江口ニコライフスク(著名なる漁業場)に出で、黒龍江を遡つて内地に入り、歸途浦港より朝鮮を経て神戸に出づるか、若くは新潟に直航す。

(三)往復共に朝鮮を経由する航路。

第三の航路は往復共に常に同一の土地を経るを以て、多くの日數を費すに反して、觀察する範圍は最も狭小なり、故に最も無味なる航路と言ふべし、乍去往航に朝鮮に寄港し、大体の調査を遂げ、歸途之を完成するの便なきにしもあらず、今回余が此方法に出でたるもの、蓋し其主旨に出づ、第一の航路は最も適當にして、而も安樂の航路なりと雖も、余は學生の旅行として、第二航路を推舉せざるを得ず、何となれば、例令船は不完全なるにもせよ、往航路は夏期なれば頗ぶる安全のみならず、樺太を

視察するの便を得、殊にニコライフスクは著名なる漁業場にして、本邦人の出漁するもの頗る多く又其内地旅行後浦港に出づるあれば、其路順の好良なる、他二路の遠く及ばざる所なりとす。

### 其四 西比利亞の氣候

地名	北緯	一月の平均温度	七月の平均温度
ニコライフスク	五三、八	零下 九、八	六一、八
ブラゴウエシチエフスク	五〇、一六	一三、八	六九、一
ハバロフスク	四八、二八	一二、八	六七、八
浦 港	四三、七	零上 四、五	六七、三

夏期に於ては大陸氣候の特徴として、百度以上の酷熱を感ずる事ありと雖も、是は數日にして去り、日中大略七十度を前後するのみ、唯だ注意すべきは、朝夕氣候の變化甚だしく、爲めに病魔に罹るゝの恐なしとせ

ず、故に夏服の必用無きにあらずと雖も、夫れと共に冬服の準備をも調へざる可らず、現に余が旅行中多くは冬服を着用し、黒龍江を遡る時の如き、夜に至れば外套を用ゐて尙ほ冷氣を覺えたり、冬期の事は余實驗せざれば敢て言はず。

### 其五 朝鮮東海岸

余は既述せる如く、往復共に朝鮮を通過したり、故に旅行の順序に従ひ、先づ朝鮮東海岸の狀態を語つて次に西比利亞の内部に及ばむ。  
七月三十日 郵便會社の定期相模丸に乗船、午前九時神戸港を出帆す。本多林學博士は學生を率ゐて大和、大臺、原山の山林を調査し、九州、硫黄嶽を探検せんが爲め、予等と同船す。船將に須磨、明石の沖を出づるや、博士盛に松樹枯死論を説いて曰く、若し數百年間現在のまゝにて、毫も人為を加ふるなくんば、松樹は自然に枯死して、落葉樹之れに代らん、何と

なれば近傍の地たる、其原始的状態に於ては、落葉樹の繁殖に適す、而して松樹は性質上日光を要すること大なり故に現在繁茂せる松樹は日光を妨げて、幼樹の發育を止む、去れば松樹は絶て、再び原始的状態に歸し、落葉樹殊に槲類の發育を見んと、博士明快の辯を振つて説き來り説き去り、更に予等に告げて曰はく、西比利亞の地多く落葉樹の繁殖するを見ん、而して其常盤樹の生育するの地あらば、之れ必ず人為的開墾の地なり、故に市街の附近に至りて初めて常盤樹繁茂するを見るべしと、博士の外一二等船客中一人の本邦人なかりき。

七月三十一日 午前六時馬關着、博士と共に上陸龜山神社に參詣す、淡窓嘗て歌て曰く

粉壁紅蘭一萬家。 管絃聲隔荻蘆花。

午帆纜去干帆來。 此見山陽小浪華。

と寫し得て妙なりと謂ふべし。

八月一日 午前六時長崎着、叔父文太郎氏を訪ふ、本多博士上陸してより亦一人の本邦人居らず、午前七時出帆。

八月二日 未明對馬の左岸を通過しけるが、風浪稍々高く午前十一時釜山に着す、直に上陸旅店、大池に投ず。

釜山は朝鮮慶尙道の南岸、絡東江口を去る東方四里にあり、我對馬を去る事僅に北西二十里、晴天に際し遙に之を望むを得、絶影島は港口に横はり、以て港口を二分す、東口は濶くして大船通過に適す、灣内幅一里乃至二里、長さ四里、税關の近傍に二個の防波堤あり、端舟港を構成す、港内又波止場あれば好上陸處なり。

本港は朝鮮三港の一にして、夙に我國と貿易を營み、嘉吉年間四百五十六年前以來互市の規約を定め、維新前は對馬の宗氏専ら此事を管理しけるが、明治九年の條約によりて公然たる開港場となりぬ、我專管居留地は絶影島の對岸にあり、龍頭龍尾の二丘陵は相對して松樹蒼鬱頗ぶ

る愛すべし、聞く之れ本邦人の移植せる所にして、龍頭山には天照皇大神宮を祭る、領事館は其中腹にあり、居留民約六千人に及び、各種の商店百般の事業整然として備はり、公私立學校、公園、病院、商業會議所、演劇所等一も備はらざるなく、恰も我國にあるの心持す、  
 本年六月警察署の調査によりて在留民の數並に職業の大略を示せば左の如し。

總數五千九百二十八人  
 内譯 男 三千二百二十六人  
 女 二千八百〇二人

縣名	男	女
山口	九三五	一〇一九
長崎	九一五	八〇三
大分	二五四	二五六

今之を各縣に分てば次の如し。

廣島	二二二	一六三
福岡	一六二	一二四

此表によれば、人口に於ては山口第一に居ると雖も、實際の勢力は對州人の握る處とす、之れ該地は早く此地と交通貿易を開きたると、又た該地地味の宜しからざるが爲め、反て釜山に本據を定むるを利とするに由らざんばあるべからず、又營業の種類により之れを分類せば左の如し。

仲買	一九六	貿易	七八	小間物	六三
菓子	五八	魚	三八	日雇	三八三
藝妓	四三	大工	一九八	桶工	二〇
石工	二一	左官	二一		

聞く處によれば、近頃我國に於て居留地制度制定の舉ありと、予の見る處を以てせば、釜山居留地の規則たる假令不備なる點なきにあらずと

雖も其居民の多き其關係の多き、恐くは唯一の參考地として研究の價値あるべしと信ず、今其現行制度の大畧を陣ぶる事次の如し在釜山居留地規則第一條に曰く、本居留地は居留地會及び居留民總代を置き領事の委任を受け、此規則に従ひ、居留地内に於ける諸般の事務を議定處理せしむと、而して、居留地會は二十名の名譽議員より成り、一定の資格を有するもの、中より選舉す、其議決する處は、主として居留地に關する、經濟上の事項及び營造物若しくは居留地財産の管理處分に關する事項なりとす、居留民總代は、居留地會議員たるべき資格を有する者より選舉し、定員は一名任期二ヶ年なり、主として領事の命令並に居留地會の議決を施行する機關とす、要するに、専ら自治の制度に基き、居留民相互の安寧秩序利益を維持せんとするに外ならず。

貿易の狀態を云はむに、仁川開港以來稍々商權を奪はるゝ傾向なきに、あらずと雖も、尙ほ中心たるを失はず、三十一年度に於ける景況の大畧

次の如し。

總額六百六十二萬四千二百十九圓九十一錢

輸出原價二百八十四萬九千九百四十八圓四十八錢

日本へ二百八十一萬六千六百五十五圓四拾八錢

清國へ 二萬八千八百九十七圓

浦沙へ 四千三百八十六圓

輸入總額二百二十七萬二千七百〇二圓九拾五錢

日本産 百二拾三萬六千七百二十六圓九十八錢

外國産 百〇三萬六千九百七十五圓五十四錢

輸出超過五十七萬六千二百四十五圓九十五錢

▲輸出重要品

金地 米 大豆 牛皮 干鰯 海產物等

▲輸入重要品



木綿 紡績糸 金布 丁銅 錫 石油 食鹽 酒  
 其他咸鏡道の明太魚の如き、一旦釜山に集りて、後各道に出づ、實に三南  
 地方物貨の集散點は釜山にありとす、而して此等貿易は殆んど本邦人  
 の手に依て營まれ、彼の朝鮮村なる釜山鎮三萬の人口は、日本居留地の  
 爲めに生活すと謂ふも、過言にあらざるなり。

釜山の航海權、釜山は東部亞細亞に於ける航海中心點にして、長崎へ百  
 六十五哩、元山津へ三百七十哩、浦港へ百五十哩、仁川へ四百三十一哩、北  
 方は露領西北利亞に對し、南方は北清一帯の地に對し、又日本との貿易  
 に關し、實に其中樞を得たるものにして、當港に對する航海權の消長は  
 東部亞細亞に對する制海權に干係する事少からず、故に其現狀を陳べ  
 以て結論の援となさんとす。

航船會社	航海する場所	艘數	回数
(一)日本郵船會社			

神戸浦港間	二	三週一回
香港浦港	二	六週一回
神戸牛莊	一	四週一回
神戸天津	一	四週一回
神戸元山	浦港の氷結中	
神戸芝罘	天津の氷結中	
(近頃北清に對する航路擴張の議あり更に一層の優勢を示すべし)		
(二)大坂商船會社		
神戸巖原釜山木浦を経て仁川 二週一回		
(三)對馬汽船株式會社		
神戸釜山間 毎月三回		
(四)魯國セベリユーフ會社		
浦沙上海間 臨時四艘		

(五) 韓國廣通社

沿海航海

四 艘

尙ほ出入船舶の數を以て見れば更に明なるべし。

白 山 黒 水

國名	入港		出港	
	回数	噸數	回数	噸數
日本汽船	二九二	一九、四四六九	全	全
日本帆船	七一三	二八七三二	七〇七	二七六七四
韓國汽船	三七	一四一七九	全	全
獨	三	二六五五	全	全
魯	八	七八〇四	全	全

以上を以て我國が如何に海上に於ける勢力を有するや論ぜずして明なるを得べし。

釜山の將來若し夫れ西比利亞鐵道完成し、關外鐵道全通し、京義釜山鐵

西 比 利 亞 遠 征 紀 行

道も連絡し、彼のニカラクラ運河の開通するの曉に於て、世界の經濟上の形勢一變すると共に、本港の價格又一變せざるを得ず、一方は陸上鐵道の便により、他方は汽船の力を借りて、世界を一周する大交通路は、實に釜山に於て相接續せざるを得ず、釜山は世界を半周する二大通路の衝に當り、其繁榮蓋し測るべからざるものあらん、唯惜むらくは釜山の地たる、平野に乏しく、大市街を建つるに難し、且つ灣内廣濶に過ぎ、港口二個あるを以て、絶影嶋前にありと雖も、風浪を防ぐに十分ならず、乍去此等の缺點は人工の能く補ふ所、故に吾人は極力我國勢力を、此地に扶植し、他日の備を計らざるべからず、殊に對馬と相對し、朝鮮海峽を扼し、軍事上極めて樞要なる地たるに於てをや。

八月二日、前夜開成學校長荒浪平次郎氏を訪ひ、本朝氏と共に開成校を參觀するの約あり、則ち大雨を侵して至る、校舎は釜山居留地を去る二十町、釜山鎮との中間にあり、氏曰く、我邦嚮に朝鮮の獨立を維持せんが

爲め、戈を清國と交ふ思へらく韓人皆其の恩に報じ朝野の人心悉く我に歸せんと、乍併試に見よ、往昔神功皇后の三韓征伐ありてよりて以來、豊太閤の役あり、倭寇の來襲あり、韓人枕を高くし眠る能はざる所以のもの、實に我邦あればなり、青史に收むる處、口碑に傳ふる所、社廟に掲ぐる處、金石に刻する處、悉く我國を仇視する原因たらざるはなし、近くは日清戦争に際し、王妃崩去の件の如き、一として彼等の腦髓を刺激せざるはなし、排日本主義は、祖先傳來の遺物なり、此思想を洗滌せんと欲するは、一朝一夕の業にあらざるなり、或は曰く韓人終に立つ能はずと、乍併之れ寔に淺見のみ、時ざる種子は發生するの理なし、韓國三百年來昌平相繼ぎ、安慰悅乘之れ事とし、少も教化に力を用ゐず、終に今日の悲境に陥る、乍併今日の状態を見て、一笑に附し去るは、之れ酷薄に過ぎ、而も支那に對する道にあらざる、况や韓國獨立の扶植は、我國々是たるに於てをや、故に吾人は之を救はざるべからず、而して之を救濟するの手段

は、根本的ならざるべからず、於是乎自ら開成學校を興し、韓人教化の任に當るのみと、氏更に曰く、乍併君乞ふ誤解する勿れ、予や茲に韓人の教化に力を盡し、百年の大計を講ぜんとするもの、徒らに政略的意義を帯ぶるものにあらざ、凡そ人を感化せんと欲せば、宜しく誠意赤心一點の私心あるべからず、故に予は眞實韓國將來の爲め盡すものあらんと欲するなり、果して然らば、排日主義は自ら變じて拜日主義となり、敵愾心は化して親和の大原動力となるべきのみと、以て其抱負の一端を見るべし。

予の本校を訪ふや、恰も暑中休暇中に屬し、生徒皆歸省し、漸く四五の寄宿生あるのみなりき、試に一生徒を検するに、善く日本語を解し、日本文を瞭解し、宛然日本人に接するに異らず、現今生徒八十餘名、尋常中學二年生の程度まで教授せり、分校を有する十一箇所、朝鮮政府は爲めに毎年一千二百圓を補助すと曰ふ、荒浪氏の説によれば、未だ一回の卒業生

を出す能はされば、其結果の如何は豫め知り難しと雖も、欠席者の少き且つ數學的能力の案外に發達せる、今後の成績望なきにあらず斯の如くして全道八十個所の分校を見るに至らば、稍効果の見るべきものあらんと。

午前十一時歸船す、適朝鮮の館屋あり船に來りて之を賣る、中に善く日本語を解するものあり、予爲めに幾何を求めて談笑する事久し、彼曰く朝鮮の國たる未開にして徒に詩文をのみ弄し、官吏無能、唯々收賄を事とす、今にして日本を師とし文明の精華を求めずんば、終に他國の有とならんと、彼自身は一文字をだに解せず而も好く教育の必要を説き、朝鮮の將來を憂ふ、彼又た可憐なる一個の獨立黨のみ、開化黨のみ、予更に問ふて曰く、汝倭俄何れか親むべきや、彼答へて曰く、世説一定する無しと雖も、日本は同文同種の國、親まざるべからずと、又た以て國民一般の意向を知るに足らんか、午後船元山に向て出發す、釜山より韓官吏二名

乗船す、即ち彼と筆談して曰く

問 東洋國ある少からず、而も獨立を全うするもの僅に三ヶ國のみ、

歐米の人貪婪飽くなし、虚に乘じて大に利益を計らんと欲す、貴國

由來我國と親交あり、兄弟の國と稱す、故に將に同心協力弊制を改革し國勢を振興せん、

答 東洋形勢頗有危急、兩貴國與我國同心合力共扶保全希望

乃ち彼に與ふるに一編の獨立保全策を以てす、

近海鯨多くして群集游泳するを見る、本年の春、魯國東洋漁業會社長ク

セルリング伯の要求に出でたる魯韓捕鯨條約なるものは、此近海に於ける利益を獨占せんとするに出でたるものゝ如し、

八月四日 午後七時元山津着、浦港へ三百四十哩、釜山へ三百十哩、元山

は永興灣の南岸にあり、北松田灣口と遙に相對す、東に葛麻半嶋を控へ、西南は山脈を負ひ灣口廣く三哩、灣入亦た三里、水深さ四尋、泥底にして

走鋪の虞なし、韓人の市街は南岸に沿ひ、一里の間に楯比す、之を元山里と稱す、而して該市街の北端一川を越ゆれば、則ち我居留地なり、明治九年日韓條約により、十三年五月開港す、明治二十年に當ては、人口僅に二百七十餘名なりしが、現今實に一千六百餘名の多きに達せり、領事館、商業會議所、守備兵營等あり、其規模釜山に及ぶべくもあらざれど、優に我國の勢力の大なるを示すに足る。

予上陸福屋洋食店に投ず、主人西嶋氏の待遇頗る厚し。

八月五日 西嶋氏の案内にて朝鮮の監理伊致具氏を訪ふ、氏が父は伊英列と曰ひ、夙に獨立黨の首領にして亡命して我國に在りき、氏博識多藝、永く米國に遊び、又我國に滯留し、善く英語並に日本語に達し、又日本文を善くす、且つ氏が婦人は支那人なれば、支那語にも通ずべし、嚮に中東戰史を韓譯して之を公にす、氏夙に朝鮮國情を憂ひ、獨立黨に入り終に推されて其首領となる、乍去時其宜しを得ず、位二品の高に在りしか

と請せられて元山の僻陬にあり、予氏を訪ふや、自ら一室に導きて懇談する事久し、此人は誠に韓國に於て得難きの人なり、之より歸途本願寺並領事館を訪ふて歸る。

貿易の現狀は左の如し。

卅一年度報告

前年より増加額

輸出入總額	四百九十八萬二千四百四十圓	卅五萬二千三百七十圓
輸入額	二百三十三萬三千九百十八圓	廿三萬百四十八圓
輸出額	二百六十四萬二百二十六圓	十一萬七千二百廿一圓
輸出超過	三十一萬一千三百八十圓	

斯の如く當港の貿易は漸次進歩をなすと雖も、今後果して非常なる盛大を致すべきや否やに就ては疑なき能はず、元山の地たる平壤に對し頗る重要なる地にありと雖も、馬息嶺の險あり、交通自由ならず、殊に港口濶く且つ北方に展開せるを以て、冬期北風激しきの時に際して、停泊

する事頗ぶる難し殊に港内暗礁多きを以て船舶は難を永興灣の北隅松田灣に避るの不便あり故に港灣其物より論ずるも又た全美なる發達を見る事難かるべし。

城津の近狀(新開港地)予の浦港にあるや適々東亞同文會より日本語學校開設の目的を以て城津に派遣せられたる笹森儀助氏の訪問せらるゝに會す爲めに其現狀を詳にするを得たり此地たる港灣不長六船を止むるに足らず現今日本在留者官民合して僅に十有六名住する許なり食するに糧なし唯だ韓人の茅屋に雨露を避け元山よりの輸送を待ちて飢を凌ぐのみ去れば何が故に開港地として撰定したるやを怪まざるを得ずと予未だ實見せず暫く聞くがまゝに記するのみ。

朝鮮東海岸に對する概論殖民政略は十八世紀の夢のみ米國が獨立を全うするや英國が其非を悟り終に一變してフランク政略を執るに至れり彼の香港の占領の如き明に之を證するものなり今や我國の朝鮮

東海岸に對する政略を觀るに大に其宜しきを得たる所以を發見せずんばあるべからず釜山に據りて航海貿易の中心を占め元山を擁して北方の鎮とす新開港地たる馬山浦城津の形勢更に我國の實權を擴張するものあらんとす。

露國東邦政策の結果は旅順大連を奪ひ南方不凍港を得て稍い安心を得たるが如しといへども現今露國の尤も憂慮する處は石炭にあり十九世紀の文明は蒸氣力に基き蒸氣力と石炭とは殆んど相俟て離るべからず故に曰く今日の文明は石炭の文明なりと然るに露國が東部西比利亞の地を奪ふや先づ送るに地質的遠征隊を以てし百方之れが探究に従事すと雖も未だ良鑛を發見する能はず於此乎露國の危憂は愈々加はれり若し夫れ一度開戦せんか浦港二萬五千噸の貯蓄炭は瞬時にして消盡し去らるべし十餘艘の艦艦又た動くべからざるに至らんとす於此露國は朝鮮東海岸に石炭貯蓄處を求めんとして止まず魯國

が朝鮮東海岸に對する政略は、實に貯蓄問題と常に關連すと云ふも過言にあらざるべし、釜山港口に於ける絶影嶋問題の如き終に露國の失敗に歸し、彼が占有標木として自ら移植したる樹木は、今は反て彼等の耻辱の徽章とは化しぬ、元山の地固より露人を容るゝの餘地なく、又輓近馬山浦を公開せんとするや、露國軍艦を發し、自ら木標を建て占領の畛域を定めき、何ぞ計らん其周圍の地は悉く日本人の所有ならんとは、於此露國憤怒或は軍艦を率ゐて示威的運動をなし、或は政府を威嚇して事を計らんとす、蔚陵嶋借用は此れが變休にあらざして何ぞや、又釜山京坂亭事件の如き、又京釜鐵道停車場敷地買收の如き、未だ其結果を見ずと雖も、恐らくば露國をして耻辱を重ねしむる種子ならざるならんや、唯々蔚陵嶋の借用は稍我勢力に關係するが如しと雖も、抑も該島たる唯だ一個漁業的島嶼たるに過ぎずして地理宜敷を得たるものにあらず、露國之を借用する所以のものは、固より石炭貯蓄所の設置す

るにあるべしと雖も、而も之れ露國が東海岸に於て幾回となく失敗を重ね不得已同島を借用せしものにして露國の本意にあらざるなり、唯だ外交上一時の申譯のみ、表面の美を飾り以て缺點を蔽はんとするの策のみ、故に露國は決して外交上勝利を得たるものにあらざるなり、反て我國の優勢を示すの反影に過ぎざるなり、換言すれば朝鮮の東海岸は正に我勢力の範圍内にありと見做べし。  
更に經濟上より之を觀察せんか、朝鮮殊に其東海岸は、明かに我國と經濟上從屬的關係を有するものなり、凡そ韓國の貿易の消長は、米大豆の收穫如何によりて左右せらる、若し收穫凶歉にして米豆の輸出減少するときは、著しく其結果は輸入諸品に及ぶ、試に見よ、去る二十九年釜山に於ける輸出入の總額は、五百九十四萬圓なり、開港以來未曾有の盛事となす、然るに翌三十年に於ては、急に九百一十一萬圓餘に昇騰せり、而して昨三十一年に於て、再び下りて六百六十二萬圓餘とはなりぬ、然らば

何が故に三十年度に於て斯く昇騰を示したるや、之れ蓋し同年に於ける我が國の凶作に基かずんばあるべからず、戦後經濟上事業勃興の結果並に米穀の不作、近年稀れなる恐慌を來せり、故に米穀を外に求め、其救済を計るの不得已に至れり、於此同年に限り韓國の輸出高は米四十萬石代價二百四十萬圓の多きに達しぬ、實に朝鮮米穀の輸出は我國米價の如何に關す、而して朝鮮貿易の消長は米豆輸出の多寡に關す、從て朝鮮貿易は我國米價の如何に關するや、大なり、而して我國經濟上の状態、亦米價の如何に關する事頗る多し、故に朝鮮貿易は明に我國と從屬的關係を有す。

又之れを海上權より論ぜんか、嚮に釜山に於ける出入船舶表に顯はれたるが如く、其航海權は全く我に屬すと曰ふも、誤なしと信ず、殊に沿岸航海は外人に許さざる處なるを以て、本邦人にして韓人の名義を以て之れを營むものあり、故に韓國汽船三十九艘の半、又た我國人の所有船

なりとす、更に漁業上より觀察せんか、三十一年度に於て、近海に出漁するもの五千四百人の多きに達せり、之れ固より漁業組合の調査にして完全なりと曰ふべからず、故に實際は更に多きに達するならん、唯だ借むらくは元山津以北捕鯨の利益は、全く露人に歸せる事は、是れなり。

要するに朝鮮殊に其東海岸は、經濟上、政治上、並に交通上、明に我が勢力の範圍に屬すと曰ふを得、唯憂ふ、此好成绩は果して永續するや否や。

### 其六 西比利亞の過去

將來を推さんと欲せば、宜しく現在を詳にせざるべからず、現在を詳にせんと欲せば、勢ひ過去を原ねざるべからず、之れ過去は現在を生ずるの母なればなり、吾人今や朝鮮東海岸を去て、將に西比利亞に入らんとす、茲に暫く西比利亞の過去を説き、現在の基礎を明にする亦た徒勞にあらざるべし。



第一期 露國の一成一敗

露國の西比利亞と關係を生じたるは、西曆一千〇三十二年ノブゴロツ  
 ド人がウレノイを將として烏刺爾山に向て出征せしに始まる。爾來屢々  
 遠征隊を發して交渉休む時なかりき、蓋し露人が斯く西比利亞内地に  
 侵入せしは、當時唯だ該地方に産する貴重なる毛皮を得んと欲するに  
 外ならず、始めより兵力に訴へて略奪を繼にするの野心は毫も存せざ  
 りき、其後一千五百七十四年ウオルガ河の哈薩克にエルマルクと稱す  
 るものあり、資性勇敢にして人の下風に立つを好まず、衆人亦之に畏服  
 し遂に推されて統領となり、不羈放縱の輩を集め、或は商隊を襲ひ、或は  
 貢物を奪ひ、専ら良民を苦む、莫斯科帝聞きて之を征せんとし宣言して  
 曰く、エルマルク以下四名の首領を莫斯科に引致して死刑に處すべし  
 と、エルマルク則ち旗下を集めて相議す、衆議未だ決せず、エルマルク揚  
 言して曰く、諸子の勇壯なる何ぞ今日憂苦するの甚だしきや、夫れ命は

天に在り如何ともなすべからず、我等が今日の計は進撃にあり退かば  
 必ず斃れん、宜く命を天に委しウオルガ河を遡り韃靼の邦土を攻略し、  
 以て西比利亞遠征の計劃に幾分の力を致し、舊罪を償はんのみと、乃ち  
 相率ゐて東進し一千五百八十年西比利亞國の首府「イスクル」を陥る、然  
 れども此等の鴻業はエルマルクの死と共に熄み、其地方は再び韃靼人  
 の領有する所とはなりぬ。  
 十七世紀の中間に當り黒龍江地方禾麥毛皮金屬に富むの報あり、爲に  
 遠征を計劃したる者ありと雖も、黒龍江の占領に就ては功をオレク  
 ミンスキー商人ハハローに歸せざるべからず、氏が一旦「アムール」遠征  
 の企望を懐くや、志氣勃々禁ずる能はず、一千六百四十九年自ら乞ひて  
 義勇兵を召集し、自費を以て遠征に従ふ、爾後二年を経て「アムール」一帯  
 の地は盡く露國の統一する處となりぬ、此に於て露國の舉動は清人の  
 注目する處となり、露國の侵略は獨り土族に止まらずして漸積の勢將

に已に迫らんとすることを思はしむるに至れり、故に康熙帝は一千六百八十二年愛琿城を築きて北邊の重鎮となし、更に副統督朗坦に命じて鹿獵を名とし兵を率ひてアムール江畔に至り、窮にアルバインの露兵を偵察せしめ、慮に乗じて清兵水陸一萬五千大砲百五十門を以てアルバインを攻む。露兵僅に四百五十人生を全ふるもの僅に百人、守將亦たチルチンスクに走る。時に一千六百八十五年之をアルバインの第一役となす。翌年清兵大舉再びアルバインを攻む。露兵大敗、僅に本國より援兵の來るに會し之を固守するを得たり。清兵退きたる後、城兵は廢殘を修補して稍々舊觀を復す。而るに一千六百八十九年國境談判は露清の間に開かれ、耻辱なる條約は兩國の間に締結せられ、アルバインの要害は之を清人に讓與するの運に至りぬ。之をチルチンスクの條約となす。

露人はアムール地方を領有すること僅に四十餘年ハヤロリが辛苦經

營の跡は此條約によりて無視せらるゝに至りぬ。ペートル大帝幼時之を聞きて曰く、爾後西北比利亞の事は忘る能はずと、亦た曰く露人は早晚必ザアムール河口大洋に面する所に我都府を建てざる可らずと、爾後百六十年間露清の狀態を觀察するに、露國は専ら平和を主とし條約を遵守して前後策を講ぜり、之に反し清國は國富み兵強し、故に自ら條約を利用して熾に殖民を起し、持久の策を講じなば、後日割讓の耻辱を蒙ることなかりしならん。彼の康熙帝が計劃したる屯田兵の方法は擧げて之を顧みず、爲めに現世紀に至り再び讓與の不得已に至れり。之を要するに清國の黒龍江畔を失ひたるは全く百六十年間清國防備の怠慢に出でたるものと謂ふべきなり。

第二期 露國黒龍江の占領

露國が黒龍江畔を失ひてより茲に百六十餘年、朝野ともに漸く意を此地方に留むるに至れり、一千八百五十年チウエリスキ東部西北比利亞

總督付を命ぜらるゝや、彼は直に黒龍江を下り沿岸を視察し、管に清國の一兵なきのみならず、清國人民の村落もなかりしとを證明し、自ら河口に露國々旗を建て、尼古來一世の威に象り之をニコライスクと名付く。此に於て彼は命を以てペーテルスブルグに歸り遠征の状況を報ず。特別會議員等之を信ぜず之を以て犯罪人たらしめんとす。露帝衆議を排し且つ白く、一旦露國々旗を建つ決して之を卸すべからずと、時にムラビヨーフ東部、西比利亞總督たり、歐洲兵亂の兆あるを以て東洋沿岸防禦の忽にす可らざるを論ず、既にして露土開戦するに至るや其所領ヲホツク海及太平洋沿岸地方に備ふる爲め黒龍江に依るの要あり、即ち一千八百五十四年自ら遠征隊を率ひ且つ清國に告て曰く、露國一旦英佛と露隙を開きたるより彼等我東方領地を攻擧し益々進で黒龍江の全部を占領する策を劃し、既に先年六隻の艦隊を以てカムチャツカを攻撃し我兵撃て之を退けたり、此に於て露帝は唯だ己の土地人民の

爲めのみならず、二百年來比隣の關係を繼續したる貴國の爲めに臣に命ずるに遠征の任を以てし東方の軍備を完實ならしめ以て狡猾專横なる英人の侵略を防がしむと、以て露國が英國と戦ふの日は大軍を黒龍江に出すを知らしめ、速に國境決定全權委員の派遣を乞へり、時に清國は長髮賊の亂あり、次で英佛同盟軍の攻撃を受け東北疆界を顯るの閑なし、故にムラビヨーフは自ら遠征隊を發すること前後三回にして一兵を勞せず終に黒龍江を得たり、嗚呼、懸軍萬里連戰連勝天下を席卷するもの固より壯烈なるに非ず、然りと雖露人の侵略は此種英傑をして數歩の外に瞻若たらしむるものあり、曰く何ぞや、戦はずして勝ち攻めずして取る之れ策の上々なるものなればなり、露人は實に之を知り之を行へり、斯くの如くして我北門の鎖鑰を盗み黒龍江畔愛親覺羅氏の桑梓を奪ひぬ、一千八百五十八年愛輝に於て締結せられたる條約は實に現今西比利亞を顯出するの本源たり、其條約に曰く

- 一、アルクン河より黒龍江に至る左岸は露國の領地とし右岸に沿ふて烏蘇里河に至るまで清國領とす
- 二、烏蘇里河より海岸に至るまでの地は他日兩國に於て其境界を劃するに至るまで暫く彼我兩屬地とす
- 三、露清兩國船舶は黒龍江松花江烏蘇里河に於ては航海權を有す但し他國のものは此權を有せしめず
- 四、黒龍江の左岸に於けるセイヤ河の河口より南方ホルモンドツニ村落まで凡そ三十露里の地に於て從來住居する滿州人は依然清國政府の管轄を受け該地に永住する權を有す
- 五、黒龍江松花江及烏蘇里河に於ける貿易の保護は地方長官の責任たるべし

此日ムラビヨーフ公衆に謝して曰く、余等從來拮据經營したる艱難は幸に徒勞に歸せず、今や黒龍江は我露國の版圖に歸し之より益々繁昌

に赴くべし、寺院は我等に代て神に感謝せり、予は茲に我皇帝陛下の萬歳を祝し併せて汝等同胞を祝す。

爾後僅に二週日天津條約によりて愛理條約第二條を確定し、烏蘇里河より海岸に至る一帯の地は露國の領土となり、東鎮を以て任ずる浦港及び朝鮮に對する要鎮ポシエットも亦た其有に歸しぬ、其後一千八百六十年北京條約は更に是等の權利を確めたり、於此皇帝はムラビヨーフの功を賞し、アムールスキの爵位を授け、居民其徳を偉として銅像をハッコフスクに建てて之を後世に傳ふ。

### 其七 東部西比利亞の現在

#### 旅行日誌

八月五日 午後五時元山津を發し浦港に向ふ、近海鯨類頗ぶる多く露人東洋捕鯨會社を組織して盛に之を捕獲す、漁期に至れば日々三四頭

を獲るに難からずと、本邦人由來朝鮮に出漁するもの約六千人、而も彼等の目的は唯だに鯛鱈鯧鯖等の漁獵に従事するのみ、予甚だ遺憾とす。近頃長門の人某新に捕鯨會社を起して専ら之に従ふと、聊か人意を強くするに足る、船將に浦港を去る三十海里の附近に至る、適く海霧天を蔽ひ暗濤咫尺を辨ぜず終に投錨停泊するの不幸に會しぬ。

浦港に着す

八月七日 朝來海霧漸く散ず、船則ち緩行午前十時浦港々口に至る、検査船は來り検査も名のみにて終りぬ、船再び緩行市街阜頭の前面に泊す、暫くして白衣の朝鮮人は各々小舟を漕で船の周圍に集まり來るもの、怡も蟻の砂糖に蟻集し來れるが如く、騒々擾々互に客を喚び其多きを争ふ、乗客は皆別を告げて去りぬ、中に浦港豪商フタクリン氏の妻女あり、一男二女を携へて有馬の温泉に遊び留まること五週間有馬鳴動す、則ち浦港に歸るなり、予大に之と相親み、則ち互に再會を約して分袂す。

す、予も次で上陸し、郵船會社支店長寺見機一氏を訪ひ扶桑舎に泊せんとす、適々愛國丸の便により歸朝する人多く、茲に虛室なし、不得已停泊中相模丸に滞留することに決しぬ。

浦港の狀態

浦蘆斯徳とは露露東方鎮守の義なり、一千八百六十年マンシユール號により占領せられ、六十四年海軍中佐シヨットを以てヘリテル大帝灣諸港長官に任じ、此港に管理廳を建設せり、翌年ニコライフスクより百五十七戸の住民を移し、後七十二年に至りニコライフスクより海軍鎮守を此地に移し、昨年五月二等要察となれり。

浦港は北緯四十三度六分五十一秒、東經百三十一度五十四分二秒、ムラヒヨーフ、アムールスキ、半島の東端に在り、金角港の北並に西岸の地を占め、西はアムール灣に臨み、東西北の三面は悉く三百乃至四百呎の連山を以て圍み、港口は南方に向て開き、ルスキ島は其口を扼す、港

内は港口より深く東方に灣曲し其形角の如し之を金角港と稱す故に港口は稍く廣しと雖も毫も港内を望見する能はず港内深き處百〇五尺に達し四五千噸の巨船は僅に六十艘を収むるに足る當港は從來嚴正なる軍港なりしかども漸次經濟上の必要よりして千八百九十五年海軍水路部は港内を四部に分ち東隅を碇繫禁場となし中央部を露國軍艦碇繫場となし港口に近き部分を二部に分ち商港及び遠洋航海碇繫場とす阜頭は三個ありアドミラル阜頭は軍港内にあり市街阜頭は商港の中央に位し義勇艦艇阜頭は停車場の側にあり六千噸の巨船は直接に其沿岸に附着せしむるを得冬期四ヶ月は海水氷結多少の不便なきにあらざと雖も人烟の増殖は寒氣を融和し凍氷破壊船の進歩は毫も交通に不便を與へず冬期航海を停止する者は我郵船會社あるのみ試に之を本邦の港灣に比せんか横須賀長崎の狹隘なるの比にあらざ神戸の非港灣的なる固より日を同じくして論ずべからず唯だ稍々

比較するに足るべきは舞鶴ならんか乍去其港内の狭少なる浦港に及ばざる遠し實に浦港は天與の良港露國が東鎮の名を命ずるも誠に故なきにあらざるなり。

市街の形狀は稍く長崎に類す山勢近く海岸に迫り平地乏しく市街阜頭の附近よりアムール灣に出るの間一對の平地あるのみ故に海岸に沿ふて東西に走る所謂東京の銀座通と稱すべき大市街の外之に直角に交叉する諸市街は盡く傾斜をなし東隅に至るに従ひ其度を高むるものゝ如し從て建築物も多くは丘陵の半腹にあり若し船上より之を望む時は煉瓦石造の高樓巨閣盡く階段的に正列し頗ぶる偉觀なりアドミラル阜頭にはニコライ歡迎門あり之れ一千八百九十一年當時の皇太子ニコライ我國漫遊の歸途西比利亞橫斷の際設けられたる紀念物なり之を以て市を東西の二區に分ち博物館は其東隣にあり其構造大ならず其分科並に配置方法等未だ宜きを得ずと雖も斯る新開地に

して博物館圖書館の到る所に備はれる威服の外なきなり、聞く浦港に  
 アムール協會なるものあり、學術研究を目的とす、該協會の發起に基き  
 公衆の寄附金により該博物館は作られたりと、要するに東部は専ら海  
 軍用地にして丘陵は海に迫り平地稀なり、之に反し西部は平地廣く主  
 たる商業者は皆茲に集る、陸軍用地並に浦港停車場は又た西部に在り、  
 海兵團、海軍俱樂部、參謀局、裁判所、病院、造船所等の諸官衙並に露清銀行  
 アルベルス、チエーリソ、ランゲリー、チセヴェリー、汽船會社、永和棧、同  
 利の支那商店、及我茶業組合の如き主たる建築物となす、乍併一度市街  
 阜頭より上陸し不規律なる税關を過ぎ市場に至るや、日用飲食品販賣  
 店は軒を列ね、臭氣紛々臺灣の支那人町に劣るなし、彼の俗に歐羅巴人  
 町と稱せらるる海岸通に於ても、道路粗惡、降雨の際には泥濘脚をも没  
 すべし、若し夫れ一度乾燥するや、紅塵萬丈、東京砲兵工廠前の比にあら  
 ざるなり、之れ全く未だ人工を加へざるに依るべしと雖も、一方に於て

は馬車の往來の激しき其之を害すると大なるによるなるべし、故に道  
 路の兩端には板を布きて歩行に便す、之れ獨り浦港のみならず西比利  
 亞全部皆同一なり、殊に東部海岸通に交又せる諸街に至ては其傾斜の  
 甚だしき殆ど函根七曲の險に比すべきものあり、予の同船者米人某の  
 夫婦あり、一日上陸浦港の現況を視予に告げて曰く、浦港は歐米人の來  
 るべきの地にあらざ、道路の泥濘、市街の不潔、如何に其非文明的の甚だ  
 しきやと適評と曰ふべし、試に通行する人物を見れば、威儀堂々たる軍  
 人的服裝を爲すものにあざれば、一見恐怖心を起すべき野獸的巨人  
 のみ、遙に丘陵を望めば砲臺砲壘相連なり、港内白色の艦艦は之れ東洋  
 艦隊にあらざや、自然的に武装せられたる此港、人工的に武装せられた  
 る此市街、其結果得る所は武装的平和にあらざして何ぞや、乍併一度其  
 裏面を探らば、其不注意不規律思ひ半に過ぐるものあり、彼の兵營の町  
 長屋の如き、造船所に何の圍障もあらざる、殊に賄賂公行、其内部を探る

に容易なる想像以外に出るものあり。更に歩を轉じて少しく裏町に至らんか支那人は群をなして雜居し宛然支那に遊ぶの觀あり其不潔なる更に甚だし聞く支那人の在留するもの約三萬に及ぶ。

八月八日 此日恰も露國が瑞典と戰つて勝たる紀念日にして實に露國がバルチック海に出るの端緒を開きたる基なり旗艦ロシヤ號を首めとして六艘の東洋艦隊は滿艦飾をなし祝砲を放つ其音轟々四山に反響す碇泊中なりし我軍艦松嶋秋津洲烟を放て去る我等慈母に捨らるゝの感あり予上陸寺見氏を訪ふ適々九州茶葉組合頭取嶋津良知氏紅茶販賣の社用を帯びて將にハバロフスグに赴かんとするに會す故に急に同氏の一行と共に明日午前十時を期し弱府に向て出發せんことを約す之れ實に西北利亞内地旅行の端緒なりとす。

既成西北利亞鐵道

八月九日 予等は先づ九州茶葉組合を訪ひ島津氏の一行と相携へて浦港停車場に至る時已に遅く客車は乗客を以て充されたり則ち車掌に幾何を賄し婦人室を占むるを得たり車掌曰く嚮に一婦人の來る約あり若し來るあらば少しく席を譲り給へと已にして黒衣の一老婦人の來れるあり予等則ち先の婦人の來れるとなし早々席を譲り禮を厚くして之を迎ふ婦人入口に立ち止りて坐せず適々島津氏の通辯某來り突如之を叱し去らしむ予何の故たるを解せず之を某氏に問ふ氏笑て答へず後に聞けば彼女是一個の巡禮にして憐を乞ふなり彼女が胸に垂れたるミルクの罐は之れ賽錢箱なりと相顧て啞然たると久し暫くして鏗鏘たる鈴聲は停車場の内外に響き渡ると共に汽車は緩々として進行し始ゆ抑も本鐵道は一千八百九十一年大津事件以後ニコライ自ら此地に臨み親しく起工式を擧げ明治三十年九月ハバロフスグまで殆ど八百露里間開通するに至りたる者にして實に舊計劃に基



く西比利亞鐵道の一端なりとす、故に本鐵道に依り横斷大鐵道規模の  
 大体を推測するに難からず、既にして汽車は浦港の市街を横切りアム  
 ール灣の沿岸に出づ、風光絶佳、尙山陽鐵道にて旅行するの感あり、凡そ  
 五時間にしてニコリスク停車場に達す、之れより地勢漸く開け凡そ十  
 五時間にしてカール河を渡る、東方錫赫特嶺は遙に雲烟の裏に隠滅し  
 地平線を以て限られたる無限の大平野は宛然大陸的光景を顯して千  
 紫萬紅野は一面花毛氈を布たる如く、稀に開耕せられたる島、自由に放  
 たれたる牧場の馬、一として旅情を慰むる種子ならざるはなし、若し夫  
 れ東雲の空漸く紅を帯び、暫くして朝暎地平線を離るゝの時、或は夕陽  
 已に西に沈んで一輪の玉兔地平線を見捨てんとするとき、人生誰か天の  
 廣大地の無邊、自然の美妙を歌はざる者やある、夜も過ぎ朝も去て十日  
 午後三時ハヴロフスク停車場に着きぬ、全程七百十七露里、時を要する  
 こと廿九時間、速力は卅五露里を以て最大速度となす、尙我邦京濱間の

速力と大約同一なり、之れ未だ軌道の堅固ならざるによるべしと雖も  
 西比利亞大鐵道の計劃の變更は、既成線の必要を減せしめたること多  
 きに因らざんばあらず、  
 全線路は大体に於て正北に向て走れりと雖も、其屈曲の激しき豫想外  
 に出づ、之れトンネル橋梁等費用の節減を主としたるによるなるべし  
 現今該鐵道は一方に於ては殖民開墾の用に供すると同事に、兵事的關  
 係を有するものなれば、稍々奇異なる感情を懐かしむるものあり、則ち  
 卅ヶ所の停車場は何れも屯田村を去る一露里乃至二露里の所にあり、  
 宛然野中の一軒屋たるが如き、又た驛長より工夫に至るまで皆武装せ  
 るが如き是なり、要するに現今に於ては主として官吏の移動に用ゐら  
 るゝのみにして貨物等の運搬は一般に水路によるものとす。

ハヴロフスク府

ハヴロフスク府は停車場を去る二露里、黒龍江の上流、凡そ九百露里の

右岸烏蘇里河との會點にあり、一千八百五十八年東部西比利亞の參謀官某始めて此地を開き官舎を築き、黒龍江地方攻略者の一人なるハバロフの名を執りてハバロフスクと命名せり、爾來長足の進歩をなし、現今人口一萬八千、黒龍江地方總督の所在地なり。

公園は黒龍江の沿岸にありて地形高燥なり、黒水は其幅一哩半溶々として烏蘇里の水を合せて流る、聞く春五月氷漸く解くるの時に當り、黒水並に烏蘇里より流れ來れる氷は相衝突し、瞬時にして一大氷山を爲す、頗ぶる偉觀なりと、口給水を隔て、無限の太平野は漠々として天に連る、公園の一隅忽然高く聳ゆるは黒龍江攻奪者ムラビヨフ、アムールスキーの銅像なり、方形の石臺の上に鋪鎖を踐み、雙眼鏡を擁して立つ、聞く之れ遙に本邦を睥むの狀を寫すものなりと、口給全体の調和頗ぶる宜く本邦諸銅像に比すれば誠に雲泥の差あり。

警部長の親切

予が「ロンドンホテル」に投ずるや、未だ十分を経ざるに一日本人來れり、予に告げて曰く、予今警部長を訪ひたるに、日本官人二名來れり、行きて尋ねよと、則ち來るなりと、之れ予等が大學の制服制帽を着するを以て、誤て官人視したるに因るなり、又た以て日本人に對する注意の一般を推測するに足らんか、翌朝氏來り告げて曰く、詳細を警部長に語りたるに、警部長大に喜び且つ來遊せんことを乞ふと、則ち島津氏の一行を送りて、後ち警部長ガール氏を訪ふ、氏は獨逸人なり、性頗ぶる花樹を好み、自ら培養し以て樂む、氏曰く、予等が爲めに消防の訓練を見せしむべしと、則ち鐘樓に導き、鐘聲高く命令を發するや、午睡を貪りつゝありたる消防夫は各々其準備に従ひ、馬を導くもの、馬車を備ふるものあり、忽にして八臺の馬車は其設備を了り、又再び號令の下るや、彼等は煙を立て、市街を馳すると、凡そ二十分にして歸來す、氏は更に予等を花園に導き、優待至らざるなし、已にして消防夫長を召び叱して曰く、日本より來客

あり、何ぞ夫れ準備の遅きやと、警部長の叱言は全く形式に屬す、乍併予の  
 見を以てせば其遅緩なる東京の消防夫の比にあらざるなり、殊に水  
 桶を積み行くな予稍や滑稽的に類するが如きも、當地は給水頗ぶる不  
 完全にして湯屋の水等は皆河水を用ゆる位なれば其要あるなり、聞く  
 冬期火あり、消防に赴くも已にして貯水缺乏せば再び運び来るまで只  
 だ待のみと、呑氣なると笑ふ可きなり、翌日警部長自ら予のホテルを訪  
 ひ又圖書館並に博物館の觀覽を約す、圖書館は博物館陸軍俱樂部相列  
 して公園の傍に在り、藏書凡そ五萬餘規模大ならず規律亦た立たず、  
 博物館は目下修繕中一般の縱覽を許さず依て巡查を伴ひて之を一覽  
 す、口繪予の將に入らんとするや陸軍少將あり、巡查を叱して曰く何す  
 れぞ斯る亂雜なる状態を外客に見せらるゝや之れ警部長の恥辱なる  
 のみならず國家の体面に關す、宜しく事由を陳べて謝せざるべからず  
 と露國人の形式を尊ぶ風以て觀るべし、該博物館は博物館と稱せんよ

りは自然的科學に關する一個の標本室と言ふべきなり、歴史的の趣味  
 もなく科學的の價値も少なし、人或は此博物館を以て浦港の博物館に  
 優るとなす、之れ全く科學的能力なき野人の語のみ。

露人フキモツフ氏は警部長の親友なり、獨逸語を宜くす、予等を案内し  
 て地方幼年學校に至る、校は市街を隔れたる高臺にあり、規模大ならず  
 と雖も各室の設備具さに備はる、予等校長の案内にて校内校外を觀覽  
 し後更に自宅に導かれて夫人令嬢と共に予等の健康を祝さる。

バマロフスクの將來

ハマロフスクの地たる前に黒龍の大江を擁し、右に烏蘇里の便あり以  
 て水運の利を占むるに足る、浦港と瀾府間の鐵路は僅々廿九時間にし  
 て其の關係を連絡す、殊に總督府の所在地として將來の殷富期して待  
 つべきものあるが如しと雖も、抑も該府の地勢たる、布街は黒龍江に直  
 南に交錯せる三大丘陵と、二個の溪谷とよりなる、故に南北に往來せん

と欲せば身は常に傾斜の坂溪によらざるべからず、如此交通不便なる地何如ぞ大都會を形成するを得べき蓋し西比利亞大鐵道にして舊計劃により黑龍江を沿ふて西するならば、少なくとも鐵道の利益を被るべしと難も、今や東清鐵道は此等の利益の大半を奪ひ去りたるのみならず、黑龍江に於ける汽船も當地を以て乗客接續地とするに過ぎず、故に當府は僅に總督府あるが爲め現狀を維持するのみ、軍人により經濟上の状態は維持せらるゝのみ、總督府が他日ニコリスクに遷りたらんには當地は亦た一個の僻村と化し去るならんか。

ハ、ニコリスクに滞在すること前後四日間、八月十四日午後四時黑龍江汽船會社の所有船セルゲイウ井ツチ號に乘シ、プラゴウエシチエンスク府に向て出發す、早川、中川、境の諸氏及警部長ガール、アキモフ二氏亦た船に送らる。

黑 龍 江

東部西比利亞の貴重なる所以は黑龍江あればなり、黑龍江の價值あるは太平洋に注げばなり、溶々として二千有餘里無數の支流を合せて黑龍沿海の二洲を過ぐ、其地味を豊沃にして其生産を助る效の大なる素より言はずもがな、其文華を誘導し無人の境を開く效果に至りては蓋し計る可からざるものあり、故に西比利亞問題を解釋せんと欲せば西比利亞大鐵道と相待て黑龍江を解釋せざるべからず、該地方は廿世紀に於ける禍亂の泉源たる所以、又た此大江の存するあればなり、乞ふ少しく之を陳べしめよ。

黑 龍 江 水 誌

黑龍江なる名稱は遼史に出るを以て始とす、滿州語にて之を薩哈連烏喇と稱す、蓋し薩哈連とは黒の義にして烏喇とは江の意なり、即ち古代所謂漠北の黒水にして、韃鞨及室韋人の住せし地なり、歐洲人は之をアムール河と稱す、之れ此江を發見せし哈薩兵の命名せし所なるべし、或

は曰く初め露人のエムール河嘴に對してアルバーチン城を築くや、其名を執りてアムールと稱すと、曰く此河畔に住する土人をアム又はマムと呼ぶを以て斯く名付くと。

黒龍江の泉源に關しては元來二説あり一は松花江を以て然りとし、他はシルカ河を以て然りとす、前者は滿州人の稱する所にして後者は露人の主張する所たり、乍併水量の多少に關せず、河流の長大なるを以てせば勢ひ露人の説を可とせざるを得ず、何となればシルカ河は源泉より黒龍江口迄二千五百哩に及べるに拘らず、松花江は其海に入る點まで僅に一千四百五十哩に過ぎればなり、黒龍江の上流ヲノ河は源を北蒙古肯特山に發し、露清の疆域に近く東北に流れ、インゴタ河を合せシルカ河をなす、シルカ河は東流してストレチンスク附近に於てアルグニ河を合し、黒龍江より黒龍江州に入る、ブラゴウシチエンスクを過ぐるや北來のセイヤ河を受け、愛琿城を経てブレヤ河を合せて小興安

嶺を横斷す、峽間凡る百七十吉露米突、斷崖奇石兩岸に排列し、風光頗ぶる美なり、峽を出づれば河流再び張り島嶼星列す、其松花江と相會するや河勢大に變じ、松花江の水勢に従て流る、之れ其水量の多きを示すものなり、後ハハロフスク附近に於て烏蘇里河を合す、之れより北チアヤトイン山と南シホト山嶺との間を通過してソラヒースク、マリンスクを経てニコライスクに達す、此邊に至れば河流大に其性質を變じ、暴風に際すれば恰も海上に於けるが如く怒濤を起すべしと曰ふ、又分流縱横交錯し、數多嶋嶼の間を廻り、韃靼海峡に注ぐ。

經濟上に於ける黒龍江

黒龍江の農業上に及ぼせる影響は未だ顯著なるものなしと雖も、其經濟上に及ぼせる効果は實に偉大なりと曰ふべし、世人徒に西比利亞鐵道の利害のみを論ずるに急にして、敢て黒龍江を説くものなし、予何が故に然るかを解する能はず、予の見を以てせば、假令西比利亞鐵道完成

すと雖も、該江の自然的効果は決して消滅するものにあらず、却て該鐵道が旅客の交通を盛ならしむると共に、黒龍江は益々貨物の運送を以て其便益を與ふること愈々大なるべし、現に烏蘇里鐵道は浦港ハハロフスク間を連絡すと雖も、之れ唯に乗客の便を計るに過ぎずして、西北利亞内部に對する貨物の運搬は尙ほニコライスクより轉じて黒龍江の水利に依るにあらずや、故に曰く黒龍江は自然的活動機關にして、西比利亞鐵道は人為的活動機關なり、互に輕重あるべからずと、故に吾人は相俟て其利害を研究し以て經濟上の地位を明にせんとす、黒龍江に於る航運業は専ら新黒龍江汽船會社及び舊黒龍江汽船會社の事業に屬す、兩社共に露國政府より莫大なる保護金を受け營業するものにして、新黒龍江汽船會社は政府の郵便事業を受負ひ、毎五日にニコライスク及びビストレチンスクの間を往來す、其主とする所は乗客にあり、乍去目下の状態を以てせば露國官吏及武官の運搬に使用せらるゝものと

ふも過言にあらずるべし、舊汽船會社は主として荷物の運輸に従ひ、殊に東清鐵道に關する材料の運搬は此會社の専務とする所なり、故に定期にあらずして隨時荷物を滿載して航行す、其他私人にして二三艘の汽船を所有するもの少からず、總數百六七十艘に及ぶ、其構造は大小善悪なきにあらずと雖も、其最も善良なるものは、長さ卅餘間、幅七八間、二階三階の樓船にして、電燈を照し、一二等は各々客室を異にし、喫煙室、遊歩場等盡く完備す、車輪は多くは舵部に附着し、喫水は四尺内外、船底は平かなり、速力一時間凡八露里乃至十露里なるべし、各船は一艘乃至三艘の荷物船を曳けり、バマロフスク、ブラゴウエシチエンスク間凡九百露里、船賃一等二十三留、二等十三留、三等三留余、一二等は別に食料日に二留を要す、三等は所謂甲板船客にして、食料自辯なり、故に停船するや、近傍の農民牛乳、黒パン等を携へ販賣し來るべし、故に毫も不便なし、若し夫れ黒龍江口ニコライスクに於て乗船せんか、黒龍江の本流を溯

ること凡そ七日間にしてハムロフスクに達すべし更に七日間にして  
 プラゴウエチェンスクに着すべく茲に於て稍々小形の汽船に換へ更に  
 進むこと十日にしてストレチンスクに到着すべし現今西比利亞鐵道  
 の東端は已に茲に出づ故に鐵道に乗り換へなば一晝夜にしてチタに  
 至るべくチタ、バイカル湖間未だ鐵路の敷設なき爲め馬車の便を以て  
 六日間にしてバイカル湖畔に出づべく汽船を以て湖を横斷(凡そ十二  
 時間)イルクーツクに達せば露都よりの鐵道は已に完成せり故に浦港  
 を出でしより僅に卅余日にして愉快に且つ平和に歐洲何れの部分に  
 も達することを得べし故に露國官吏の東洋に來るもの皆西比利亞を  
 横斷して來る西比利亞大陸横斷は今日已に易々たるのみ之れ實に黒  
 龍江の賜にあらずして何ぞや。  
 乍併茲に該江の爲め惜むべきものあり曰く航行期日の短期なること  
 之れなり則ち無限の大平野は北方の寒氣を防止する障壁を有せず加

之寒潮の影響は一層寒氣を激烈ならしめ爲めに黒龍の大江は十月中  
 旬より五月中旬に至る殆ど半歳に餘れる長日月は全く氷の爲めに鎖  
 され唯だ犬に曳かるゝ橇によりて交通の不便を補ふのみ。

黒龍江に關する國際法問題

一千八百五十八年愛琿條約第一條に曰く

アルグン河より黒龍江に至る左岸は露國の領地とし右岸に沿ふ  
 て烏蘇里河に至るまで清國領とす

愛琿條約は其後天津北京の兩條約を経て確定したるものなり乍去天  
 津條約は愛琿條約第二條に於て烏蘇里河より海岸に至るまでの地は  
 他日兩國に於て其境界を決定するに至るまで暫く彼我兩屬地となす  
 と曰ふ條文を確定し現今の沿海洲一帶の地方を露國が領有するに至  
 りたるのみ黒龍江に關する條約にあらず又た北京條約は清國全体に  
 關する露國の權利を擴張したると同時に愛琿天津條約の個條をも合

せて確定したるに過ぎず、滿州地方に對する露國の權利は消去する所なきなり、然ば烏蘇里河會點より上流は明に露領西比利亞と清國滿州との間に於ける國際河川たるを明白なりと曰ふべし、故に國際公法上の原則に従ひ、其中央若くは航行し得べき流の中央を境として主權行動の範圍を定むべきなり、然るに愛琿條約第三條は曰く

第三條 魯清兩國船舶は黑龍江、松花江、烏蘇里河に於ては航海權を有す、但し他國の者は此權を有せず

と、故に國際法上の原則によるも、又第三條の解釋によるも、清國は明に黑龍江に於ける航海權を有す、而して此第三條は天津北京條約により變更せられたるを聞かず、然るに予の觀察する所によれば事實は全く之に反す、露國は絶対に支那人に對して航海の自由を許さず、唯々自己の便益の爲め小形支那船の往復を默許するのみ、若し事實上支那人が航海し得る實力なき爲め現在の狀態を呈するならば、素より論ずるの

要なし、乍去絶対に航行の自由を禁止するに至ては予は露國の舉動を無視すること能はず、何となれば之れ國際法の原則を蹂躪するものなればなり、之れ露清間秘密條約の結果なるか、復た予が觀察の誤れるか、暫く記して大方の教を待つ。

黑龍江を溯る一週間

セルゲイ・井ツチ號艦を解き烏蘇里河口を左岸に望みて進む、イルクノツク旅團長及副官伯爵某等二十餘名同船す、予が同室にトムス幼年學校生徒あり、性頗ぶる快活獨語を善くし、滑稽百出圖を解かしむ、試に下等船室に至らんか、熊の如き露人、豚の如き清國人、或は亞片を喫ひ或は博戯をなす等、社會的罪惡は一として行はれざるなく、彼等下層社會の狀態は茲に寫實せられたるものと曰ふべし、ハムロフスクを發してより凡そ廿四時間、八月十五日午後三時松花江口を過ぐ、唯た見る江水漫々、恰も湖上にあるが如く、幾多の島嶼相列なり、何れが其口なるやを



知らず船更に進むこと一晝夜十六日午後二時興安嶺峽に至る山勢水  
能全く一變し空漠たる兩岸の大平野は盡きて碧岫峭壁の境に入る仰  
て四顧すれば峰巒環り萬木天に攬す江水迢々として流れ稍々急なり  
山は絶へんとして絶へず水は盡きんとして盡きず峽間を過ぐるこ  
十有二時間山勢終に盡きて天地再び開く。

ハ、ロフスクを發してよりルゴビヤ、ミアイロ、セメノブスカヤ、エカ  
リテリノニコルブスカヤ、ボンベイフカ、ラツデインノイケンチースカ  
ヤ、ボヤルコバ等十餘個の停泊場を経て八月十九日午後五時愛輝城を  
過ぐ愛輝は清國滿州北部の重鎮にして露清交渉の衝に當り史上殊に  
著名なり適々煙霧四方に湧き大風強雨驟に到り天地爲めに杳冥遙に  
當時の鬼雄を吊ふ者の如し午後十時ブラゴウエチエンスクに着す予  
等將に上陸せんとす同船の客予等か爲め別盃を擧げ且つ曰く君はス  
トレチンスクまで行き給ふべしと蓋し其意分袂を惜むにあり予も亦

た客の爲めに善良なる前途を祝す乍去約束したる友は終に舟に來ら  
ざるが爲め則ち明朝上陸を期して船中に眠る。

我師我友に會す

明くれば八月廿日早朝徳岡氏來船直に上陸加藤寫眞店に至る我師友  
辻暎君また加藤氏の宅にあり君は予か師にして予か友たり一昨年相  
別れてより爾來音信相通せず今哉計らずも異域萬里黒水の畔君が健  
全を祝し君が警咳に接し君が意氣更に豪なる者あるを見る喜悅の情  
は懐舊の感に壓せられて暫しは謂ふべき言葉もあらざりき聞く昨日  
予等の到着を知り相携へて停泊場に來り給ふと前後二回なりき而も  
予等を見る能はざりきと之れ全く予か船の途中淺瀬に乗り上げ停滯  
すること四五時間に及びたるを以てなり。

ブラゴウエチエンスク府

武府は黒龍江の上流凡ろ千八百露里の所にあり黒龍江とセイヤ河と

の會合點に位し、人口凡そ三萬三千、對岸には黒河屯並に愛琿なる滿州の貿易場を控へ、該地方よりは燕麥野菜を得べく、黒龍江の水運は上流に向て更に十日を通じ、中部シベリヤとの連絡を保ち、殊にセイヤ河の上流七百露里、セイヤの地方は有名なる砂金産出地にして日々十萬餘の坑夫は其業に従へり、此等の諸原因は實に當府をして東部西比利亞に於ける貿易の中心たらしむる所以にして、其殷富なること遙に浦港の上に在り、浦港は武裝せられたる中古の武士の如く、唯だ威儀堂々として毫も平和的調和あるなし、武府は純然たる商業府にして四海平等なる主義は稍々行はれ、人心温和武斷的威壓を見ること稀なり、チエーリンの本店はアルベルス支店と相對して府の中心をなし、府廳圖書館等あり、宛然歐洲の一都市たるを失はず。

當府は管に商業地なるのみならず、好良なる工業地たり、現今尙未だ幼稚の域を脱する能はざるも、製粉所、麥酒製造所、製鐵所、製皮所、及マツチ

製造所等あり。

將來に於てセイヤ河畔并に滿州地方より産する燕麥は益々製粉所を盛ならしむべく、又た製造所は今來大に其規模を擴張しつゝあり。

知事の優待

府知事はクリーフスキー氏なり、氏は陸軍少將にして頗ぶる日本人を愛す、嚮に故川上大將の當地に來らるゝや、氏は優待至らざるなかりしと、予等の氏を訪ふや、氏大に喜び且つ曰く、今夜諸君を陸軍野營に於て饗すべしと、午後六時參謀士官某馬車を以て予が寓に迎ひに來れり、則ち同乗して野營地に赴く、蓋し露國軍隊は夏期中兵營に起居せず、皆野外に屯營す、而して其附近に借交社の如きものを建て、以て集會所とす、予の馬車第一門を過ぎ將に第二門に入るや、一小隊程の兵士列を正しくして帽を脱し、予が爲めに歡迎歌を歌ふ、予則ち答禮す、已にして會堂に着するや、劉曉たる軍樂隊は忽にして樂を奏す、之れより宴會の席に

列なる美酒前に横はり珍珠左右に連なる席を同しくするもの士官并に其夫人等三四組音楽に従て或は歌ひ或は舞ふ夜の更るを知らず

愛 輝 行

辻君子に語て曰く予此地に來り未だ愛輝を知らず適君等の來るに會す相共に遊ばんと予大に喜び旅装を具へ八月廿一日午後三時辻徳岡石澤及び予の四名支那人の小舟に乗て出發す同行者は支那人四名なり船は流に従て緩々として下り既にして中流に至る天黒雲を生じ急雨盆を覆すが如し則ち舟底の一室に入る室には支那人雜居す彼等亞片煙草を喫ひ狹隘なる舟室は煙を以て充され苦痛言ふべからず夜十時漸くにして愛輝城に着す愛輝はブラゴウチエンスクの下流州七露里にある滿州北部唯一の重鎮なり現今尙一營を以て其兵備を嚴にす予の着するや恰も雨後道路泥濘殆ど歩むべからず加之時已に夜半商賈は已に門を閉して人を見ず唯だ怠惰なる犬の軒下に横はれると白

衣の火見番が辻々に火見を爲せるのみ適々火見番を捕へて旅舎を尋ねれ共彼れは予等一行服装の異れると又言語の不通なるに恐怖して逃げ去るのみ夜は漸く深更に及び未開の蠻地に徘徊す殊に當市は賭博の本據地にして惡漢少からず本邦人の害に遇ふ者往々聞く處なれば危険なること計るべからず一夜曰く宜く舟に歸り一夜を明かすべしと恰も宜し火見番あり予を導て一旅舎に案内す則ち此旅舎に就て予等の紹介せられたる家を訪ひ戸を叩きて案内を求む暫くして燈を携へて來るものあり予來意を告ぐ乍併未だ門戸を開かず不得己戸の隙より紹介状を渡して一泊を乞ふ已にして家人は去りぬ待つこと半時家人再び來らず夜色暗澹として咫尺を辨せず唯だ犬の遠吠は時に沈靜を破るあるのみ遙に聞ゆる火番の木魚の響は陰々として物凄く一行稍々恐怖の念を催しぬ忽にして門前馬車の軋る音あり顧みれば一個の騎士は白馬に跨りて先導をなし三頭の白馬を列ねたる馬車

は四五の兵士を乗せて来れり、之れ所謂滿州の騎兵なり、馬を止めて審問して曰く、汝は抑も誰予何が爲め来れる、予等一行能く滿語に通ずる者なく殊に異装の情態は彼の疑惑を増すの種子なりき、彼等の審問する所は一言は一言より急に危険は最早や瞬時に迫りぬ、恰も宜し家人燈を持って来り予等に告げて曰く、予か家己に客を以て充ちたり願くは予か親戚の宅に導くべしと、於此平兵士等疑團氷解予等又た安全に一豪農の家に泊するを得たり。

愛理よりの歸路舟に依らず陸路七里支那馬車に乗る、車は三頭の馬にて牽けとも遅きこと牛の如く漸く武府に歸る。

歸途に就く

子の武府に滞留すること前後一週間、八月廿六日汽船チサレウ井ツチ號に乗して歸途に就く、加藤辻徳岡の諸氏殊に船に送らる、知事又た船に來て別を告ぐ、船は流に従て下る速き事矢の如し、興安嶺峽も過ぎ

松花江口何時しか去て嚮に一週間を要せし舟程は僅三日にして廿九日午後二時ハッロフスクに着す、金山、中川、阿部野、境の諸氏來訪せらる、警部長予等が爲めに特に「ロンドンホテル」の一室を設けらる、乍去雨は激しく道は泥悪なるを以て終に固辭して船中に一泊す、翌日正午汽車に乗じて一先づ浦港に歸り扶桑社に投ず。

ニコリスク行(東清鐵道の起點)

予嚮に内地に向て出發するの際、車中遙にニコリスク市を望む、則ち問ふて曰くニコリスクの地一遊の價値あるや否やと、傍人答へて曰く該地たる眞に一寒村に過ぎずと、乍併予が心中安ざる能はざるものあり、適々浦港に歸來するや日本麥酒會社々長馬越恭平氏と會し相携へて該地に遊ぶ、而して予が疑團は初めて氷解するを得たり、從來内地に旅行するに當ては旅行の大原則たる多く見多く聞くの主旨に従ひ、玉石混同盡く之を腦中に藏めたり、去れども未だ之を分拆するの標準を得

る能はざりし、然るに一度該地に遊ぶや此等不統一なる思想、片々たる  
 觀念は僅に合同するを得て一個の斷案を下すを得るに至りぬ、若し夫  
 れ徒に人言を信じて直に歸國せんか、或は混雜したる觀念は終に解く  
 事能はざりしやも計るべからず、西比利亞の地形たる大陸的性質を完  
 備し、平野は空漠、河流は長大、山岳は緩漫なり、故に其風光の壯大、廣潤な  
 るものありと雖、未だ險峻奇抜なるものあらざるなり、然るにニコリス  
 クの地勢は全く之れに反し、四圍の山勢長大高峻、僅に南方浦港に達す  
 るの一路を開くのみ、故に冬期激烈なる北風は爲めに障害せられて氣  
 候を善良ならしめ、降雪を少からしむ、之を浦港の氣候變化極まりなき  
 に比すれば、天淵の差ありと曰ふべし、而て其の地位たる浦港を去る僅  
 に二十五里、若し夫れ浦港をして神戸たらしめんか、ニコリスは明に  
 大坂の地たり、其距離よりするも、其地勢よりするも、將來浦港を擁して  
 東部西比利亞に號令すべきの地たり、殊に緩芥河は西より來りて南に

流れ、浦港の西方より海に注ぎ、水運の便實に僅少ならず、陸に鐵路の便  
 あり、水に緩芥の利あり、工業地たるべきの資格缺くる所なしと信ず、况  
 や緩芥の水域は此平野を豊饒ならしめ、以て農業的生産に適當ならし  
 む、加之一方に於て浦港を控へて海外貿易の中心となり、一面に於ては  
 支那滿州を去る僅に三十里、三岔口と相對して滿州貿易を制す、之れ實  
 に商業上の好地位を占る者にあらずして、何ぞや、此に於てか露國は夙  
 に茲に着眼し、東部西比利亞に於ける勢力を茲に集めんとす、抑も露國  
 が東邦政策を解釋せんとして設けたる機關少らずと雖も、吾人は指を  
 黒龍江の航運及西比利亞大鐵道の二部に屈せざるを得ず、殊に西比利  
 亞大鐵道に至ては天下人心をして寒からしむるに足るものあり、其初  
 に當てや浦港より直にハバロフスクに出で、黒龍江畔に沿ふて、バイカ  
 ル湖畔に出づる計畫なりしも、三國干涉の結果は滿州に對する鐵道布  
 設權を得、急に計畫を變し、東清鐵道の完成を急ぐに至りぬ、ニコリス

は之れが起點たり、之れよりハルビン、チ、ハルを経てカイダルフスカ  
 ヲに出で直に露都に連絡す、此に於てかハハロフスクの繁榮は勢ひ茲  
 に移らざるべからず、總督府を初めとして浦港に於ける諸官廳を茲に  
 移さんと欲する亦た故なきにあらざるなり、然るに世人徒に浦港を重  
 視し更にニコリスクを顧みる者なし、之れ大に其見解を誤れるものな  
 り、吾人は必ず觀察の中點を此地に定めざれば到底正當なる解釋はな  
 し得ざるものと信ず、乍去世人をして該地を輕視せしめたるもの亦た  
 故なきにあらざ、何となれば從來西比利亞地方に旅行する者は多く浦  
 港のみを觀察し直ちに歸朝の途に就くものにして、未だ内地に一實業  
 家の入込みたるを聞かず、又神保博士の外一學者の視察したるを知ら  
 ず、故に此等の人は皆ニコリスクを視るとなくして歸國せるものなり  
 又た深く内地に旅行する人は該地が鐵道の中間に位し下車するの不  
 便あるを以て、此等の人は直ちにハハロフスクに至り、又ニコリスクを

顧るの時機なし、之れ世人が比較的此地を知らざる所以にして従て  
 重要視せられざるの原因となりたるなり。  
 予は世人に反しニコリスクを最上研究地として推舉するものは敢て  
 現今に就て論するにあらざるなり、之を過去の歴史に照し之を將來の  
 趨勢に考へて論断するものにして、若し之を現状より直寫せんか、人口  
 僅に一萬五千、昨年に至り市政の施行せられたる位にして未だ府たる  
 名稱を受くる能はず、街路は泥濘、建築粗悪、一見新開地たり、乍併露國が  
 該地に對する將來の計畫に至りては實に恐る可きものあり、市街規模  
 の廣大なる兵營の壯大なる一として露國東邦政策の反影たらざるは  
 なし、更に翻て過去を追想せんか、趣味更に深き者あるべし、元來地形の  
 善良なる古今其適用を誤らず、武藏野は例令一度は草より出で、草に  
 入ると詠まれたる時代を經りしかども、時勢變轉は終に帝都の基礎を  
 開かしめぬ、ニコリスクたる者豈に此自然的理法を免るべけんや、之を

要するにニコリスクたる現在には其衰運の極に達したりと雖も過去に於ては少なくとも此地方の重鎮をなし、又將來に於てニコリスクなる名稱は露人經營の下に再び幾倍の盛大繁榮をなすこと蓋し期して待つべきなり。

再び浦港に歸來す(日露開戦の風説)

ニコリスク日本人俱樂部に一泊して非常なる優待を受け、浦港に歸來するや軍人として田村大佐の一行あり、實業家としては近藤廉平及馬越恭平氏等の一行あり、新聞記者として松嶋氏あり、其他憲政黨の松原氏東亞同文會の笹森氏あり、相集まり談笑日も尙ほ足らず、時に適風評あり曰く日本人朝鮮王を斬る、或は曰く日本軍隊豆滿江に進軍し朝鮮國王我公使館に逃ると、之れと同時に露國東洋艦隊は舳艫相撈へて何れかに去りぬ、此に於て風評は一層高く予か某露商人を訪ふや、女主人又其事實なるを告ぐ、予百方辯解すれども疑團は終に解く能はざりき

元來露國は邊境の人心動搖する事を恐れ常に秘密主義の極端を執り新聞の檢閲を嚴にし敢て世界の變動に關係せざらんことを務む、爲めに風説は風説を染みて停止する所を知らざるを常とす、然れども今回の如きは全く根據なきにあらず、予が朝鮮の諸港に寄港するや此風評の實跡は勃々として顯はれぬ。

浦港を發す

九月七日相模丸に乗じ元山に着し馬越氏と共に上陸するや陸上一韓人を見ず、之れ韓人の同盟罷工に依るなり、元來此地に於ける汽船に關する運送業は事實上盡く本邦人の手に屬し、韓人は僅に本邦人に使役せらるゝのみ、然に京城に於ける韓人某新に韓船に關する運輸業の獨占權を得二三の小舟を以て之に従事するに至れり、此に於て本邦人の間に衝突を生し本邦人外務部に迫て曰く、韓人にして實力上本邦人の職業を壓倒するに於ては毫も異議を申立つべき理由なしと雖も獨

占權を興ふるに於ては之れ明に條約の明文を無視するものなり、宜く其特權を停止すべしと、然るに一方に於て本邦勞働者は相結で腕力に訴ふるも尙ほ韓人を排除せん事を計り將に大衝突を惹き起さんとする幸にして二三負傷者を出せるのみにして事なきを得たり、於此韓人同盟して日本人の爲めに勞役に従事することを禁じ、居留地の境界にある橋畔に屯して韓人の交通を鎖し、元山里に於て同盟罷工本部を設け運動今や酣なり、朝鮮監理は橋畔に揭示して専ら鎮靜を務む、聞く所に依れば此種の同盟罷工たる例年殆ど同時期に起る、乍去今年の同盟は其結合力の強固なる或は外人の後援なきにあらずやと、之れが爲め船積の遲滯不便日ふべからざるものあり。

已にして釜山に來るや京坂亭事件なる者起る事は小なりと雖も露國の非禮決して黙すべきにあらず、更に馬山浦に於ける露國の失敗は變じて蔚陵島の占領となり、再び韓廷に對する強制的請求となる、此等の

事實は未だ外交の秘密に屬し公言する能はずと雖も明に浦港に於ける風説の實体におらずして何ぞや。

七月廿八日帝都を發してより茲に約五十日にして九月十八日朝鮮の東海岸を経て本國に歸來し、危險と注意との言葉を以て滿たされたる旅行は安全愉快なる反對の報道を齎らして再び帝京に入るの榮を得たり、予は素と一介の學生のみ、然るに到る處觀察の便を得熱心なる優待を蒙る、吾人特筆大書して我在留同胞諸君の厚情と露國朝野人士の親切とを謝せざるべからず。

### 其八 東部西比利亞に對する社會的觀察

露國が東部西比利亞を占領してより僅に四十年、一面に於ては交通機關の發達を計り、一面に於ては殖民政策に基きて開發に従事す、斯る急進的開發の結果は勢ひ社會的秩序を保つ能はず、風俗の壞亂道德の敗



露 國 人 の 状 態

退恐るべきの禍亂は漸く其病源を高めつゝあり。

露國政府は黒龍沿海の二州に對する開墾方針として夙に四十八年計劃を定め、其方法として屯田兵組織に依りて移民をなし、更に自由移民に對して特別の保護を與へ之を奨励す、又た嚮に國事犯として追放せられたる罪囚にして大赦の恩典に會し自由民となれるもの少なしとせず、故に現に此地方に住する露人の大部分は軍籍に在るものにあらずれば追放人なり、此等皆文武の權を委任せられたる黒龍江總督の下に監督せらるゝものなり、所謂武斷的政治とは之を言ふ者なるべし。教育制度は頗ぶる幼稚にして中學程度に止まり、其專攻する所は語學と神學とにして實質的學問としては毫も之れを授くるなし、之に反して宗教の勢力の大なる大市街は言ふに及ばず、百數十に満たざる村落に於ても獨り寺院は巍然として高く聳え、金色の十字架は勢力の範圍を

示すものゝ如し、一方に於ては實質的學術の研究を斥け、一方に於ては宗教的迷信を傳播す、民愚ならざらんと欲するも得べけんや、凡そ壓制を以て國を治むるもの民をして由らしむべく知らしむべからず、露國治國の大本又之に外ならず。

又た此地方に派遣せらるゝ官吏軍人等は、幾分の増級あるべしと雖も物價の高き能く其妻子を養ふに足らず、此に於て上長官は暫く措き青年の輩に至ては内に家族團樂の樂を得るなく、外に耳目の欲を滿すの設備なし、元氣溢るゝ處風俗の破壊となる、新開地の情態概ね斯の如し殊に女性の比較的少數なる一夫一婦の耶穌教の原則は反て宗教的會合によりて破らる、故に曰く露人の兄弟にして其容姿相類するもの稀なりと、之れ稍々酷評に過ぐるものあるが如しと雖も公園に於ける會合の如き、魯西亞風呂の秘密の如き、殆ど云ふに忍びざるものあり、予がハバロフスクに到着する一週間前の事なりき、一婦人の私通事件に關

し少壯士官と裁判官との間に生死を賭し相闘ふの醜態を演ずるに至れり、中流以上の状態已に斯の如し、下層社會の有様に至ては更に甚だしきものあるや必せり、賄賂の公行賭博の流行等社會罪惡は一として存せざるなく、上下擧て自己の財囊を富ましむるに汲々として他を顧みるなし道義の衰退何ぞ夫れ甚しき。

朝鮮人並に支那人の状態

浦港に於ける朝鮮人約二千、支那人約三萬人に達す、露人の之に臨む牛馬を御するより尙ほ甚だし、朝鮮人の職業は運搬業なり、試に市街阜頭に至れば彼等は腕力に訴へて以て客を争ひ露の巡查之を制する更に一言を加へず右手に鞭を振て之を鞭撻し去るを見む其虐待するの甚だしき言語道斷と云ふべし、而して尙ほ彼等の蝟集し來る所以のものは本國に於て官吏より金錢を徵發せらるゝの苦よりは寧ろ鞭撻を加へられつゝも浦港に寄寓するを以て安全となせばなり、露人の支那人

に對する亦た斯の如し、數年前まで海岸の大略は俗に歐羅巴街と稱し支那人の通行を禁じたるが如き、又近頃浦港知事の夫人支那人が窓下を通行するを好まざ一令の下に其交通を停止したるが如き、其尤も甚だしきものとす、余嚮に車中某支那人に會ひ問ふて曰く何すれや斯る天與の美地を露國に與へしやと、彼れ平然答へて曰く條約締結の當時百里を千里と誤認し爲めに此地を失ふと彼少も意に關せざるものゝ如し、又た愛理城は滿州の重鎮なり、清國新に五十萬兩を支出して露國に備ふ、然るに一統督は揚言して曰く東清鐵路以北は盡く之を露國に與へし者なりと、等しく清國の地方長官にして一は銳意防衛を務めつゝあるに關せず、他は之を敵國の有なりと爲す、政令の一途に出ざるの狀思ふべきなり、北邊を顧るの餘地なく、清朝墳墓の地を擧げて之を魯人に委ね敢て不問に附せんとするに至つては、何ぞ夫れ清人の無氣力なる甚だしきや、嗚呼危ひかな清朝の命運、恐るべきかな魯國の南下露

國の清韓人に對する更に甚だしきものあり、現今人烟漸く繁殖するに從ひ清韓人の不必要を感ずる事漸く切なり、此に於て彼等の自由雜居を禁じ之を一團となし市外に追放し恰も居留地の狀をなさしむ、武府先づ之を行ひ、瀋陽府之に次ぎ、浦港も亦た之を強制せんとす、加之、韓勞働者の移住を禁止し其根元を斷たんとするに至る、此の如く露人の清人に臨む犬豚に對するが如しと雖も、而も支那人は支那人たる本質を失はざるなり、假令彼等には國家的思想は毫末もあらざるにもせよ、利欲的團結の強固なる彼等の經濟上に於ける勢力の偉大なる實に計るべからざるものあり、西比利亞に於ける經濟上の勢力は表面上獨乙人の獨占する所なりと雖も、其内部に至ては盡く支那人の占むる所となる、故に曰く支那人は假令露國の爲めに其領土を失ひたりと雖も、經濟上の利益に至りては更に數倍の多きを得るに至れり、と曰ふべし。

在留日本人の状態

今を去る凡ろ三十餘年前、慶應の末に當て既に本邦人の西比利亞地方に移住せるものあり、爾來年を追ふて其數を増加し、現今其數三千人の多きに達せり、此等同胞は如何に生活しつゝあるか乞ふ之を陳へん。

現今浦港に滞留する者約二千人、ブラコウヘチエンスクに在るもの三百餘名、瀋陽府ニコリスク及びニコライスクに在るもの各々二百名内外なり、此等各々團體を組織し俱樂部を設け以て相結合す、浦港の同胞會ニコリスクの靖齡會、武府の巴俱樂部等皆然り、浦港の日本人俱樂部には圖書館の設立さへあり、其組織最も完備せりと雖も、同港は人員の出入常に絶へず、殊に人員も尤も多き爲め團結の強固なるは一步をニコリスクに譲らざるを得ず、此等の目的は等しく在留本邦人の親和を計り、旅行者の爲め相當の便宜を計り、緩急相應するを以て主眼となす、時に或は慈善會を催し、或は相共に佳節を祝す、其關係の和熟せる感する

の外なきなり。  
 在留居民の多数は高等なる労働者なり、則ち技術の精巧を要し或は清潔を尊ぶ爲め露人又は清韓人の爲し能はざる時計修繕洗濯ペンキ塗石工大工等にして洗濯ペンキ塗の事業は殆ど本邦人の獨占に歸せるものと言ふも可なり、獨立の正業者としては寫眞業最も多く又た成功せるもの少からず、雜貨商を營むもの少なきにあらざるも何れも盛況を呈すること能はず、乍併之れ資本の薄弱信用の欠乏及び貯蓄心の素養なきに基くものにして、其方法設備の宜しきを得ば商業上決して望なきにあらざるなり。

日本正業者の振はざる原因

西比利亞地方在留本邦人の振はざる原因を探るに大畧左の如し  
 (一)資金の薄弱 西比利亞に於ける商業繁榮の時期は冬期に在り之れ初夏より仲秋に至るの間労働者は鑛山又鐵道事業の勞役に従事し冬

期に至るや彼等は相當の資金を貯へて都市に來集するを以てなり、然るに此地方たる冬期航海頗る不便なるが爲め夏期中に於て冬期六ヶ月餘の長日月間販賣すべき物品を供給貯藏するを要す、故に一時に多額の資金を要するは疑ふべからざる事實なり、然るに本邦人は何れも十分なる資金なくして其業を初むるを以て、一旦世人の嗜好に適ひ店頭繁盛を來たし稍々信用を博せんとする時に至らば物品は已に缺乏を來たし世人の需要に應ずるに由なく折角收めむとしたる信用も暫くにして地に墜ち遂に閉店する不幸に會す。

(二)協同的精神の缺欠 昨年天長節の事なりき、ニコリスクに於ける嗜好會は相集り國旗を揚げて佳節を祝せんとせるに、適々警部長は命じて國旗を撤去せしめんとす、居民大に怒り一面に於ては貿易事務官に電報を以て事由を陳述し以て例年の慣例に基く所以を辯し、他面に於ては相讓して曰く一旦我國旗を揚ぐ若し之れを撤去せば之れ降服す

るの證なり、國家の態面を汚すこと僅少なからず、宜しく死を以て擁護せざるべからずと、終に警部長をして謝罪せしむ、彼等愛國の精神に富める聽く者の意氣を壯にするに足るものあり、乍併此種團結一致の傾向は之を恒同なりと曰ふを得ず、之れ天下無事なる時に當て常に支那人に一步を譲らざるべからざるに至るの原因なりとす、支那人の商業をなすや彼等は必ず資本を一にし、唯一目的の下に盡力す、而して其收めたる利益に至りては各々出金額に應じて分配す、其經濟的の共同心の強固なる尙本邦人か愛國の熱情に異なるなし。

之れに反し本邦人の商業をなすや極端なる個人主義に出で、一度或種營業の利多きを聞くと旬日ならずして同業者各所に顯れ互に相争ふ、加之製造元に於ても目前の利益に汲々として其品質を粗悪にす、故に見本取引なる者は毫も行はれず、結局相共に其損失を蒙り全く世人の信用を失ふに至る、一旦信用を失ふや之を回復するには少なくとも二

倍の能力を要す、之れ本邦人の失敗する第二の原因なり。

(三)貯蓄心の缺乏 該地に渡航する本邦人は、多くは單身以て國を出て時機に會し多少の餘裕を得るに至りたる者多く、爲めに貯蓄なる觀念は毫末もなく、朝に千金を得れば夕に之を消費し、更に將來を慮るものなし、之が爲め在留本邦人は皆相當なる生活を營めるに關せず、本邦に向て送金するものとは毫もあらず。

以上の三原因は本邦人商業者をして成功せしめざる直接の原因ならんか、要するに之れ全く成功し難きにあらず、自ら成功せんと欲せざるなり。

在留 賤 業 者 の 状 態

吾人は今本邦賤業者の狀態を説き以て世人の同情に訴へ、以て善後策を講せんと欲するものあり、抑も本邦の在留居民堂々三千餘名、其敗決して僅少にあらず、而して其三分二は女性なりと言はば誰か奇

異なる感を起さるべき女性とは之れ賤業婦の代名詞なりと言はれ  
 更に奇怪の度を高むるなるべし予は素と之れ一介の學生のみ學生に  
 して此等の醜態を説く稍々其神聖を汚すの恐なしとせず乍去純白な  
 る學生をして茲に毒筆を弄し本邦女性の裏面を説き以て世人の同情  
 に訴へんと欲するに至らしむる所以のもの果して之れ誰れの罪ぞ諺  
 に曰く、袿衣法を説かず凡俗反て法を説くと予の茲に論ずる所以のも  
 の亦た之に外ならざるなり現今該地方に在る本邦賤業婦は凡そ二千  
 に近からんとす浦港を初として少しく繁榮なる都市に於て二百乃至  
 三百の賤業婦を見ざるなく數百の人口を有する村落に於ても往々に  
 して其在住するを見る單に東部西比利亞とは言はず遠く中央西比利  
 亞に於ても滿州の中心に於ても露國並に支那人の賤業者は一もあら  
 ざるに獨り日本人は少なきは四五多きは十餘軒を列ねて營業す嗚呼  
 此果して帝國の光榮なるか否か

彼等は多くは肥前天草島原邊の産なり又稀に北越地方の者を見る  
 彼等は氣船に乗り或和船により浦港に来る一航海必ず十餘の賤業婦  
 を見ざるなしと云ふ船の正に投錨せんとするや四五の本邦人先づ來  
 て船に登り下等船客中女性を見出すあれば彼等は直ちに契約を締結  
 す素より容貌の美醜年齢の多少等問ふ所に非ず唯々女性なる一要件  
 は以て賣買の目的を成就せしむるに足る如此して賣却せられたる女  
 性は則ち賤業婦となる彼等は本國に於て農業漁業の助力をなさんよ  
 りは愉快に且は安樂なる故を以て歸國の情は忽に消失す假令一旦歸  
 國するも再度渡來するを以て常となす此等の女性素より憎むべしと  
 雖も此等女性を誘拐する男子の處置に至ては其面に唾するも尙ほ足  
 らざるを覺ゆ乍去此等多數の本邦賤業婦の輸入せらるゝもの獨り彼  
 等の罪のみにもあらざるなり之れ露國の政策なればなり前述の如く  
 當地女性の比較的少數なる爲め其缺乏を補ふの要あり之を本國より

せんか道途遠遠経費多端に上る故に露國は百方本邦女子の輸入を奨励す、則ち露國は其日用品に至るまで殆ど禁止的租税を課するに拘はらず賤業婦のみは毫厘の課税をもなさず加之自ら發達せしめんとする都市の一端に於て先づ娼樓の開業を許可し暫くして之れを中心となし幾多商賈の蟬集し來るや政府は更に之れを他所に移轉し以て土地の繁榮を來さしむ此方法は獨り一都市内發達方法として採用するのみならず全般の未開地間耕の方法として之れを利用す、則ち繁榮なる都市に於て漸次課税の方針を執り以て利益上之れを他所に導くのみならず露國は自ら保護を與へて新開地に向て本邦娼樓の設置を誘導す故に中央西北利亞に於けるチタ、滿州、鉄道を中心ハルビンに於て未だ一日日本人を見ざるに既に娼樓の開業せるを見る、數十年前に於けるコザツク屯田兵は西北利亞の荒野を開くの先鋒なりしかども今や日本の賤業婦は之れが先鋒を務むるに至れり、豈に驚くべきの事實に

あらずや加之本邦商賈の資金薄弱なる未だ純然たる正業を以て十分利純を占むるに由なし、從て最も利益の大なる賤業を兼ね行ひ以て收支を償ひ、他日獨立の基礎を形成せんとする者又少からず、此等の諸原因は相續て本邦賤業婦の輸入を奨励す、此を以て浦港武府等繁榮なる都市に於ては賤業者は全く正業者の爲に壓倒され毫も勢力なしと雖も、新開都市に於ては正業者は賤業者の爲めに使役せられ金融上の權力は全く賤業者に占めらるゝ傾ありニコリスクの如き則ち之なり、ハッロフスクは實に其中間にありて兩業者の衝突頗る甚しきものあり、予のロンドンホテルに在るヤホテルの本邦料理人某予に告て曰く、露人は本邦人を擧げて賞賛せざるなし、乍去憫れむべき此等賤業婦の爲めに其聲價を墜す幾何なるを知らず、殊に本國商業者の信用を害するに至ては更に甚だしきものありと感慨の情外に溢れ切齒して之を悲むと久し、然るに一方に於て賤業者は曰く、西北利亞の地未だ正業を以て

獨立し得べきの地にあらざ、現に本國に幾分の送金をなす者は獨り我等のみ我等は實に國家の富を増加しつゝある者なりと、嗚呼賤業者をして國益を口にせしむるに至る之れ果して誰れが罪ぞ、予滯港に在り財囊を擧げて馬車を僱ひ意氣豪然自ら天下の大臣を以て任ずるの時賤業婦も亦た堂々として馬車を驅り來るに會す、予が胸中果して如何若し夫れ露人と相携へ公園を散歩するとき彼問ふて曰く彼女も又た貴國同胞にあらざやと、予答ふる處を知らず嗚呼外に對して眼中敵なきの男子も同胞女性の爲めに幾多の羞辱を蒙り幾多の感憤をなす、惡むべきかな賤業婦、嫌むべきかな誘拐者。

露人の日本人に對する感情

恐露病は我國人の通弊なり、露人を目して猛鷲と爲す、予何の故たるを解せず、予の見る所を以てせば露人の我國を恐怖する更に甚だしきものあるが如し、從つて本邦人に對する注意頗ぶる深し、乍併其程度も地

方により稍々差異あるが如し、則ちハバロフスク、ニコリスクの如く軍營地に於ては其注意頗ぶる嚴重なりと雖も、武府の如き商業地に於ては大に其趣を異にせり、現に予がハバロフスクに於て前述したるが如く予等を日本の官吏なりと誤認し探偵を附せられたるが如き、又ニコリスクに至る路上巡查の爲めに審問せられたるが如き、其一般を推測するに足る、要するに賤業婦の多きは稍々本邦人の地位を害するものありと雖も、日清戦争後著しく我が聲價を高め歐米人と同一視せらるゝに至れり、路上清韓人が露人と會せんか彼は腕力を以て其道を開かしむ、乍去本邦人に對しては必ず其道を譲ると、又在留民は盡く口鬚を貯ふ之清韓人と誤認せらるゝを防ぐ策なりと、又以て其一般を知るべし、予の該地方に遊ぶや學生として到る處露人の優待を受け内國に於ては到底望むべからざる便宜を得たり、之れ全く露人の交際的性質によるべしと雖も、歐米人の學生に對する觀念は、本邦人の書生に對する



思想と相反するに由らざるばあるべからず。露人の性質は頗る遲鈍にして且つ遊惰なり予のニコリスクに至るや恰も東部西比利亞の大演習初日に會す適々降雨あり則ち旅團長某副總督に打電して出發の延期を乞ふ副總督大に怒り即時出陣を命し漸くにして其緒に就けりと又た聞所によれば三國干涉の當時露人が日本人を敵視すると甚だし其理由に曰く日本にして支那に勝つなくんば我等此回の出征なし我等の出征は日本人の勝利に基くと以て之れを證するに足らんか露人は性質頗る神經的なり故に能く人を疑ふと雖も又た深く人を信ず本邦人の露人と争闘するや常に本邦人の勝利に歸す而して一度和解するや彼則ち乞て曰く予に一本の煙草を與へよ先に争闘したりと雖も今は亦た親友たりと言ふが如き又ハハロフスク於て予が一旦官人と誤信せられたるも其疑義氷解するや疑は變して信用となり大に優待を受けたるが如き此を證するに足るべ

し露人は性頗る形式的なり彼の貴族と祭祀の多きを以て誇稱せるが如き又たハハロフスクに於て警部長より消防の演習を見せられ後消防夫を面前に於て叱咤したるが如き又博物館内に於て陸軍少將某予を先導する巡查を叱し何すれぞ此亂雜なる状態を外客に見せしめん之れ警部長の恥辱なるのみならず國家の面目に關すと言ひたるが如き其舉動の如何に形式的たるやを知るに足らん又露人は其の性質頗る寛大なり疑はれ何所までも疑ふべしと雖も疑義氷解せば又一點の隔離心なし之れを本邦人の猜疑心の深きに比すれば天淵の差ありと謂ふべし之れ一方は大陸的なると一方は嶋國的なると自然的地形は此差異を生せしめたるか要するに露人の性たる遲鈍にして且つ遊惰なり神經的なりと雖も而も猜疑心に深からず常に形式を尊んで頗る交際を好む此の性情を解し以て露人に接せば露人と雖も決して嫌惡恐怖すべきの人種にあらざるを知らん。

其九 東部西比利亞の經濟的觀察

東部西比利亞の經濟上の地位は頗る幼稚なり、其商權は裏面に於ては支那人の掌握する所なりと雖も、表面上に於ては獨米二國人の手に屬し、露人にして商業界に頭角を顯はすものは唯々セペリユーフ汽船會社及び兩黑龍江汽船會社あるのみ、他は盡く不生産的なる官吏並に軍人のみ、今尤も勢力ある獨乙人に就て其商業の方法を見るに、彼等は多くは露國に歸化し政府より特別の保護を受け營業しつゝあり、アルベルス、チユーリソンの二商店は西比利亞全般到る處に支店を有し、政府の御用商を營む、而して營業上毫も分業行はれず、此等商店は皆な大なる勸工場クワンコウバの如く、一商店に至らば贅澤品より日用品に至るまで大小盡く備はらざるなし、以て其幼稚なる事を推測するを得べし。

金融機關の設備も微々たるものにして多くは一私人に於て之れを兼

業する者の如し、兩三年前設立せられたる露清銀行は表面上露清權利平等なるを原則とするも、事實は全く之に反し、現時恰も露西亞銀行の支店の如く主として政府の出納を司どり一種の外交的政客的銀行に過ぎざるなり。

西比利亞往復の航海業

外國航海に従事するものに義勇艦隊及セペリユーフ汽船會社あり、共に政府より特別の保護の下に活動し、前者は平時商船として移民の目的を以て露國ヲテッサと浦港との間を航海し、一朝事あるや變じて戰爭に従事す、現今凡ろ十艘あり、後者は朝鮮旅順大連及ボシエツト、ニコライスク間の航路に従事す、其他獨米等の汽船浦港に入港するもの少からずと雖も、此等は荷主特約の上歐洲より貨物を輸入し來るものにして定期航海をなす者にあらず、純然たる定期航海をなす者は日本郵船會社と新潟汽船會社あるのみ、乍去該地に對しては輸入の物品のみ

ありて輸出の生産物としては更になく爲に常に片荷の状態を免れず、従て十分なる利潤を収むる事難しと雖も、少なくも其海上権は明に我邦の占むる所なるを思は、意氣豪壯なるを覺ゆ、又本邦帆船の往復比較的多數なること之れ又決して忘るべきにあらず、彼等は損害の恐れ少く且つ腐敗せざる種類の物品を積載し、本邦の北海岸より直接に浦港に來り之を賣却し更に黒龍江口なるニコライフスクに至る、該地は著名なる漁業所なれば、此所にて鮭を買收し本邦に歸航す、故に片荷の不利を避け漁船に比すれば利潤更に大なるものあり、殊に此航路は夏期は頗ぶる平穩危険なきを以て今後輕視すべからざるものとす。

燃料問題

露國が西北利亞地方を占領するや先づ地質的研究遠征隊を派遣し、天然の遺利殊に金及石炭に關する發見に従事す、爾來金坑は諸所に發見せられセイヤ河畔の砂金の如き世界に於ける著名なる産出地の一に

屬す、乍去石炭は殆ど絶望の有様なり、樺太及び浦港附邊に多少發掘せらるゝ者あるも其質粗惡にして漁船漁車等に供するに適せず、彼の露艦が小樽長崎に來港する所以のものは全く石炭積込の爲めのみ、朝鮮に於ける輓近の問題も全く其結果たること屢々論述したるが如し、故に現時汽船汽車及び蒸氣機關に使用する燃料は盡く石炭にあらざして薪なり、露人は曰く、領土内の樹木は殆ど無盡藏なりと、乍去鐵路の附近已に一の森林なく、黒龍江の水量は森林亂伐の結果其減少を來たし、漸く航行に不便を感ずるに至りたるが如き、又薪の價格年々騰貴するが如き、明に樹木の欠乏を證明するものにして、彼のペートル大帝がアソフ地方に行軍する際石炭の一塊を獻ずるものあり、帝曰く此鐵物たる朕が爲めに毫末も利益を與ふる事なしと雖も、朕が子孫の爲には非常なる効果を與ふべしと稱して、又曰く爾來二百年を経ずして石炭は緊急なる一問題となるに至らんと、此言は果して西北利亞に於て其真

を爲すに至れり。

聞くが如んば石炭の産出せざるは獨り東部西比利亞に於て然るのみならず、滿州鐵道線路の附近にも其産地なく、輓近奉天の近傍に於て二大石炭坑の採掘權を得たりと雖も、之れ果して評判の如く其坑なるや否や未だ斷言すると能はず、故に露國は西比利亞鐵道の燃料として尙ほ薪を使用せざる可らず、果して然らば火力の薄弱なる積込に時間を要する、共に鐵道の利益を半減せしむるに至るべし、獨り汽車のみならず、汽船亦た然り、現に黒龍江の汽船は一晝夜薪二十八サーション(一サーション七尺立方)を要す、之を以て一晝夜少くとも二回の積込を爲さざる可らず、之が爲に三四時間を無益に費すに至る、又製造場の蒸氣機關に於ても徒に機關の容積のみを大にして而も十分なる火力を得るに由なし、現に卅六馬力の蒸氣機關を運轉するに一晝夜八サーションの薪を要す、而して現今一サーション凡そ四五圓なりと雖も、薪の價格の騰貴

は年を追つて甚だしきを加ふれば、經濟上の不利實に言ふべからざる者あり。

若し新に大なる石炭坑發見せらるゝか、或は工業上に一大革新を加へ他國より石炭の輸入を計り、之を汽車汽船等に使用せんか、此等の機關は盡く其組織を改めざるを得ず、假令此等の損害は一時の事なれば以て忍ぶべしとするも、尙ほ一大困難の横はるあり、元來露國の殖民開墾の方法は屯田兵制度に在り、彼等平時に於ける主たる職業は農業にあり、るが如しと雖も、而も彼等の尤も利潤多きは冬期間樹木を伐採し、樺を利用して容易に適當なる場所に運搬し來り、此を薪となし、汽車並汽船會社と特約を結んで之を賣却するにあり、故に黒龍江畔到處薪は山をなし、汽船は隨時必要に應じて之を載積す、故に現今農民衣食の料は農業の收穫に非ずして薪料供給にありとす、然るに突然薪を廢止して之に代ゆる石炭を以てせんか、彼等は何によりて衣食の道を求めんや、此に

依りて是を見れば石炭問題は單に經濟的問題に止まらずして制度上の根本問題なり、一面に於て今日の狀態を維持せんか工業の開發交通の改善永遠に望むべからず、他面に於て之れが革新を計らんか西比利亞殖民政策を根本より打破せざるべからず、露國は二者の中間に介在し獨り苦めるもの、如し、單に石炭問題は經濟上制度上の問題たるに止まらず亦た軍事上の一問題なり、毎年購求する二萬五千噸の貯蓄炭は果して急に應ずるに足るか、事一度破れんか之を外國に求むること難かるべし、事茲に至らば露國が以て東洋に雄飛せんとする東洋艦隊義勇艦隊復た何によりて活動せんとするか、思ふに之れ全く囊中の眞のみに、故に露國は終に朝鮮沿岸に於ける石炭貯蓄所を得る必要を感ずるに至れり、故に吾人は露國が朝鮮に干渉する所以のものは盡く石炭問題を以て解釋するを得べしと信ず。

農工業上の状態

●農●業●上●の●状●態●  
 農業上の状態、牧畜業稍々進歩せるが如きも純然たる農業に至りては未だ開發の運に至らず、只僅に鐵道の沿道諸所に燕麥の植を付けられたるを見るのみ、現時ブラゴウヘチエンスクに於て二個の大なる製粉所の開業したる者あれども、其麥粉は概ね米國より輸入せらるゝを以て見れば其幼稚なる状態を推測するに足るなるべし。  
 ●工●業●上●の●状●態●  
 工業上の状態に至りては更に甚だしきものあり、唯だ燐寸麥酒、製鐵製皮の事業ありと雖も、燐寸は獨逸の特許機械に依頼し、僅に木の軸を供給する外盡く獨逸より輸入せらる、麥酒は所謂生麥酒にして品質頗ぶる劣等なり、製鐵所は鑄掛師の少しく進歩したる如く、製皮所に至りては全く原始製法に基く、殊に機械類に至りては一も露國製のものなく、盡く獨逸より輸入せらる、又以て如何に工業的智識の幼稚なるかを知らるに足らんか。  
 之を要するに東部西比利亞の經濟上の地位たる未だ獨立の經濟的組

議を形成するに至らず、盡く從屬的關係を維持するものと謂ふべし。

### 其十 結 論

露國果して恐るべきか、之れ現在に於ける緊急問題にして且つ其解釋に苦む處なり、或人曰く露國財政の狀態を知るの明あるものは以て天下の財政を掌握するに足ると、富めるか復た貧きか漢として之を測るべからず、乍去現時大藏大臣ウヰチーの策の如き殆ど露國の命運を賭せるものあるが如し、抑も佛は對獨の關係上露と親しむを利とす、露國も亦た自己防衛の目的を以て佛と結ぶの要なくんばあらず、之を以て佛國資金の大部分は之を露國に注入し、兩者經濟の利害を合同せしめんとす、然るに近來佛國も漸次露國の内情を疑ひ其の頼むに足らざるを觀破し又之を顧みざらんとす、於此露國々費の多端なる終に水火相容れざる英國に對し資金を得んと計るに至れり、彼のロンドンに於け

る公債の募集は實に其第一歩なりしなり、如何に其處置の大膽なるが吾人は此一事を以ても露國の處置は最後の手段たることを斷言するものなり、何となれば予が西比利亞に旅行するや主たる用語は佛獨の二國語にして我國の通用語とも稱すべき英語は殆ど其用を爲さず、之れ露人の全く知らざるにあらざる寧ろ敢て談ぜざるなり、露人は性頗ぶる神經的なり、故に英國を敵視するや其國語をも排斥す、獨り國語に止まらず物品に就ても亦た然り、排英思想の激烈なる想像以外に出づ、斯くまで仇視する英國に於て自國の公債を募集せんとするに至ては、豈に重大なる原因なくして可ならんや、其失敗に了る亦た自然の數のみ、此に於て魯國は更に米國に對し歡心を求めんとするもの、如し、一面に於ては財政上の必要に基き他面に於ては石油業の關係によれるなり、故に予が内地を旅行する際少しく精巧珍奇なる物品を有せんか、彼等は問て曰く之れ米國の製造に係るやと、聞く處によれば婦人の流

行も漸く佛を離れて米に近かんとすと、上の好む處下之れに習ふ之れ  
 專制國たる露國眞意の發動反影にあらざるなきを得んや、乍去往航予  
 と同船せし米人夫婦ありき、一日浦港を見て予に告げて曰く、何すれや  
 斯く非文明的なる浦港は須く米人の上陸すべき地にあらずと亦た其  
 の感情の一般を知るに足るべし、一は之れ自由平等を以て唯一の主旨  
 とせるなり、他は專制威壓を以て無上の良策とす、兩者の意思如何で合  
 致するを得んや、故に曰く露國は決して米國に頼ること能はざるべし、  
 然らば露國は如何にして國勢を維持し財政を整理せんとするか、近來  
 露國皇帝讓位の風説は漸く其勢力を高めつゝあり、其理由に曰く、皇帝  
 身体薄弱頗る過敏の性あり、然に現時實權を左右するものは母后並  
 に大僧正の一團にして皇帝は唯だ其員に備はれるのみ、抑も僧侶等自  
 己の地位を永久に維持せんには勢ひ專制政体を強固ならしめざるべ  
 からず、輒近法理の進歩は專制政体と相容れず、故に震天動地の大偉業

成功し世界の人心を收攬して以て威徳を發揮するに非ざれば、到底國  
 家の命運自己の榮譽を維持する能ずとなし、一面に於ては民主々義の  
 發生を防遏し、一面に於ては西比利亞大鐵道を計畫し、或は平和會議を  
 召集す、之れ素より帝の本旨にあらざるなり、此を以て帝は鬱々として  
 獨り樂まざり、殊に帝の男子を欲すること頗る切なり、然るに皇后亦た  
 女子を生む、於此乎深く現世を悲觀し、脱俗の希望漸く旺なりと、予其眞  
 偽を知らず、雖も又以て國情の一端を知るに足らんか。  
 平和會議は滿天下の注視の内に入りぬ、西比利亞大鐵道果して如何、予  
 は一日も早く其大成を希望するものなり、之れ尙ほ他人の庭園を利用  
 して自己の風光を助くるの類なればなり、露國は該鐵道の爲に既に三  
 億五千萬の巨額を費し、未だ事業の半分を成功せず、更に落成後年々一  
 千五百萬圓の損失を計算せりと謂ふ、加之今や亦關外鐵道の必要を感  
 じたるのみならず、舊計畫を復活し、或は愛璉線をも敷設せんとするに

至る、何ぞ夫れ計畫の大なる、此等の大計畫は果して盡く成功し得へきか、假令成功したりとするも、幾年の後收支相償ふを得るに至るべきや、殊に軍事上の目的に於て又荷物運搬の點に就て、吾は世人の稱道するが如く其効果の大なるを豫想する能はざるなり、乍去吾人は西比利亞鐵道を悲觀するものにあらざるなり、否寧ろ吾人は露國にして獨力成功維持し能はずんば自ら資金を醸出し尙ほ其完成の急ならん事迄をも希望する者なり、何となれば西比利亞鐵道は世界の大道にして文華の滑渠なればなり、其利益を受くるものは露國にあらずして實に我國なればなり。

更に露國が東部西比利亞に對する經濟的政策を見よ、何ぞ夫れ根本的誤れるの甚だしきや、該地方たる未だ經濟上の地位全く從屬的關係なる事前述の如し、故に衣食住の日用必需品に至るまで擧げて之を外國に求めざるべからず、其物價の高き自然の數のみ、乍去之を融和する途

決して絶無にあらず、一國政府たるもの宜しく其手段に出でざるべからず、然るに今露國の政策を見るに全く之に反す、彼の寒氣を防ぐに尤も必要なる酒、砂糖、紅茶に對し殆ど原價二倍乃至三倍の重税を課す、之等諸品は他國に於ては賚澤品たるべしと雖も、然も當國に於ては殆ど日用品なりと曰ふも可なり、此等日用品に對し禁止税に等しき重税を課して怪まざるのみならず、今後輸入の物品に對しては盡く課税せんとするもの、如し之れ露國が國內工業保護の目的に出で外國品を排斥せんとするの手段なるが如きも、保護政策の誤れる理論已に明なる所なり、又實際上に於ても之れ人民を苦むるの兇器にして決して人民を救ふの福音にあらざるなり、凡ろ一國の盛衰は其國の柱石たる階級の強弱に由りて定まる、思ふに露國の基礎は農民にあり、殊に西比利亞地方に於ける移民の目的は盡く農事なり、故に工業保護の結果は徒に農民の負擔を重くするのみにして、彼等をして進歩せしむるの所以に



あらざるなり露國は實に之を知れり、乍去經費の多端なる保護を名とし此を以て一部分を補ふの不得已に至れるなり、獨り困弊に苦むものは農民に止まらず官吏然り軍人も亦た然らざるを得ず、彼等は一定の給料を以て衣食せざるべからず、然るに衣食の料は租税と相比例す、故に賄賂行はれざるを得ず、政費の多分は官吏の財囊に注流せざるを得ず、而して此等經費の大部分は之れを本國に仰ぐ者なり、露國八千萬の農民、朝に白露を踐み、夕には星光を戴き、辛苦困難僅に收め得たる財資は盡く之れを極東に送り、彼等不生産的人物を養ふの料に供す、如斯して人為的の徵發は民の榮色を致さしめ、天然の飢饉は其の財本を涸渇せしめんとす、古來民貧にして國富めるを聞ず、露國の命運夫れ危ひかな、若し夫れ本國人民の膏血にして尙極東を濕すあらんか、他日賠償の時機あるべしと雖も、尙ほ此等の膏血は本國移民の財囊を豊富ならしむる所以にあらずして、徒に獨米人並に支那人の限りなき慾を満たす

の料たるに過ぎざればなり露國は自ら好て自己の臣民を苦め、以て外人の利潤に供す何ぞ策の誤れるの甚だしきや。露國經濟上の状態實に寒心すべきものあり、吾人は東邦問題を以て根本的經濟問題となす所以亦た實に茲に存す、故に我國對露政策も一に之によりて決せざるべからず、或人曰く露國の現狀は尙ほ羅馬帝國の末葉の如し、徒に領土を擴張し、以て自ら強敵に接し、遂に自滅するに至らんと、露國は嚮に戦はずして、黑龍江畔一帶の廣野を奪ひぬ、吾人は亦た一戦を交へずして、以て彼れを亡ぼさざるべからず矣。

“Eastward the star of Empire takes its way.”

## 白山黒水紀行

„Schreiben Sie aus dem Gedächtniss auf, was  
Sinnen—nicht aus der Phantasie.“

W. von Humboldt.

今夏學友兒玉秀雄氏と謀り、東部西比利亞行を企つ、七月廿八日東都を去つて再び歸來するに至る迄、日數五十四日、行程海路千七百七十二哩、陸路約六百哩踏破せし所の地朝鮮國釜山元山より東部西比利亞に於ける沿海州アムール州及び滿州黒龍江省の三國に跨る、余輩未だ嘗て大陸の地異境の土を踏まざる者、事とし物とし頭腦に印象を刻せざるはなし、今委く探て之を録せば徒に費紙を濫すを畏る、本誌録する所は易めて史的事實に關聯する者のみを蒐めたりと雖、旅行の順序道途の光景を叙するは記事の連鎖として止を得ざる所、特に此地方は邦人未知の地多し、特更に之を録す、亦後來實地踏査者の參考に供する所あらば生の幸榮何物か之に加へん。

七月廿八日、新橋發神戶に向ふ、全卅日午前九時、日本郵船會社相模丸

に乗船神戶港を出帆す、船中農科大學教授林學博士本多靜六氏あり、博士今夏學生を率ゐて畿内を跋渉し、大臺原山の植物帶を究め學生に大阪に於て分袂し、今や單身温泉嶽の登山を試んとして長崎に赴く、道途にあり、博士年少意氣豪宕頗る能く談ず、傍ら人無きが如し、甲板上安樂椅子を列ねて、淡路島山明石瀉の光景を歎美すと見れば、話頭轉じて獨佛洋行談に及び、更に一轉昨年博士が爲せるモリソン山探檢談に選り、其困苦艱難の情狀より、僞稱先登者たる獨逸人の蒙を啓き、終に第一探檢者たる名聲を博せられしに至る迄の顛末、語り盡すには門司まで一晝夜の航程未だ果てず、話は長崎に至る迄、打續きぬ、博士又余等の爲めに植物帶の變遷原始森林及び第二期森林の狀狀、さては黒龍江沿岸植物帶の狀況を縷述せられ、予等の行に裨益する處尠からず、特に茲に錄して博士の好意を謝する所以なり、船の馬關及長崎に碇泊すると共に約十時間、故を以て上陸充分に處要を辨ずるに足るべし、八月一日午

後六時、長崎出島、阜頭出帆、船の高牙島を後にするや、一碧萬頃、身は將に海外千里寂寥たる西比利亞の空野に客たらんとす、船駛走少時、已に夜色襲ひ來りて、四望暗淡、玉兔の旅情を慰むる者なく、環堵更に陰懷、客魂轉濃なり、海圖を開て案すれば、船は將に伊王島の燈臺を左舷に看、歐洲航路と岐れて朝鮮沖に向はんとす、吾若し今西せんか、身は上海香港より以て歐洲に遊ぶを得可く、北行せば以て西比利亞の寒地向はざる可からず、身は今後者にあり、聞く東都にあるの日坪井博士、八月二日を以て出發せらるべしと、二日は實に明日にあり、獨り甲板、上博士の健康を祈て去る、明曉船對馬と列び前方遙に絶影島を望む、午前十時、釜山港に着す、長崎より行程百六十五哩、對島の北端、鰐浦を距る海上三十哩、此日船長予の爲めに海圖を指示して曰く、日本海に於ける冬季等、壓線は浦鹽斯德及近傍を通過する者、最高にして西方に至るに從ひ、抵氣壓となる、從て冬季は對岸大陸より北西の寒風來り、朝鮮海峡に於ても日本

より至るには逆風を免れず、之に反して夏季は最低壓線、朝鮮東岸にあるが故に、風向は東南にして對馬より朝鮮東岸に至るを常とす、之を以てか五月より八九月に至るの候、日本漁船の航行する者多しと、是を等温線圖等、壓線圖に徴するに實に其言の如し、據て按に豊公征韓の役、小西行長三月十二日元文錄軍を率ゐて對馬に着してより、空しく三十日の日子を此地に費消せしもの頗る偶然にあらざるを知るなり、征西日記曰三月十日、平戸有馬大村之衆、而渡海泊船於對之府浦、而して四月十二日、以て出發せし、同書及吉野甚五右衛門、小西一行記等に據る大陽曆四月の候は、未だ北西風起りて小船の航行に適せず、況んや水軍の渡海をや、五月東南若しくは東北風の起るを待て進軍の令を發す、一兵を損せずして上陸の功を全ふせし者、小西宗兩將海路暗熟の結果に外ならざる可し、小西行長海路暗熟の古、今武家盛衰記等に據る當年の豊太閤、小西宗兩將を先鋒とし、清正をして壹岐對馬に滯陣して其報を待しめたる、其配置の慎重人を用ゆるの明至れる哉、更に想ふ、昔神功征韓の役時、正に冬十月、逆風往々至るの時とす、然るに書

紀其航海の状を記して曰く、時飛廉起風陽侯舉波海中大魚悉浮挾船則大風順吹帆船隨波不勞楫楫便到新羅是豈に出陣の吉瑞を示す形容に外ならんや、假りに皇后乗り給ふの本船は順風の日に出帆したりとするも、軍隊輸送は當時の如き不完全なる船舶を以てして能く數日の内に結了し能はざりしなるべし、而して其數日間悉く順風とは事實如何あらん乎、予は當時北西の寒風襲來の時期と及び文錄の役とに比して神功征韓の役は爾く容易なる航海にあらざりしと信ずる者なり、こは予が釜山港頭着船當時の感想とす、いまだ日記中より此一節を採萃して當時の感想を表現するのみ。

### 其一 釜山及元山附近の史跡

釜山港は慶尙道の南岸洛東口の東方、北緯三十五度五分三十五秒東經百二十九度一分二秒に位し、港灣は東方に向て開き、絶影島其南方を蔽

ふ、此地は嘉吉三年以來我國と互市の規約を定め、維新以前迄對馬の宗氏専ら此事を管掌せり、明治九年の條約に依りて公然開港互市の區となり、現今我國專管居留地たり、其廣袤大凡十萬坪、一里以内は土地所有權を有し、市街の配置家屋の構造より萬般の生活に至る迄、一として純然たる日本市街ならざるはなし、現今人口五千九百二十八人、本年六月調山口縣人最多數を占む、然れども當港富豪を以て鳴る者は多く對州人なり、蓋し對州人は此地最古の渡來者にして根據を此地に築き以て今日の隆盛を來したるに依る、對州と釜山好箇の史題に非ずや、予の投じたる旅店大池某又對州人にして文久年間渡來して今日に至る、身自ら釜山開港以來の活歴史なりと稱せらる、不幸此日他行して在らず、遂に之を聞くの期を失す、按ふに釜山は我國の模範的專管居留地なり、嘉吉以來我國の通商地とし、殖民地として發達し來り、遂に今日朝鮮に於ける我國民商業上の特權を掌握するに至れり、我國外交史商業史上

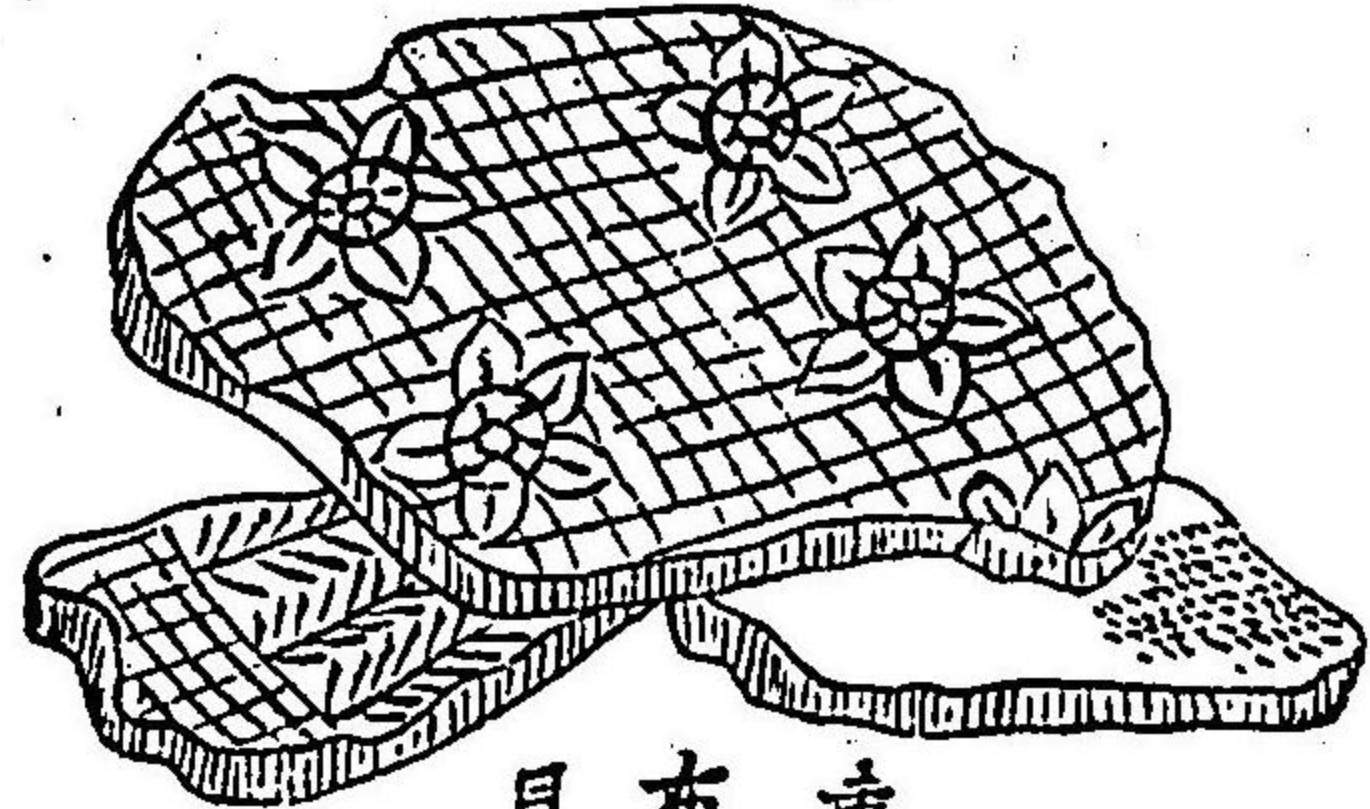
の研究地に非ずとせんや、特に平戸貿易時代に於ける平戸と釜山亦興味ある問題なるべし。明且早起、大雨を犯して港の北端開成學校を訪ふ。本校は前警務官朴琪滄氏等の設立に係り、荒浪平次郎氏校長として専ら韓人教育に従事せらる、學級を分つて初等科中等科高等科の三科とし、高等科は専門科を置きて經學、史學、文學、政治學、經濟學、哲學等に分つ。現今韓人の在學生八十名、設立日猶淺きを以て今年中學科二年の課程を最高とすと、歴史教科書として林氏朝鮮史及萬國史要等を用ゆ。釜山港の東北一里に釜山鎮あり、其東草梁に大東館あり、宗氏の使臣來て慶吊の禮を行ひし所なり、東萊は即ち東南海上倭人陸に登るの地にして昔和館を南海の上に築き本柵を以て限となし、兵士をして常に之を守らしめ、毎歲對馬の人來りて茲に館せし所なり、三日、午後一時解纜、午後三時頃蔚山を四漚コーターに望む、四日、午後五時元山に達す、釜山より三百十漚、元山港は永興灣の南にあり、北松田灣一名ラザと遙に相對し、

西北長徳山を背にし、東は海に面し、長徳島其港頭にあり、南は赤田川を隔て、元山里と相望む、沿岸丘阜斷續、我專管居留地は其北方海濱にあり、明治九年日韓條約に據り、同十三年五月に開港す、居留地より元山里に至る凡そ半里内に交濟倉元山倉等あり、夫の八域誌に、朝家倉を此に設け慶尙道の穀を運し、倉内に儲蓄、北路凶荒なれば列邑に船運し、賑資となすと稱する者は蓋此倉庫を謂ふなり、實に元山港は朝鮮東岸に於ける唯一の港灣にして、咸鏡道に至る貨物は多く此地を經過す、咸鏡道の地勢たる長白山の支脈なる大關嶺山脈は、其西部に蜿蜒して平安道のの界を畫し、以て狼林山を起し、元山より平壤に踰ゆるには馬息嶺の峻峻あり、江原道に至るには鐵嶺あり、此の如く其西南部は縦貫山脈の闔塞する所となり、大抵七八千尺の高度を有するが故に、物品の交換貨物の轉送一に之を元山港に仰がざる可らず、是を今に徴し、古に推すも、八域志に所謂北路凶荒列邑船運の語は、古來貨物の發散地たるを證

するに足る可し、元山里の西方路傍一石碑あり、因朝命出帖永禁碑の八字を刻す、官吏の漫りに出張して民弊をなすを禁ずるの意なりと、此の如き碑を我國に求めて何處にかある、此一石碑は朝鮮官吏の狀跡を説明して餘りありと言ふ可し、更に三四丁一小丘あり、丘の上下石碑累々たり、皆府使或は城主の紀念碑なり、是より西を銘石院と稱す、山腹方丈の一空地あり、李大祖曾て射を茲に學ぶ、後翼祖石に銘じ標跡とす、銘石院の名實に之に基くと云ふ、但し碑銘苔蝕浪没して今讀むと能はず、元山里の西北一里半、德源府あり、路極めて平坦、其兩傍稻稈葎相交り、遙に茅簷相連なるを見る、由來韓人肥料を用ゐざるも、尙此生育を爲すと云ふ、以て其地の膏腴を知るに足る、李氏の祖先居住地として知られたる湧珠里は此地にあり、然れども朝鮮の風、其先王古跡を重んじ、敢て他邦人の經過するを許さざるが故に見ると能はずして止む、其他此地方の史的遺跡地としては、德源郡北方の地境に里俗清正山と稱するあり、清

正の城跡並びに其地形歴々指摘し得可しと云ふ、東亞同文會城津派員、笹森儀助氏、予が爲に元山時事刻する所の清正山の圖及其山腹に得たる瓦片數枚の圖を贈らる、今其瓦片の圖を描寫して讀者の覽に備ふ、又安邊郡雪峯山釋王寺境内韓國大組手植の松の碑あり、而して松田灣の北方は内湖灣、其後方の平野は則ち咸興の沃野にして成川江流域地なり、咸興は實に其合流點に位し、元山を距る二十七里、文錄の役鍋嶋氏據城の地にして其地形

瓦片形紋表



表布目

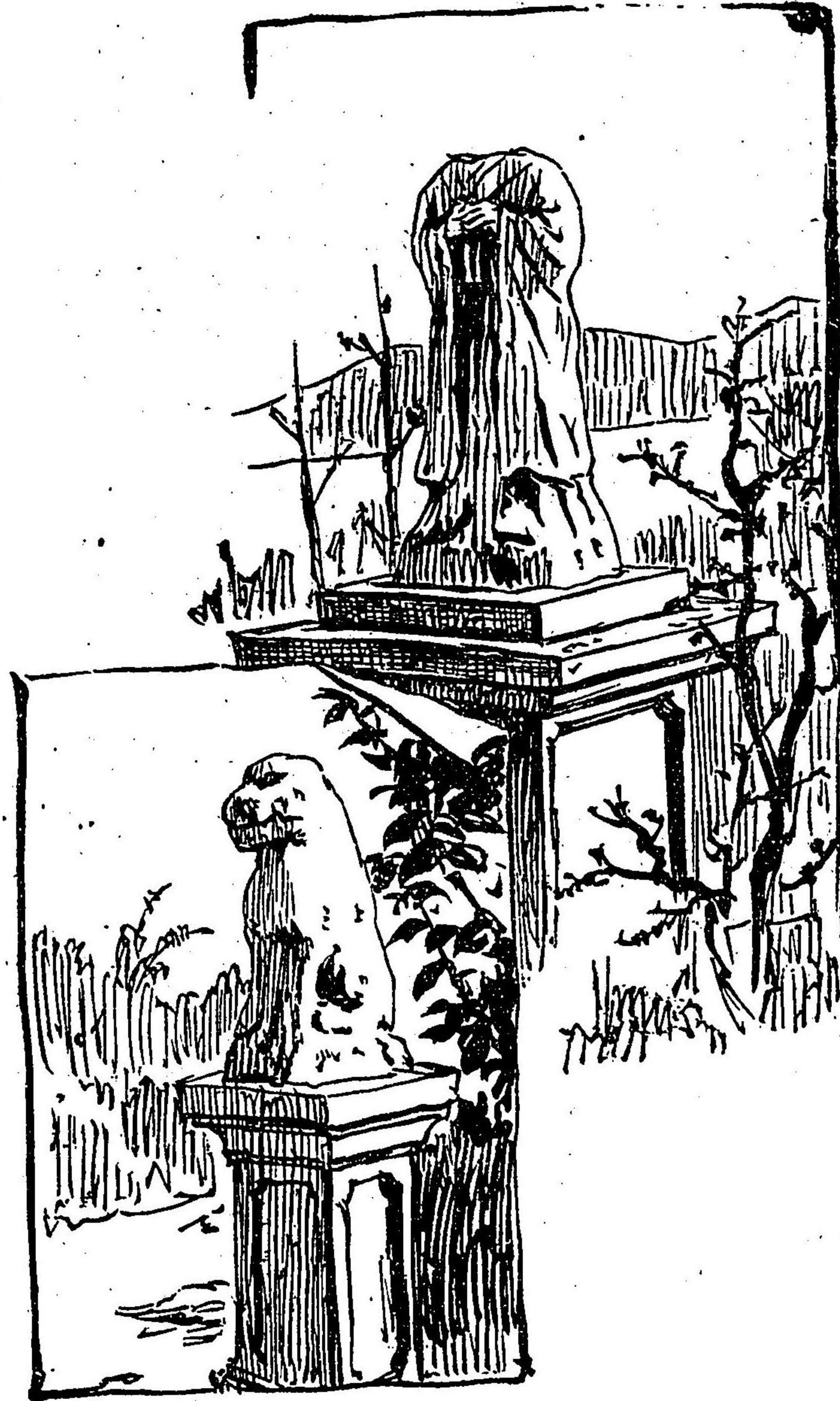
要害形勝眞に李成桂發生の偶然ならざるを知らんと、古玄菟沃沮城及びロツス氏沿革圖記する所の渤海新羅道共に此地に當る、頗る踏査を要すべきの價値ありと信ず、予其行遊を勤められしも、短時日の碇泊遂に果す能はずして止む、五

日午後五時解纜六日終日航行午後遙に白頭山を望み日暮圖們江沖を過ぐ此夜濃霧船の進行を止む七日早曉霧霽れ船を進む已にしてスクリアレフ島燈臺の側を過ぎ東ボスフォル海峡に入り午前九時頃浦塩斯德港に達す元山より三百廿哩。

### 其二 浦港博物館に於ける史的遺物

浦港は一名ソロトイローク港金角港と稱し清の版圖たりし時海參崴の地なり千八百五十六年英船ウエンチエストル號來りて以來初めて航海者の知る所と爲り次ひで六十年露船マンツニール號の占領となり越えて翌千八百六十一年露清條約に依りて初めて露國の版圖に歸せり此は我國樺太交換事件と共に露國が東洋平和的進略の一部を奏功したる現象なりと稱せざる可らず爾來四十年銳意開進の方向を計り露國が十七世紀以來西比利亞に對する計畫は殆んど主義一貫して

浦港に於ける萬般の設備あらゆる計畫に於て表現せられつゝあるを見るなり實に露國の西比利亞經營は其方針に於ても其事業に於ても浦鹽斯德の地に於て是を代表せりと稱するも過言にあらざるを信ず露國西比利亞經營史を論ずるの士必ず先づ一見せざる可らざるなり何となれば過去に於て史的事實たる露國の政策は猶ほ現在に於ても繰返されつゝあるを以てなり予は今總て此等の諸點を省き讀者に向て第一に紹介せんと欲する者は浦港博物館なり蓋此地方に於ける史的材料並に地學的材料は善く館内に蒐集せられて漏す處なきを以てなり博物館はニコライ門に近く公園内に設置せられ館の前庭三個の石像及一個の石碑を安置す共にニコリスクに於て發見する所なり其二個は僧侶の立像にして共に頭部を存せず一は狛狗と稱する者にして我國の者と稍形状を異にす其石質は粗にして堅く三個共に無文其製作年代を知るに由なし吉田東伍氏日韓古史斷此石人石獸を載録し



て、渤海の作にや女眞の作にやと言はれたれども、其形状及び技術は現今朝鮮地方に於て發見せらるゝ者と頗る相類す、寧ろ朝鮮北部よりの輸入品たるが如し、特に古史斷載の所の石人は如何なる故にや背面のみを表はされたり、余別に其正面を撮影せしめて歸る前頁に擧る所の者即ち是なり、然れども若し果して渤海女眞の作なりしならんには、セームス氏長白山が所謂肅慎東方黄金時代の技術を示すに足る者と謂ふ可し。

他の一個は其上部圓形を成し、正面は模糊として飛龍の形を見るとを得可く、其背面は一見文字を認め難しと雖も之を諦視すれば僅に文字の存するを見る、一字の大き縦約三寸横二寸五分位に及ぶ然れども字跡磨滅僅に二年十一月の數字を認むるも其必要部たる年號は遂に讀み難し、寶山に入て空歸の思ありと雖も又如何とも爲すこと能はず、然れども若し完全なる機械と用意とを以てせば讀下し難きにあらざる



可し乃ち其意を在留日本人に通じて摹寫を依頼し置けり、若し其年號判然するの期あらば自ら他の遺物の年代も推定せられて史上第一發見を爲すの價値あらん歟。博物館の内部は清楚たる三大室に依て區別せらる。其陳列法の如き取て充分なる分科的陳列法に據らず頗る雜然たる觀ありと雖も、大体に於ては動物、植物、人類、歴史の五部に分ち、第一室は主として歴史的遺物、水陸産動物、礦物、農産物等を配列し、第二室は人類學的材料として西比利亞土人の製作品、特にカムチャツカ、ゴロド、ギリヤック人種等の物品大部分を占む、第三室は書籍室にして傍ら森林植物の材料を陳列せり、以上此等の諸材料は悉く西比利亞各地方に於る生産物並に歴史的遺物にして、坐して研究し得るの材料と便益とを供給せり、而して此等の史的遺物の中に於て、余輩の最も注意を惹きたる者は、永寧寺記及び重建永寧寺記と題せる二個の石碑なりき。

### 其三 ナルに發見せられたる永寧寺碑

此石碑は黒龍江下流ニユラエフスクを上る百五十露里餘なるナルの岩上アムクン河口に對する地に於て發見する所なりと云ふ、其石質は粗にして堅く、臺石は花崗石に類す、前者は碑面の高さ一メートル零五、幅零メートル五、厚さ零メートル二・五に及び、臺石は其高さ零メートル五、其正面の廣さ零メートル七、側面の厚さ零メートル五なり、其正面刻する所の文字一は上額、永寧寺記と横書し、他は重建永寧寺記と書し、二者殆んど同形同質なりと雖も、後者は前者に比して稍大に幅も又廣し、碑文は兩者是を異にす、其前面刻する所の文字は正楷なる漢字體なりと雖も、欠損せる文字頗る多く一見模糊として解し難し、然れども之を諦視すれば讀下し得る所の文字並に其内容は歴史上頗る有益なる事實を含有する者の如し、今余が一覽の際影寫せる所の寫真に據り

て其内容と建設年代とを示し併せて大方史家の注意を煩はさんとす。  
永寧寺記碑文の全文に曰く、磨滅せる所は○を以て示し推測に依りて填充したる文字は「」を附す

勅修奴兒干永寧寺碑記

○伏聞天之德高明故能覆幬地之德博厚故能持載聖人之德神聖故能悅近而服遠博施而濟衆洪惟我

朝統一以來天下太平五十年矣九夷八蠻梯山航海駢肩接踵登瀛於闕廷之下者委莫枚舉惟東北奴兒干國遠在三譯之表其民曰吉列迷及諸種野人雜居焉皆○○慕化未能自至况其地不生五穀不產布帛畜養

惟狗或野

○物如○捕魚爲業食肉而衣皮如弓矢諸般衣食之艱不勝爲言是以以下不明○女直國○告矣  
○而巢居永樂九年春特遣內官亦失哈等卒官軍一千餘人巨船二十五艘復至其國開設奴兒干都司○遼金時思邊故業越○今

日復○○○矣

○○○○朝○○都司○餘人(以下不明)

○○○○印信賜○衣○○布鐵伏○馬○依土立典威服集○部人民使之自相統屬十年冬

○命內官亦失哈等載至其國○海西抵奴兒干及海外若夷諸民賜○

婦以衣服器用給以穀米宴以酒食綵繒○懼忻自至彼便化不率者

○○○絡繹地而建柔化斯民使知敬順

○○○相○之○十一年秋卜奴兒干○有闕滿涇站之左山高而秀麗先是已建觀音堂於其上今造寺塑佛形勢閑雅粲然可觀國之老幼遠近濟

々爭趣○○○曰

(九字磨滅)威○永無屬疫而安逸矣既而曰亘古以來未聞若斯

民之上所下至吾子々孫々世々臣服永無異意矣以斯觀之萬方之率土

之民不飢不寒歎○感戴拜矣堯舜之治大稱治有不過九州之內外我

〔九字磨滅〕蠻夷戎狄不假兵夷莫不朝貢內屬中庸曰天之所覆地之所載日月所照霜露所墜凡有血氣者莫不尊親故曰配天正謂我民○○○至誠無息與天同體○無尙也○盛○故爲文以記庶萬年不朽云爾

永樂十一年九月○○日

張童兒○○張定安○○○○鎮司將軍都指揮同知康旺

鎮撫總正千戶王迷失帖百戶王木哈里○○○衛○○○失秃魯若弟秃花哈妻叭麻

指揮○徹里○○○○王謹○○○弗提衛指揮儉事秃稱哈○毋小彥

○○男弗提衛千戶納蘭○○

千戶○吳者因帖木兒○○○○兀頁哈○朱誠○王五十六○○

○○黃武○王

百戶高中劉官永奴孫○得試○○政李敬劉襄因不花傳○○黑帖

木兒韓○張甫金○○○○遷葉張

○趙鑽古奴王官音保○王阿納○○○○○○康速哈阿哈赤白李道安〔九字不明〕李速右

所鎮撫王○得賢○宋不花王速不哈李海亦高多都○李均美都○席○○醫士陳恭郭○○○○總吏黃顯

監造千戶金奴鎮撰碑記行人銅臺邢樞書舟寧憲○○書蒙古字阿魯不花○女直字康○○○○鑽字匠羅泰安

來降快活城安樂州千戶王兒卜○木苔兀卜黑哈衛鎮撫司阿黑阿刺卜百戶阿刺帖木○納所鎮撫賽因苔不花秃不花○黑○火羅孫

○自在州千戶○刺○哈弗○的阿里哥出百戶滿秃失○木匠作頭石不哥兒○金卯白揭英○○粧望匠方善慶宋福○○漆匠李八回

○○○見史信郎燒磚瓦○匠摠旗熊閩軍人○○○泥水匠王六十○張察罕帖木兒都指揮同知康旺 都指揮僉事王肇○○修

苔刺哈○〇經歷劉興○〇核劉妙勝  
 以上擧ぐる所の碑文に依て見れば其建設年代は永樂十一年にあること明なるべし、而して其年は明太祖即位四十五年の後にして今を距ること四百八十六年前なりとす、而して文中安樂州とあるは明の三萬遼海二衛及び安樂州と稱せし地名にして實に明太祖洪武八年建設せられたる遼東都指揮使司の管轄に屬したる二十五衛及二州中の一州なり、又此地名が初めて史に見えたるは明史地理志に安樂州永樂七年置在三萬衛城と及び同史外國傳瓦剌の條に明年永樂七年夏封馬哈木爲特進金紫光錄大夫順寧王太平爲特進金紫光錄大夫賢義王把禿孛羅爲特進金紫光錄大夫安樂王とあるを以て初めとす、又滿涇衛及び弗提衛は大  
 明一統志及盛京通志に據れば並びに永樂十年置く所となす衛名なり、奴兒干都司は永樂七年置く所なること大明一統志に詳なり、又碑記を撰せる行人邢樞は殊域周咨錄に其名見え、而して文中の人種名なる苦

夷は樺太島民にして、吉列迷は現今黑龍江下流に住するギリヤック人種を云ふ、然れども此等の事實は特殊の史學研究に屬するを以て遠からず別に雜誌紙上に於て識者に問ふ所あらんとす。  
 但し此碑に就て第一に研究すべき問題は、永寧寺なる寺名と並に其發見地たるチルの地理的位置とにあり、今永寧寺なる寺院をしてかの洛陽伽藍記にある所謂永寧寺なりとせんか、其年代よりするも地理上よりするも固より信ずる能はざる所若し之を年號に採りたりとせんか、永寧なる年號は後漢の安帝即位十四年と晋の惠帝即位十二年との兩度なるを以て亦頗る時代を異にせり、其他に至ては余の淺學なる未だ永寧寺なる寺院の存在せしを知らずと雖も、他例に依て之を考ふれば洛陽に於ける者と同一なる寺號を採りて、明時代に此の如き寺院西比利亞地方に建立せられたるとは明なり、元來チルの地たる現今露領西比利亞沿海州の一市、黑龍江の下流に位しソフヒースクより下ること